
IS～女の子になった幼馴染

ハルナガレ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 女の子になった幼馴染

【Nコード】

N7555V

【作者名】

ハルナガレ

【あらすじ】

まあタイトルでわかると思いますが、この作品は一夏に男の幼馴染がいてその幼馴染が女の子になってIS学園に入学する話です。TS物です。一応一夏とオリキャラとの絡みがメインストーリーになる予定です。恋愛まで発展するかは今の所考えてはいけません。駄文ですがよろしかったら見てってください。

遅れて現れた幼馴染

「あゝ、久しぶりだな我が家も」

IS学園は今日は休みなので、俺は久しぶりに家に帰る事にした。理由は単純にそろそろ季節が夏に近づいたため、夏服を取りに来たのと定期的に掃除しないと家が埃まみれになるからだ。ちなみに今回家に帰る事は誰にも言っていない。何故なら

「誰かに教えたら絶対皆付いてきそうだもんなあ」

箒達に言えば絶対一緒に行くと思はれるのは間違いない。別に箒達の事が嫌いというわけではないが、家の掃除と替えの服を用意した後弾や和馬達に会いに行こうと思ってるため、皆には黙っとく事にした。理由は

「たまには男だけで騒ぎたいからな……」

IS学園に入学してから周りは女性しかない。ハーレムと思う奴も多いが、その状況がずっと続くとやはり疲れてくる。箒達が悪いというわけでなく、一緒にいると楽しいのだが性差つてのはやはり大きい。男女の違いというだけでやはりどこか心の中で相手に対する遠慮みたいなものが産まれてくる。同性の遠慮のない会話つてのが出来ないのだ。

「さてと、弾達を待たせるのも悪いから早く終わらせるか」

居間、廊下、台所、千冬姉の部屋の順に掃除し、最後に俺の部屋を掃除する。まあ先月掃除した時から一回も家に帰って無いため、たいして汚れてないからすぐに終わっていく。掃除を済ませ押入れから服を引っ張り出し、持っていく服を選んだ。

「よし、こんなもんだろ。弾達と遊んだらまた家帰って荷物取りに行けばいいか」

荷物もまとめたし部屋を出ようとしたら、俺は机に置いてある写真立てが見えた。中学二年の春に撮った写真で、そこには俺と弾と鈴と……

「そういえば、あいつ元気にしてるかな…」
二年前の写真には、6歳の時から俺とずっと一緒に遊んでいた、男の幼馴染が写っていた。

「ちよつと一夏！今日は黙ってどこに行ってたのよ！」

久しぶりに弾達と男同士でバカ騒ぎしてIS学園に帰ってきたら、アリーナで自主練を終えた篤、鈴、セシリアの三人と出会った。

「そうですねよ一夏さん！黙って学園外に出るなんて！買い物とかでしたら私を誘ってくれてもいいですよに！」

「一夏、黙ってどこ行ってたんだ？」

俺が黙って外出した事に不満な三人。おそらくここにいないシャルルやラウラも同じだろうな

「いやちよつと家から服取りに行ったんだよ。それに久しぶりに弾達と会いたくなつたしな」

「弾と？なら私も誘いなさいよ。私も久しぶりにあのバカの顔見たいし」

「悪い鈴。ちよつと男同士だけで話したい事もあつてな」

「なによそれ」とぶつぶつ言う鈴。

「弾ってどちらさまですか？」

「確か一夏と鈴の中学生の頃の友達だったか？」

「そう。IS学園入学してからあまり会ってないからな。今日は旧友を温めてたつて訳」

そういうと三人とも納得したようで、俺を非難した眼差しは無くなっていた。

「弾達で思い出したけど、……一夏はあいつからは何か連絡あつた？」

どこか遠い場所を見ながら鈴が俺に訊いてきた。その顔は寂しそうな顔をしていた。

「…いや前にも言ったが一度も無い。あいつは二年前置手紙残して消えたきりだ」

俺も寂しそうな顔してるだろうなと思いつつながら答えた。

「一夏、もしかしてあいつとは葵のことか？」

「俺もどこか寂しそうな顔して俺に訊いてきた。」

「ああ、あの野郎本当にどこ行つたのやら」

「あの皆さん…、一体誰の事について話されてますの？」

セシリアが頭に？マークを付けながら尋ねてきた。そういえばこの場で葵の事を知らないのはセシリアだけだった。

「ああ悪いセシリア。さつきから鈴や篤が言つてた奴は青崎葵って名で俺の親友。そうだな篤が女のファースト幼馴染なら葵は男のファースト幼馴染って所だ」

「親友ですか」

「ああ、一夏と葵は本当に仲がよかったぞ。そして私の所で一緒に剣道を習っていたから、私の幼馴染でもある」

「まあ私にとつてもそうね。一夏と同時に葵とは友達になつたし」
篤と鈴が懐かしいなあつて言つてるとセシリアが再度質問してきた。

「あの一夏さん、先ほどの会話の流れからして、その葵さんは急に一夏さんの前から姿を消したんですの？」

「そうよセシリア！あのバカ急に学校を休みだして、家に電話しても繋がらないし携帯も出ないし心配して家に行つてみたら、そこに私と弾と一夏宛の手紙があつてそれ以外はもぬけの殻だったのよ！」

あれにはビックリした。葵の家に付いていた青崎って書かれた表札が無くなつててドアに鍵がかかつて無く開けてみたら、玄関入口に俺達宛の手紙が置いてあり、それ以外は家具も一切合財全部無くなつていたからだ。ちなみに弾宛の手紙には「短い間だったが楽しかったぜ」、鈴の手紙は「酢豚の腕前磨けよ」、俺の手紙には「またいつか会おうぜ！」だけだった。つーかこれわざわざ三人分用意する必要あつたのか？って思えるほど中身が無い手紙だった。

「あの一夏はそれはもう落ち込んでたわね。一週間は机に突っ伏してたっけ」

「しかたないだろ、人生の半分は一緒に過ごした奴が何も言わずに
いなくなっただぞ。親友と思つてたのに俺に何も言わず…」

やべえまた落ち込んでくる。あの時は本当に絶望したな。鈴や弾
がいなかったら人間不信になつてたかもしれない。

「そんな事があつたんですね…。大丈夫ですよ一夏さん、鈴さん、
箒さん。その方とはまたいつか会えますわよ。だつて一夏さんの手
紙にいつか会いましょうと書いてあつたんですから」

そういつて笑顔で励ましてくるセシリア。彼女の気遣いが少し嬉
しかった。

「そうね、あいつとはまた会つて一回ぶん殴らないと気が済まな
いし」

「私も葵から剣道の腕では負け越したたからな。今度こそ勝ちた
い」

「そついや葵と箒は結構ライバルな関係でもあつたな。俺にとつて
もそつだつただけぞ。」

「そつだな、死んだわけじゃないしいつかまた会えるよな」

と言いながら俺達は寮に戻つて行つた。途中鈴と箒が「私がいな
くなつた時はどんな反応だつた？」と聞いてきて、どう返すべきか
かなり悩んだりもした。

翌日、教室でシャルルとラウラに「昨日はどこへ？」と聞かれ、
箒達と同じ説明をした。

「まあ確かに一夏もここにずっといると気が滅入るよね」

「ふん！私という夫がいるのに何か不満なのか？」

二日前クラスメイト達の目の前でいきなり俺にキスをして以来、
ラウラは俺を嫁扱いする。正直言つて辞めて欲しい。

「ところで一夏よ、一つ聞きたい事がある」
と言つてラウラは誰も座つて無い机を指差し、

「あの机に誰か座つてるのを私は見た事が無い。教官が教鞭を振る
つてるのに出席せんとはなんという奴だ？」

「あゝそういえば僕も気にはなつてたんだ。ここに転校してきてからあの机に誰も座つてないから」

二人に聞かれるも俺はこう答えるしかない。

「知らん」

「「は？」」

「だから知らないんだよ。このクラスに初めて入った時からあそこは空席だったんだよ。山田先生も名前すら教えてくれないし」

「名前も教えてくれない。同じクラスメイトなのに？」

「なにかわけありの人物なのか？」

「多分な。千冬姉も教えてくれなかつたし」

そうこう言つてるうちにチャイムが鳴り、HRの時間となった。

山田先生と千冬姉が教室に入ってくるが、何故か山田先生はいつも以上に笑顔をしており、そんな山田先生につられたのか千冬姉までちよつと笑顔をしている！なんだなんだ？周りの皆も千冬姉の様子に動揺している。

「さてと朝のHRを始めますが、その前に一つ報告があります」

笑顔を浮かべながら山田先生は言った。

「皆さんと新しく一緒に学ぶお友達を紹介します」

この時クラス一同の心は一致したと思う。「え、また？」と。

「いえ正確にはこのクラスに在籍してたのですが、事情があつて今まで登校出来なかつた生徒が今日から通うんです」

なるほどな。シャルル、ラウラに続きまた転校生が入るつてのは少し変だしな。俺は今朝話していた空席を眺めた。

「それでは紹介します。入ってきてくださいーい」

山田先生の合図の後、扉が開き一人の少女が教室に入ってきた。

身長は高く、俺と5センチ位しか変わらないかもしれない。髪は背中を半分隠す位長い。そしてスタイルは抜群。痩せてるように見えて箒とタメ張りそうなほど大きな胸をしている。そして顔もかなり綺麗な分類に入るだろう。少々ツリ目だがその瞳は優しい気な眼差しをたたえている。

うんかなりの美少女だな。昔会っていたらそう簡単には忘れないだろう。でも俺は彼女に会った覚えがない。

なのに、何故……俺は彼女にとてつもなく懐かしい印象を覚えるんだらう？

彼女は教室を見回し、そして俺を見つめると極上の笑顔で言った。

「皆さんはじめまして。私の名前は青崎葵と言います。事情があって入学後出席しませんでしたかどうかわかるしくお願いいたします」

遅れて現れた幼馴染（後書き）

駄文ですが、今後も頑張つて書けたらいいなと思います

告白（前書き）

オリキャラの青崎葵ですが、ぶっちやけ見た目は型月のアオアオです（笑）

告白

「皆さんはじめまして。私の名前は青崎葵と言います。事情があつて入学後出席しませんでしたけどどうかよろしくお願いいたします」

ナニヲイツテルンダコノコハ？

その後も「特技は空手と剣道です。格闘戦なら誰にも負けない自信があります」と自己紹介を続けているが、俺の頭は混乱していた。なんて名のつたこの子は？青崎葵？いやあいつは正真正銘男だったはずだ。しかしこの子の名も青崎葵。

あ、なるほど！つまりこの子は

ただ単に同姓同名の別人の人だ！

いやそうだよな、それなら納得だ。葵も空手と箒家で剣道習つてたけどただの偶然だよな。葵は武術習ってるのに筋肉全然付かず、女みたいに細かったし、顔も凄く女顔で男子制服着なければほぼ100%女に間違われてたりしたけど別人だよな！だって俺の記憶の葵と目の前にいる彼女、よくよく見たら凄く似てるが、記憶にある葵はまだもう少し男の顔してたよな……？あれ？

「以上です。あ、後一つ言う事があります」

そう言つて彼女は俺と箒の顔を見て、

「久しぶり元気だったか一夏！また会えて嬉しいぜ！箒も久しぶり！6年振りだな！」

と眩しい笑顔をして俺と箒に言った

……………数秒の沈黙の後、

「「葵~~~~??」」

俺と篝の叫び声が教室に響いた。

「え、織斑君と篠ノ乃さんの知り合い?」「そうでしょ、二人を名指しで挨拶してたし」「でもそしたら何で織斑君と篠ノ乃さん、お化けでも見たような顔で青崎さんを凝視してるの?」「それと青崎さん、何でいきなり男の子みたいな話し方に?」

葵の発言によってクラスメイト達が騒々しくなった。篝を見たら葵を凝視しながら口をパクパクしてる。まさに鳩が豆鉄砲をくつたようっと感じだ。いや俺も似たようなもんだろうけど。セシリアは昨日葵の事話してたから「え、葵さんは男性だったはずでは?」と俺と篝と葵を交互に見ている。シャルルとラウラは……何故葵に対し敵意のこもった目で見てるんだ?

「静かにせんか馬鹿共!」

千冬姉の一喝で一瞬にして静かになった。流石千冬姉。

「全くまだHRは終わっておらんのに。ああ、青崎」

「はい何ですか織斑先」

パアン!っという音と共に葵は千冬姉から出席簿で頭を叩かれていた。

「な、何故叩くんですか千冬さ」

しまった!っって顔して口を押さえた葵に、再度パアン!という音が響いた。

「学校では織斑先生と呼べ。後先程の質問の答えだが、お前の口調が男になった場合容赦無く叩いて矯正してくれと上からの命令があったのでな。最低限公共の場では口調に気を付ける」

「了解しました織斑先生」

頭を抑え若干涙目で答える葵。痛いもんなあれ。

「さて、これでこのクラスの者が全て揃ったわけだが、お前達に言わなければならぬ事がある」

千冬姉はちらつと葵を見て、

「言わなければならぬ事とは、今日初めて登校した青崎の事だ。事情があつて登校が遅れたわけだが私が今から言う事はそれに関する事ではない。青崎自身についての事だ」

そういつて千冬姉は「青崎、お前から言うか？」と聞き、「はい」といつて葵はまたクラスメイト達の前に立ち、

「え〜とですね、実は私は今は正真正銘女の子ですが、中学二年の春までは男の子でした」

と特大の爆弾を放った。

再度クラスは騒がしくなったが、同じく千冬姉の一喝で静かになる。

「話の続きですが、誤解しないでほしいのですが私が女の子になりたいから性転換手術をしたというわけではありません。私の体が元々は遺伝子的に女性だったんです。半陰陽といつて、詳しく話すと長いので省きますが、ようは元々女性だったけど見た目が男性だったというわけです。私が14歳になる前にそれが発覚し、将来の事を考えて男性として生きるよりも女性として生きる事を選びました」

自身の事情を真摯な表情で話す葵。その顔に嘘など欠片も見えなかった。

「かなり葛藤や迷いもありましたが、こうしてISの操縦も出来るようになってますので結果的には良かったと思います。それに思いもしなかつた再会もありましたし」

そういつて俺と筈を眺める葵。

「なぜこのような事を言つたかですが、体は女性ですが手術前は男性として生きてきました。元男性ということ、私の事を女性として受け入れづらい人等もいるからです。そういう人がいるなら初めからいつて来てください。私もなるべく配慮しますので」

悲しそうな顔をして葵はクラスを見渡した。その顔を見て今までそういつた拒絶を受けた事があると容易にされた。

「しかし」

ん？急に葵の顔が一転、悲しい顔から挑発的な顔をし、

「ISの操縦では誰にも負けるつもりはありません！そこだけは遠慮しません！」

と宣言した。

ああ、うん。そうだな。俺の記憶にある葵はそんな遠慮深い奴じゃあないもんなあ。気配りがよく出来る奴だったが欲望には忠実だったし。

「以上です。では改めて皆さんこれからよろしくお願いいたします」と一礼した。その瞬間

「ああ、お前に色々あったようだが、そんなのは関係無い！本当は女だった？関係ねえ！その程度で俺がお前に対して認識変わんねえよ！またよろしくな親友！」

「うむ、お前の事情は理解した。しかしお前がどう思ってるかは知らんが、私にとってお前がどんなに姿が変わろうと私が知っている葵のままだ。一緒にまた精進しよう」

俺と筈の声がクラスに響いた。驚いた顔して俺と筈を見る葵。しかしすぐに少し半泣きになりながらも嬉しそうな顔をして

「ありがとう、二人とも」

と言った。

…やべえ、今は完全に女になってるからかかなり可愛い。

「私も全然問題にしないよ」。このクラスに入ったからにはアオアオも一組の仲間だよ」

のほほんさんが笑顔で葵を受け入れてくれた。それをきっかけに「大丈夫よ青崎さん、私達はそんなことで貴方を偏見な目で見ないわ」「それに隠してるならともかく、堂々と私達に教えてくれたもの。並みの勇気じゃ出来ないわ。なら私達も

それに答えるまでよ」「IS勝負、私も負けないわよ！覚悟しててね」

クラスの全員が葵に笑顔で答えていった。セシリアもシユルルも、

……ラウラはよくわからないが拒絶してる様子は無い。どうやら葵は皆に受け入れられたようだ。

その後休み時間の度に葵は質問責めになり、葵の事を聞いた鈴が一組を襲撃。今の葵を見て（特に胸）驚愕し、そして以前宣言した通り一発ぶん殴った。葵も抵抗すること無く受け入れ「ごめん」と言う。「別にもういいわよ！こうしてまた会えたし！」とプイっと顔をそらした。

「休み時間じゃ時間が足りないわ！昼休みにたっぷり色々話して貰うからね！」

と言って鈴はまた二組に戻って行った。俺も筈も込み入った話は昼休みにしようと葵に話してたためちようど良かった。

そして昼休みになると俺は葵の腕を掴み、

「さてと、じゃあ色々聞きたい事が山ほどあるんで話して貰おうか」

有無を言わずに屋上へ連行した。

おまけ

葵を受け入れるクラスメイト達。皆笑顔をしており、まさに青春！って光景である。

「うむ騒々しいがなかなか美しい光景だな。山田先生、教師としてこのような光景を見て嬉しく思わないか？」

「……あの織斑先生」

「どうした山田先生？」

「……私青崎さんの体の事、一言も聞いてないんですけど……」

「…教えて無かったか？」

「言ってませんでしたよ！一言も！私今日は純粹にこれだよ。ちやく全員クラスメイトが揃うんだ」としか思って無かったですよ。ある意味生徒さん達よりもシヨック受けましたよ！」

「さてとそろそろ授業に進まんといかんな」

「逃げないでください！」

告白（後書き）

テンポ悪い…

初めて小説書いてみてるけど本当に難しい…

本当に知りたい事(前書き)

毎日更新したいのに、なかなか時間とれないのが悔しい。

本当に知りたい事

「さてと、ようやく昼休みだ。色々吐いてもらっせ」

朝のHRで幼馴染との衝撃的な再会後、俺は聞きたい事がたくさんあったので昼休みが待ち遠しかった。あまりのうわの空状態で授業受けてたせいで、千冬姉に合計7回は頭を叩かれた。箒も4回叩かれていた。

葵と話す場所は人気が少ない屋上でする事にした。久しぶりに再会したら女の子になってるし、なんか複雑な事情がありそうだから教室じゃ話づらい事も多いだろうしな。

昼休みが始まり、俺は葵の腕を掴み、屋上まで引っ張って行った。

「おい、一夏。別に逃げないから引っ張るのは止める！」

悪いが無視だ。今はまだ優しくする気にはなれない。俺達の後ろには箒が付いてきている。葵について聞きたがってるセシリア達には少しお願いを頼み込んだため一緒に付いてきてはいない。

「遅いわよ三人共！待ちくたびれたじゃない！」

屋上に着くとすでに鈴が待っていた。

「悪い鈴。葵を連行してたら遅れてしまった」

「だから逃げないっていつてるだろーが！」

「いいから話を始めるぞ。うかうかしてたらすぐに昼休みが終わってしまう」

とりあえず屋上に設置されてる円テーブルの椅子にそれぞれ腰掛

ける事にした。

全員が座ると、葵は俺と篤、鈴を順に見て回り言った。

「まあ一夏と鈴にとっては二年振り、篤にとっては6年振りの再会になったわけだけど何から聞きたい？一番聞かれると思ってたこの体については一夏と篤には朝のHRで、鈴には休み時間に話したけど？」

確かに見た目どころか性別まで変わった経緯についてはもう知った。だがな、

「葵、俺が本当に知りたいのはそんな事ではない。いや例えHRでその件を話さなくても、俺が葵に真っ先に聞きたかったのはそんな事ではない」

「いやお前、幼馴染が性転換して現れてるのにそれがメインでなく何を真っ先に聞きたいってんだよ？」

「とぼけるなよ。逆にお前が俺の立場になったら、お前はまず真っ先になんて俺に質問する？」

俺の言葉に葵は観念したような顔をして、

「どうして一言も無く、黙って俺の前から消えた？」

と、俺がもつとも問いただしたかった台詞を言った。

「ちなみに私もそれが知りたかったわ。あんな置手紙だけで納得してるでも思ってたわけ？」

そういつて鈴は葵を睨んだ。その目は納得のいく説明をしると言っている。

「私もそれは気になっていた。お前が一夏に何も言わず、しかも置手紙も一言しか書いてないのはおかしいと思っていた」

「葵、嘘偽りなく正直に話してくれ。この二年間これが俺が一番気になってたんだ」

俺達の質問を受け、葵は絞り出すように一言答えた。

「怖かったから」と

「怖かった？何が怖かったんだよ？」

「俺が男でなく本当は女だったから、それを話すことでお前達との関係が壊れるのが怖かったんだよ、あの当時はな」

葵は自嘲めいた顔してそう答えた。

「あの頃は俺も情緒不安定でな。考え方が凄くネガティブだったんだよ」

「何せ中二の春辺りから急に体調が悪くなり、手足も妙に痛むようになった。最初は成長痛と思ったけどそれにしておかしかったし。そしてついに急に家で俺は意識を失って倒れたんだよ。親父が慌てて病院の担ぎこみ、診断され結果俺は男ではなく女だと判明した」

「晴天の霹靂とはまさにこの事だった。だってお前は本当は女の子なんだよと言われても、俺は今まで男として生きて来たんだぜ。どうしろってんだよ。男として生きる事も考えたけど、生殖器は女だから男を選ぶと子供は作れない。なにより男を選んででも貴方の体では男らしい体格をするのはかなり難しいと言われたよ。」

……まあそれはわかる。中学入ってから葵、空手部に入って毎日相当練習してたのに、まるで女の子みたいな体格だったし。

「医者も俺を女として生きる事を強く勧めてきてたよ。絶対美人になるからって」

……たしかに。俺も医者だったら絶対そっちを勧める。

「それにやっぱり遺伝子的にも女性だからそっちの方が後々体の不具合も起きないからって。長生きしたいならやはり本当の性別が一番良いつて。医者の説明を聞いて、親父も俺が女として生きる事を勧めてきたよ。そして俺は考えに考え抜いて　　女の人生を選んだ」

「わかるか、あの時俺は男として生きて来た事を全否定されたんだよ。親からもな。今までのお前は間違った存在なんだって俺は思うようになった」

そして葵は俺達を見て言った。

「だから怖かったんだ。一夏達から俺が否定されるのが。俺が女になることで今までの関係が全て壊れるんじゃないかって。一夏達から俺を否定する事を言うんじゃないかって」

「そして俺は一夏達から逃げる事を選んだ。一夏達の反応が怖かったから。親父に頼んで夜逃げ同然で引越してくれと頼みこんだ。親父はそれを了承してくれた。でもやっぱり会えなくなるのは嫌で、凄く会いたいけど会いたくなくて。そんな考えをしてるうちに出発の時間が来て、時間が無くパニックになった俺は、とっさに思いついた本心の別れの言葉を書いた」

あの時俺に書いた手紙は「またいつか会おうぜ!」。つまり

「つまりうだうだ考えてても、結局会いたかってことだったんじゃない

ねーか」

「……まあな。ただあの時の俺は」

ふざけるな！

「バカかお前。HRでも言った通りお前がどんな姿に変わろうと、お前は俺の大切な幼馴染だ！なんで俺に相談してくれなかったんだよ！」

「だから一夏、あの当時の俺は」

「五月蠅い！事情はわかった！理由も聞いた！納得する事も多々ある！でも、俺を信用して欲しかった、悩みがあるなら打ち明けて欲しかった、お前のために力になりたかった…、こればかりは理屈では語れないんだよ！」

「ちょっと落ち着きなさい一夏！あんたの気持はよくわかるけど、葵も……」

「葵も悩み苦しんだんだ。つらかったのはお前だけでは無い」

鈴と筈に悟られ、頭に上っていた血が引いていく。そうだな、まだ葵には聞きたい事がある。

「葵、さつきから昔の俺は」と言ってるが、なら今のお前は」

「ああ、あんな事して後悔してる。何故一夏達を信用しなかったのか、頼らなかつたのかって。実はそれに思い至つたのは夜逃げにして二日後、手術直前に思った」

「はやつ！」

なんだそれ。お前のそれまでの葛藤はなんだったんだよ！

「まああれだ、もう完全に女になるんだと思っただら今までの行動を振り返り、自分の行動がいかの間抜けかと思ひ知った。ははははははははじゃねえ。篝も鈴も呆れてるぞ。」

「……たく、じゃあなんであんなその後私達に連絡よこさなかったのよ！迷いなくなっただんなら電話一つ位よこしなさいよ！」

そこで葵はあく、それねと言って、

「いやそれが出来なかったんだよ、正確にはさせてくれなかった」

「させてくれなかった、だと？どういうことだ？私みたいに政府の監視下に置かれたわけではあるまいに」

「いやそれが……篝と同じような立場に俺もいたんだよ」

「「「「はあ？」「」「」

本当に知りたい事(後書き)

思いつくまま書いてたらえらいダラダラしてしまっ

会話ばかりでいかなこれ…

よろしく

「あーいやどっちかというと箒よりも一夏の方が近いかも」

「俺と？」

「つまり……具体的にどういうことなのだ？」

葵、お前一体何したんだよ？箒も鈴もわけわかんないって顔してるぞ。

「わかった、ちゃんと説明しようか。そう、あれは桜も散り春も終焉を迎え葉桜が綺麗な」

「そういう前置きはいいからさっさと話さない！」

額に青筋立てながら鈴が葵に怒鳴った。俺も箒も同感とばかりに頷く。いいから早く言え。

「わ、わかった！だから落ち着け！……まあぶっちゃけるとだな、結論から先に言うが俺が日本代表候補生になったから、お前達に連絡する事も出来なかったし、入学も遅れた」

「……日本代表候補生！？」「」

「そう、ゆくゆくは日本代表になって、千冬姉が出場したモンド・グロツソで優勝が今の夢で目標」

「

そういう葵の表情に嘘は全く見られない。どうやら本当に代表候補生になっており、そして本気で日本代表の座を本気で狙っている

ようだ。

「ちょっと！あんたが日本代表候補生？嘘でしょ？」

「いや本当だぜ」

そういつてニヤつと笑う葵。

「つーか俺からすればわずか一年とちょっとで中国の代表候補生となったお前の方が信じられないけどな」

「んっ、まあね！私って天才だし」

葵の言葉を聞き、自慢げにふんぞり返る鈴。

「そんなことよりも、どういった経緯でお前は代表候補生になったのだ？」

おい箒、そんなことよばわりされて鈴が少しむっとしてるぞ。しかし確かに気になる。お前一体何があつてそんなことになってるんだよ。

「ああ、それはな……」

そして葵は、どこか遠い目をしながら話出した。

「二年前、俺は手術終了後真っ先に一夏に事情を説明しようとしたが、やっぱりやめた。さすがにあそこまでやってしまったんだし、どうせなら完全に女の子になった状態で会ってびっくりさせようと思つたからだ」

「？手術終わったんだろ？女になったんじゃないのか？」

俺の言葉に葵は馬鹿を見る目で見た。……なんだよ変な事いった

か？。

「バカ。手術したからって体つきとかすぐに変わんないだろ。大体胸とかペツたんこだし。そんな状態で会っても女になったなんて言ってもお前ピンとこないだろーが」

なるほど、確かにそうだ。

「その後半年間女になってしまったから心のケアとかでカウンセリングを受けたり、色々な薬を飲んだり注射したりしたら、それがまあ色々成長することすること。その頃から髪も伸ばすようにしてだし、医者もびつくりなほど女っぽくなった。胸もそうだな、そのころですでに……」

葵の目は鈴の……、おい止める！そのネタは止めとけ！

「すでに……何？」

バックに炎が見えそうなほどの怒気を放つ鈴。マジ怖いんですが。

「……いや何でも無い。ま、そんなわけで見えた目が充分整ったからいざ一夏達に会いに行こうとしたら、政府から役人が来てISの起動テストをして欲しいという要請が来た。どうも俺みたいなパターンの人間でも、女性ならISに乗れるかどうか調べるんだと。俺も女になったんだしISの操縦ができるかとも思い、快く了承。近くのIS開発施設に赴き、そこにあつたIS打鉄に触ってみたら見事起動。俺みたいな女でもISは起動すること証明された。そして俺はどうせだしとISを動かしていいかと頼みこんだ、なんせISに乗る機会なんてこれが最後かもしれないと思つたからな。そして役人さん達は快くOKしてくれたんで、俺はISを思う存分動かしてみた」

「いやあまさに世界が変わるとはこのことかと思つたよ。今までと

はまるで違う感覚に俺は夢中になった。ISから流れてくる情報を基に俺はさらに自分が限界と思える操縦をこなしていった。そして一通り満足して地面に降り、ISを解除したらかなり興奮した役人さん達が俺に詰めより、『こっちに来てくれ!』と叫び俺を連行。検査室に入れ俺のフィジカル・データを取った。そして俺のIS適性だけど、なんとA!」

「まあ代表候補生ならその位あるわよ」

たいして驚いてない鈴。「ん〜〜!」となにか悔しそうな筈。まあわかるぞその気持ちは。

「どうも俺の操縦が初めてとは到底思えないほど良かったらしく、しかも適性Aってことで皆騒ぎ俺をべた褒め。いやあそれほどでもとか言つてたら、そこに一人の少女が現れた。その子は俺を見て、『ふん、元男がIS乗り。冗談じゃないわね』と言って思いつきり侮蔑を込めた目で俺を見た。その子の言葉にカチンと来た俺は、何?その元男よりもIS操縦下手そうだけど君と言り返した。そっからはお互い罵り合い、そしてその時その子が言った言葉にキレた俺は勢いでISで勝負だ!と言った。そして俺は周りが反対するのを振り切り、広場で俺は打鉄に、彼女は専用機を展開した。え、専用機?と思ったら施設の方が教えてくれ、その時彼女は日本代表候補生だと知った。自信満々に勝負に乗ったのはそのためだった」

「しかし後には引けないし、不思議と負ける気はしなかった。ISから流れてくる情報を参考にし、イメージ通りに操縦して戦ったら
開始10秒足らずで俺が勝った」

「はあ?いやちょっとまって!おかしすぎるだろそれ!」

「あんだ話の流れからして勝ったんだなあとか思ってたけど、いく

「なんでも誇張しすぎよ！」

「10秒でシールドエネルギー全て無くすなど、打鉄に白式の雪片式型でもあったとしてもいづのか貴様！」

三者三様で葵に「嘘つけ！」と言う俺達。いくらなんでもおかしいだろ。代表候補生相手に！

「いや本当。嘘偽り無し。ただ一つ誤解している。おそらくお前達は10秒で俺が相手のシールドエネルギーを0にしたと思ってるだろ」

「違うのか？」

「ああ、違う。俺は相手を気絶させたんだよ。俺の攻撃を受け、彼女の機体は勢いよく壁に激突。轟音を立てて壁を粉碎した彼女はその衝撃で気絶した」

「ISに乗った相手を一撃で気絶……葵、お前は一体何をしたんだ？」

「いや単純に『瞬時加速』を何故か理解できてたからそれを使って一瞬にして相手との距離を詰めた。俺を舐めきってた彼女は対応が遅れ、ガラ空きの腹に正拳突きを当てたらそうなった」
マジかよ。いくら葵が空手をやってたとはいえ……

「まあそれは今後授業や放課後の模擬戦で実践してやるよ。言うよりもやった方が早い」

「わかった。疑問は後にしよう。で、話の続きを頼む」

「ああ。まゝ俺が代表候補生を一撃で倒したもんだからもう大変な事になった。しかも倒し方が武器を使わず拳のみ。役人さんが政府の上層部に連絡して協議の結果、俺は代表候補生となった」
そして葵ははぐっと溜息をついた。

「しかし俺が代表候補生になった理由は少し複雑でな。ISは男しか操縦できないだろ。で、俺は体は本当は女だったとはいえ、手術前は男として生きてた。日本政府の一部がその辺を押し出して『今は女だけど元男！男で初のIS乗り！』というかなり強引だがそんな宣伝で俺を売り込もうとしたんだよ。しかしそれはいくらなんでもと反対する人達もいたんで、とりあえずIS学園入学までは保留となった。政府としては他国に秘密にして日本にはこういう人材もいるとアピールする目的もあったため、俺の存在は秘密扱いとなった。そのため俺は知り合いに干渉することが出来なくなった。俺が一夏達に連絡できなかったのはこれが原因なんだよ。まあだけど」
そう言って葵は俺を見て

「一夏の登場のおかげでその計画は白紙になったけどな。本当の男がIS操縦できるんならそっちに飛びつくわな」
と言って笑った。ああ、やっぱりそんな風に宣伝されるのは嫌だったんだな。

「ま、それでも実力的には代表候補生のレベルなんで肩書はそのまま。政府の監視も無くなったんだけど一夏も筈もIS学園に入学するのを知ったからその時言おうと決意。入学を楽しみにするもIS学園に入学直前にトラブルがあって登校が遅れ、今日が初登校になった」

「トラブル？入学前に何があったのだ？」

「いやそれはまた今度にしてくれ。今はまだ……言いたくない」
葵はどこか暗い顔して答えた。…その顔を見て俺も鈴木も篁も追及するのは止めた。

「まあ以上が俺に起きた、一夏達が知らない二年間の出来事だ。満足したか？」

「いや話を聞いたが……、葵、お前どんだけ波乱万丈な人生送ってるんだよ」

「世界初の男のIS乗りのお前に言われたくはないぞ」
いや俺よりも絶対お前の方が凄い。

「それよりも、いい加減俺のことばかりでなく、お前達の事も話してくれよ。空白の時間を互いに埋めようぜ」

葵、そう言ってもだなお前が期待するほどの事はほぼ無いぞ。

「いや葵、俺はお前が消えた後はこれと言って話す事あんまり無いぞ。二年時は弾達と遊んでばかりだし三年の時は受験勉強で消えたし」

「私もあんたが知つての通り三年の時中国に帰ってそこで代表候補生になってISの特訓に明け暮れたわね」

「私は政府の監視下の元各地を転々とする日々だけだった」

「……予想以上につまらない返しだな。じゃあIS学園に入学してからはどうなんだよ。結構噂は聞いてたんだぜ。一夏のクラス代表決めとかタッグマッチトーナメントとか。なかなか面白そうだから話してくれよ」

俺はそれを聞いて時計を確認。かなり話しこんだが昼休みは後10分ある。これなら間に合うな。俺はセシリアの携帯にワン切りで合図を送った。

「ああ葵、いいぜ。でもそれならまずは」

その時屋上の扉が開き、セシリア、ラウラ、シャルルが入ってきた。シャルルの手にはバスケット。中には昼飯も食べずに話してた俺達用のサンドイッチがある。俺はセシリア、シャルル、ラウラの横に立ち、

「この学園で出会った、俺達の友達を紹介させてくれ」と言っつて、セシリア達に自己紹介をお願いした。

「わたくしはセシリア・オルコットと言います。出身はイギリス。今後ともよろしくお願いしますわ」

「僕はシャルロット・デュノア。出身はフランス。僕とも一夏達みたいに関係になつて欲しいな」

「私の名はラウラ・ボーデヴィツヒだ。ドイツ出身。嫁の一夏の幼馴染なら、私も仲良くせんとな」

「ああ、改めてよろしく。俺も皆とは友達になりたいよ。……とこゝろで一夏」

葵はなんかニヤニヤしながら俺を見る。なんだよ気色悪い。

「嫁とはまた……、意外だがなかなか面白い彼女なんだな」

と言つてラウラを見る葵。いやちよつと待て。

「違」

「違いますわ、ラウラさんは一夏さんの彼女ではありませんことよ
！」

「そつだ葵、勘違いするな」

「こいつが勝手に一夏の事そう呼んでるだけよー！」

俺の言葉を遮って葵に否定するセシリア、鈴、篝。いや何をそんなにムキになつてるんだ。

「何を言う、この国では気に入った者を」

「ラウラ、話がややこしくなるから」

そういつてラウラの口を塞ぐシャルル。あれ、なんか目が笑つて無いように見えるのは気のせいかな？

「……あゝわかった、これだけでこれがどうという人間関係なのかも大体理解した」

なんかしみじみ納得つという感じで頷く葵。その手にはサンドイツチがつ……て！

「葵！何勝手に食つてるんだよ！」

「何言つてるんだ一夏。鈴も篝ももう食べてるぞ」

え？、と思い鈴と篝を見ている。二人とも片手にサンドイツチ、もう片手に牛乳を持っている。何時の間に！そしてバスケットを見てみたら……見事に空っぽだった。

「さてと栄養補給も済んだし、午後の授業を受けるか！セシリア達

は放課後また改めてお茶でもしながら話そうか」

「賛成ですわ。私も葵さんの事を色々知りたいですし」

「一夏達との昔の面白いエピソードとかあったら話してくれたら嬉しいかな」

「うむ、それは楽しみだな」

わいわい言いながら教室に戻っていく葵達。俺は空腹のまま空のバスケットを持ちながら後を付いていく。……まあ葵、皆と仲良くなれてるからいっか。

その後授業も終わり、放課後葵は千冬姉から自分の部屋鍵を受け取った。なんとなく予感がして葵の鍵の番号を見てみたら……俺の部屋の番号だった。

「葵は登校しない可能性もあったから、いない者と考えて部屋割を行った。しかもその後鳳やデュノア、ボーデヴィツヒと予定外の転校もあったため、使用可能状態の部屋が無い。用意が出来るまで織斑、お前の部屋に同室して貰う。まあ今まで篠ノ乃やデュノアと一緒に生活していたんだ。間違いは起こさないだろう」

そう言いながら何故睨むんだ千冬姉。信用してないのかよ！

「葵…それにお前もいきなり女と同室するよりは織斑で慣れた方がいいだろう」

「織斑先生……、ありがとうございます」

「そういうわけだ、お前ら仲良く生活しろよ。まあ言われるまでも無いと思うが」

そういつて千冬姉は苦笑を浮かべながら教室を去った。

その後篤達にこの事を伝えたら「うん、でも葵なら……」「今は女の子だし……、でも男だったし……でも一夏と同室は……」「嫁と同室だと！羨ましい奴だ」と全員唸りだしたが、葵が皆を引き連れて物陰で囁いたら全員一応納得してくれた。何を話したんだ？しかし葵に訊いても

「お前は気にしないでいいんだよ。ちょっとした協定」

とわけわからない返事しかしなかった。なんだよ協定って。それからは全員でお茶を交えながら葵の事やIS学園に入学してからの事を話し合って、楽しい時間を過ごした。……葵がいくつか俺の過去の暴露話をした事以外では。

皆と別れた後、葵は送られた荷物を引き取りに行き、それを持って俺の部屋に入り、荷物を整理し終わると、

「じゃあ一夏、これからもまたよろしくな」

と、笑顔で俺に言った。それに俺も

「ああ、お互いにな」

と、笑顔で返した。

よろしく(後書き)

うん、切り所がいまいちまだわからない

ちなみに葵は専用機持ってません

日常

葵が登校して、数週間が過ぎた。

葵が一緒の生活に俺は慣れ、それどころか前よりも充実した生活を送っている。葵が来る前まで、俺には本当の意味で心を許せる相手が居なかったのが大きい。一緒に馬鹿な雑談するだけでも凄く楽しい。いや箒達とも仲良くしてるんだが、なんというか葵と比べると空気が堅いつていうのか、たまになんかプレッシャーみたいなものを感じるんだよな。その点、葵は一緒に居てもそんなものを感じないし、逆に落ち着く。さすが10年近くも付き合っただけの物がある。見た目は完璧に女の子になっても、纏っている雰囲気は昔のまま。人は外見じゃない中身だな、いや本当に。

午前6時半。毎朝この時間に起きるが、例外なくその時間に葵の姿は無い。ベットは空っぽ。葵は毎朝5時半には起きて空手の練習をしているからだ。これは葵のIS操縦技術に大きく影響しているので、毎日欠かさず行い己を高めている。

何度か付き合ってみたが………凄まじい練習量に俺は何度も倒れそうになり翌日激しい筋肉痛に悩ませる事になった。その後葵から白式の戦い方を考えると俺より箒と特訓した方が良いと言われ、休日は箒が嬉々として早朝から俺をシバキ倒すようになった……。

そして俺が起きて顔を洗ってる時位に葵は部屋に帰ってくる。その時俺は洗面所を出て、入れ替わりに葵が入りドアを閉める。練習後の汗を流すためシャワーを浴びるためだ。シャワーの音が聞こえたら俺は再度中に入りさつさと用を済ませる。俺が出るとすぐに葵もシャワーを終え、着替えて出てくる。一度葵のシャワーシーンを遭遇してしまった事があるが、葵は笑って「何、一緒に浴びるか」

とからかってきたが、俺はその言葉を聞いても目は葵の体を凝視。いい加減恥ずかしくなってきた葵が俺にシャワー浴びせてきて俺は意識を取り戻し急いでシャワー室から出た。その後葵から散々「エロ河童」とからかわれたため、二度とそういう事が無いよう注意している。

いや、今でも脳裏に離れない。いや離したくない光景を脳裏に刻んだのは秘密だ。

そして二人で今日の予定や持っていく物の確認をした後、俺達は一緒に朝食に行くのが朝のサイクルとなっている。

食堂に着く時間はほぼ毎日同じなので、時間を合わせてるのが箒達と一緒にいる事が多い。朝は多く食べる派の俺と同様、葵も朝はかなり食べる。ご飯みそ汁は毎回御代りしてる位だ。皆の朝食の軽く2倍は食べる俺達に、箒達は毎回苦笑いを浮かべている。ラウラは千冬姉の影響が皆より比較的多く食べてるが俺達と比べたらかなり少ないのはいなめない。まあ体格差があるし。一度クラスの女子が葵の健啖っぷりを見て「そんなに食べたら太るよ」と言ったら

「毎日毎日体を動かさまくってるから大丈夫。それに食べないと体持たないし成長もしないわよ」

この発言を聞いた周りの女子達は葵の胸に視線が注がれた。そこには箒にも勝るとも劣らない立派な胸がある。皆葵を羨ましそうに眺めるが葵は気にせず食事を続けていった。

ちなみに葵は登校三日後から基本食堂や校舎の中等寮以外では完全に女口調で会話するようになった。俺に対してもそうで、「一夏、今日は何食べる？私は今日は鮭定食にしよっかな？」と言っ

てきた時は思わず葵を凝視した。まあ葵曰く

「何時、何処で織斑先生に出くわすかわからない以上、公共の場ではちゃんと女の子しないとね」

らしい。千冬姉本当にいきなり現れるからな。何度も何度も殴られればそうなるか。そのため篤達も最初は面喰らったが、今では慣れて普通に会話している。むしろずっとそうしなさいと皆言ってる位だ。

ちなみに何故葵が男みたいに喋ったら叩かれる理由だが、代表候補生だから。国の看板とも言える存在が、そんなガサツなことはしてはいけませんと主に女議員から言われてるらしい。これもある意味性差別じゃないとぶつぶつ文句言ってるが、俺も篤達も今の外見じゃ女の口調の方が断然あってるので同意できない。

その後朝のHRを終え、授業に入る。相変わらず授業について行くのがやっとの俺だが、それでも葵が来てからは大分マシにはなった。

「助けてドラエモン、ここがさっぱりわからないんだ」

「全くしょうがないなああおびた君は」

こんな感じでバカやってても、葵は乗ってくれてそのままわかりやすく教えてくれる。セシリアやシャルルとかに聞いても快く教えてくれるが、俺は葵が来てからは葵に聞く事が多くなった。まあどっちかというところだったバカなやり取りがやりたくて葵に聞くのが大きな理由。もう一つは……例えばセシリアに聞いた場合、そした

ら箒にシャルルにラウラが不機嫌になるし、『どうして私に聞かないの(だ)』となるからだ。何でこうなるんだ？と葵に聞いてみたら苦笑いしか帰ってこなかった。

実習授業の時、葵に専用機が無い事を知った。代表候補生なのに？と俺が聞いたら

「別に代表候補生なら全員専用機持ちつてわけじゃないわよ。あくまで候補生なんだから。それに私の専用機の話はあったんだけど……誰かさんの専用機を作るためにコア使われて私の分が無くなったし」

そして俺をジト目で見る葵。いやなんというか……すまん。

しかし専用機は無いが、葵の操縦技術は確かに凄かった。訓練機に乗ってるのに、専用機持ちの俺やセシリア達とほぼ変わらない動きをしてくれる。一番驚いてるのは同じ訓練機に乗ってる箒で、どうやったらそこまで動けるのかと驚愕していた。

そしてここでも俺は葵に操縦について教えて貰ってる。

……まあ俺のコーチを買って出ている皆に不満持たれてるけどね。だってシャルルと同じ位こいつに教えて貰う方がわかりやすいんだよ。葵も俺が理解できるように考えて言ってくれるし。ただ難点があるとすれば

……ISスーツって目のやり場に困るよね。

昼食は最近では食堂以外でも屋上で皆で弁当を持ち寄って食べる事も多くなった。箒は和風、鈴は中華、シャルルは洋食が多い。セ

シリアとラウラも頑張って作るようにしている。最初葵はセシリアの料理を食べ、正直に

「不味い！ちゃんと味見してるの！」

と言ってしまった。セシリアはその時はショックで泣いてしまい、葵は慌てて

「ごめん！言いすぎたわ！私がちゃんと料理教えてあげるから！だからセシリア泣かないで」

と、昼休み時間中セシリアを宥めていた。その後葵は約束通り暇な時間があればセシリアに料理を教えるようになった。その甲斐あってか、最近では最初に比べかなり上達し、安心してサンドイッチを食べられるようになった。ラウラも酷かったが、シャルルがサポートすることでこちらも最初と比べかなりマシになった。

ちなみにこの昼食を皆で一緒に食べようと言い出したのは葵。葵はセシリアと鈴、ラウラの仲が妙にギクシャクしていると俺に指摘。学年別トーナメント前に起きた出来事を話すと葵は納得し、その翌日から弁当を各自作って一緒に食べようと提案してきた。各自のお弁当を食べて意見交換してしていけば心のしこりも溶けるんじゃない？とかなり曖昧な理由で行われたお弁当会は、まあ第一回はセシリアが大泣きして終わったが、その後は葵の言う通り順調に進んだ。主にセシリアと鈴には葵が、ラウラにはシャルルが間に入ってやり取りをしたおかげで、最近ではもうわだかまりなく三人とも仲良くなっている。

しかしこの昼食会、俺だけ弁当を作るのを葵から禁じられている。いや楽だからいいけど、理由を聞いたら

「まだ駄目。皆のレベルがもっと上がったら一夏にも作ってもらうから。今作ったら…皆ショックを受ける」

との事。なんのこっちゃ。

放課後になると、俺は以前同様アリーナでISの特訓をしている。専用機を持っていない葵は箒同様申請書を出してISを借りてくる。しかし毎日借りる事は出来ないの、基本セシリアや鈴達と訓練することが多い。

葵と箒だが、借りられない日は道場に行き、剣道勝負をよくしている。箒が転校してからは葵、剣道の練習はしてなかったが、代表候補生になってからは剣道の練習も再開したという。葵と箒だが、7対3の割合で箒が勝っている。さすがにずっと剣道を続けていた箒の方が強いようだが、それでも負けるのが悔しいのか大体箒の方から勝負を挑んでいる。葵の専門はどちらかという空手だが、箒の実力は本物なので良い特訓になると喜んで応じている。俺も葵に剣道で勝負したが……ええボコボコにされましたよ。

そして葵とのIS戦だが、初めて戦った時はあまりの強さに茫然としたな……。

「よし、じゃあ一夏！待望のISでの勝負をしましょうか！あ、手加減いる？」

葵はそう言っって打鉄に乗っって俺に笑いかけた。その顔は俺に負ける事なんてありえませんかと言っっている。

「ふざけんな！全力できやがれ！」

俺はそう叫び返した。

「じゃあ、始めようか！」

と言っって。俺に突撃してくる葵。早い！すぐに後退し距離を開けようと飛翔。しかし葵も俺を追い飛翔。その瞬間いきなり『瞬時加速』で一氣に間合いを詰めて来た葵。その手には何も持つてない。

「くそ！」

すぐさま雪片式型を構え、迎撃態勢を取る。葵の専門は空手だが、これはIS戦。なにか武器を持つてるかもしれない。しかし葵はそのまま俺に接近。俺は雪片式型を葵めがけて振り下ろす。

「それは下策中の下策ね」

と言つて葵は、俺の一撃を真剣白刃取りで受け止めていた。嘘だろ！

「じゃあ見せてあげる。私の戦い方」

と言つて白式の腹部に正拳突きを叩きこんだ。その瞬間

「~~~~~」

凄まじい衝撃が俺を襲い、勢いよく壁に激突。あまりの衝撃に眩暈を起こしかけるが、エネルギーを見て絶句。さっきの一撃で半分は無くなっていた。

「まだまだいくよ」

そういつて再度俺に接近してくる葵。雪片式型を構え迎撃するも俺の攻撃を曲芸師のようにかわしていく。そして葵は雪片式型の柄部分を蹴りあげ、浮いた手をさらに蹴つて俺から雪片式型を手放させた。無手となった俺に葵はまた拳を構えて、振り抜いた。

また容赦なく壁に激突した俺。そして絶対防御発動。俺のエネルギーは全て空となった。

誰が見てもわかる通り、俺の完敗だった。

「いやね、私はISは乗るで無く、肉体の延長的な物と思ってるわけ」

試合終了後、俺は葵にあのでたらめな一撃の正体を聞いてみた。

「ISを動かすのはあくまで人間。それは当たり前だけど、ISって人型じゃない。そして精密なその作りは肉体、いやそれ以上の動きを行える。一夏、私はISを操縦するだけでなくISを装備して戦うと認識してるわ」

「そして肉体とISの動きを完全にシンクロさせることで、今まで私が長年練習を重ねて来た空手の技をISで完全再現。あの威力はISを使うことでISが持つ力を最大限まで引き上げてるから産まれる威力。みんなISで格闘してるけど、それはただ動かして相手にぶつけてるだけ。私からすればままたごね」

そういつて葵はラウラ達が待機している所まで戻って行った。回線を通じ俺達の会話を聞いてたんだらう、皆驚愕の目で葵を見ている。そして思う。これだけの事ができても何で代表候補生なんだろと。

その疑問は、次に鈴、セシリア、シャルル、ラウラと戦っているうちにわかった。葵はISを乗りこなし近接格闘が強いが、銃などの飛び道具を使わないからだ。そのため鈴は距離を取り衝撃砲で攻撃、しかし葵は衝撃砲を掻い潜り接近し殴る蹴る等で倒したが、鈴も葵のシールドエネルギーは半分は減らしている。

セシリア戦では葵は近接型刀プレートを使いピッドを斬って落としたりもしたが、それでも遠くから撃たれたり切り札のミサイルに被弾したりとした。それでも最終的に間合いを詰めた葵がセシリアを殴り倒した。

シャルルは基本距離を取って戦い、ライフルで狙撃したりマシンガン撃つたりとにかく近づけないような試合運びをした。それでも掻い潜ってくる葵に、中間距離では散弾銃等面の攻撃で葵を牽制、しかしそれでもかわし多少の被弾は恐れず『瞬間加速』で肉薄する

葵に、その正面に実体シールドを出現。いきなり現れたシールドに葵は避けきれず激突。動きが止まった所をシャルルが『瞬時加速』で距離をつめ、左腕に仕込んだ『盾殺し』を打ち込もうとした。が、その一瞬の後

「きゃあ~~~~~!」

勢いよく吹き飛んだのはシャルルの方だった。葵はあの一瞬で機体を調整、突進してくるシャルルをカウンターで迎撃したのだ。その後は同じ手は通用せず、いにシャルルに接近する事に成功した葵は一気に勝負をつけた。ちなみにあの時カウンターが成功したのはほぼ奇跡だったと葵が言っていた。

ラウラ戦だが、この時とうとう葵は敗北した。ワイヤーを掻い潜りラウラに接近するも、ラウラのAICが発動し、完全に行動不能になった。その後葵はラウラにタコ殴りにされ破れた。時間にして20秒で負けている。その姿に俺達は茫然とした。…だってあんだけ俺達ボコボコにした相手がこんなあっさり負けるのは。

「あゝ、まさかシュバルツエア・レーゲンにあんな装備があるなんて。ここまで完敗されたの久しぶりよまったく」

ラウラと戦った後の葵は、口ではそういうも楽しそうな顔をしていた。

「でも、いずれその装備も克服してあげるから、覚悟してなさい」

「ふ、望む所だ。今回は私の手札を知らなかったからあの結果になっただけだしな。でも次回も私は負けんぞ」

そういつて互いを讃えあう二人。その様子を見て

「葵！次は私が勝つんだからね！覚悟してなさい！」

「次に戦う時は、本日とは違いますわよ！」

「そうだね、僕ももつと戦術の幅を利かせるようにするよ」

三人の言葉を聞いて葵も、

「いいねいいねこういう熱い展開！でも次も私が勝つ！」

と宣言。望む所と言いあつて皆を眺めながら、俺の心にも熱い物が産まれてくる。ああ、やっぱり男ならこの熱い展開は良い！

「俺もだぜ葵！次は俺が勝つ！」

しかし俺がそう言った後、皆の返事は

「…………それは無理（だ、ですわ）…………」

…………おまえら酷くない？

こうして俺達の日常は流れていくようになった。以前とは違う毎日、俺は楽しむようになった。そしてそのまま、来週に控える臨海学校も俺は楽しみにした。今のメンバーで迎える臨海学校、それは最高に楽しい思い出になる気がするからだ。

そういや葵水着持ってるんだろか？シャルルも男としてここに入学してるんだし、持ってないかもしれない。次の休みの日に二人を連れて買いに行くのも悪くないな。

日常（後書き）

戦闘シーン書ける人尊敬します。

そしてこれでようやく本編と絡める…

後葵が料理できる理由ですが、葵に母親が幼いところからいないからです。そのため料理は一夏と一緒に習ったため、結構上手いです。

買い物狂想曲（前編）（前書き）

一夏以外の一人称に挑戦してみました。

買い物狂想曲（前編）

「なあ葵、次の休みの日に買い物に出かけようぜ」

俺はベットの上で横になりながらジャンプを読んでいる葵に尋ねてみた。目を悪くするから止めとけ。

「買い物？何を買いにいくんだよ？」

「来週は臨海学校があるだろ。お前学校の水着しか持ってないだろどうせ。俺もそうだから一緒に買いに行こうぜ」

俺の言葉に葵はふむ、と頷いた。

「ん？二人で出掛けるのか？他は誘わないのか？」

「ああシャルルも誘っていいこうと思う。あいつも確か前水着持ってないって言ってたからな」

「シャルルね……、いや一夏誘ってくれて悪いが俺は次の休みは用事がある。だから シャルロット と一緒に買いに行つて来てくれ」
葵は妙にシャルロットの名前を強調して言った。

「用事？早く終わるんなら待つぞ」

「いやいつ終わるかは俺にもわからないから俺に構わず シャルロット と言って来い。ああ、そうそう シャルロット はこの辺の地理とか知らないし女の子なんだからちゃんとお前がリードしてやれよ」

また シャルロット と強調して言っていく葵。なんでだ？

「ああ、言われなくてもわかってるよ」

「おう、デート楽しんでこい」

「デ、デート!?!」

顔が赤くなる俺をニヤニヤしながら見る葵。くそ、変な事言っからただ一緒に買い物誘っただけなのに、妙に緊張してしまっじゃねーか。

週末の日曜日、天気は快晴。お出かけには絶好の日に今僕は一夏の一緒に電車に乗っている。昨日いきなり一夏からメールが来て、『二人で水着買いに行こうぜ』と誘われたから。確かに僕は水着をまだ買って無いから今日買いに行こうとは思ってたけど、まさか一夏から誘ってくれるなんて!しかも二人っきりで!僕が学園に女の子だとカミングアウトしてからは初めての二人っきりだよ!ここ最近一夏葵とべったりだったから余計に嬉しいよ!

「ああ、良い天気だなあ」

電車で揺られながら風景を眺めてる一夏に、僕は聞いてみる事に

した。

「あのね、一夏。ちょっと聞いていいかな？」

「何をだ？」

「えっとさ、どうして僕だけ誘ってくれたのかな？てっきりこういうのは葵も誘うとばかり思ってたから」

勇気を振り絞って聞いてみた。ま、まさか僕の事が好きだから！そして二人つきりになりたかったからとかかな！

「葵も誘ったが用事があつて来られないんだと。誘った理由だけどもうすぐ臨海学校あるだろ。お前以前女子用の水着持って無いって言ってたじゃないか。俺も買ってないからついだと思つて」

「っ、ついでに…」

さっきまでエベレストまで届きそうな舞い上がった気持ちが一気にマリアナ海溝まで下がっていったよ…。

うん、一夏にその辺を期待した僕がバカだったんだよね……、それにこの二人つきりも葵が用事があつただけなんだ。

「まあ！どつせそんなことだろうと思つてたけどね！」
落胆を誤魔化すためちよつと語気を荒くした。実際一夏に対し怒つてるけど。

「何怒ってるんだシャルル？」

シャルル。その言葉を聞いた瞬間僕の怒りは再度噴出した。

「シャルロット！二人きりの時はそう呼んでつていったじゃない」

「わ、悪いシャルロット！ん、そういえば二人きりで思い出したけど、葵が来てからシャルロットと二人きりになったのって今日が初めてだな」

「そうだよ、だから色々期待したのに……」

いくら久しぶりに親友と再会したからって、一夏ってば毎日毎日葵と一緒にいるし！まあ昔から仲が良かったのは筈や鈴から聞いてたけどさ。その葵もいなくて今日一夏から誘ってくれたのに誘った理由がツイでだなんて！

「乙女の純情を弄ぶ男は馬に蹴られて死んでしまうがいいよ」

「何だいきなり？でも確かにそんな最低な男は死ぬべきだな」

……鏡見なよ一夏。最低な男の顔が見れるよ。僕はは、と大きな溜息をついた。

駅について電車から降りても不機嫌な僕に、一夏が僕の機嫌を取ろうとしてきた。

「あ、あの〜シャルロット。理由はわからないけど、お前を傷つけたんなら謝る。ごめん！だから機嫌直してくれ」

そういつて何度も頭を下げて謝る一夏。うん、もう許してあげよっかな。

「もういいよ。一夏が悪いとわかったんなら」

「そ、そうか。 じゃあ買い物にいくこうとするか！ここは俺は昔からよく来てるから案内するぜ。あ」

そう言っで一夏は僕の前に右手を出した。え、これってまさか！

「はぐれたら大変だもんな。手を繋いでいこうぜ」

ま、まさか一夏からこんな提案するなんて。ゆ、夢じゃないよね！

「う、うん！」

僕は慈しむように一夏の右手を左手で握った。

「……ねえセシリア。あれって手を繋いでない？」

「……ええ、繋いでますわね。しかも見てた所一夏さんから手を出してましたわ」

「そっか、見間違いでも白昼夢でもないんだ。よし、殺そう！！」

セシリアと一アリーナで訓練しようとして歩いてたら、偶然一夏とシャルロットが歩いているのが見えて気になって二人でついて来たけど、まさかこんな事態になるなんて！

一夏~~~~！あたし以外の女と二人つきりを出掛けるだけで無く手も繋ぐなんて！殺す！IS部分展開！衝撃砲用意！発

「やめなさいっての馬鹿」

「ゲエツ！」

いきなりあたしは襟首を後ろから強く引つ張られ、服に首が圧迫された。誰よ！邪魔するのはって、

「葵！」

「はあ〜い」

葵はあたしの襟首を掴んでいた。下手人はあんたかい！さらに葵の後ろにはラウラもいた。

「葵さん、ラウラさんも！どうしてここに？」

「いや昨日からシャルロットが浮かれてたのが気になってたのでな。今日の朝、えらく身だしなみを気にして出掛けたシャルロットを見て、もしやと思ったら案の定一夏と一緒にになった。そして私も二人に交ざろうとしたら」

「私が止めたって訳。まあでも面白そうだからこうして二人の尾行はしてるけどね」

そういつて歩き出す葵。その後をついていくラウラ。葵の手にはカメラも握られている。完全に出歯亀状態。ってちよっとまって。

「ねえ葵。もしかして今日二人が出掛けるの知ってた？」

「知ってたわよ。だって元々一夏から誘われてたから。でも断ってシャルロットと二人で行くようにしむけたけど」

「はあ！それどういうことよ！」

なんであんたシャルロットの味方してんのよ！どうせならあたしの味方しなさいよ！

「まあまあ落ち着きなさいって鈴。大声出すと二人に気付かれるわよ」

「そうですねよ鈴さん、少し落ち着いてください」

あたしを宥める二人。葵はともかく、セシリアあんたは何で落ち着いてるのよ。

まああたし達がこうしてるうちにも一夏達は移動し続けているため、取りあえず皆で尾行を再開することにした。うー、まだ手を握ってるし。

「ところで葵さん、一つ聞いてもよろしいですか？」

「何セシリア？」

「先ほどの台詞から考えますと、葵さんは一夏さんとシャルロットさんを二人っきりの状況を意図的に誘導したように思えますけど」

「さすがセシリア！鋭い！でも意図的っていうよりこれは偶然かな。一夏が買い物行こうと誘って、そのメンバーが私とシャルロットの二人だけだったから出来た事だし」

「葵、あんた何であるの二人を二人っきりにしたかったのよ。まああんなことだからただ面白そうだからって訳じゃないんですよ」

あたしの言葉を聞いて少し驚いた顔をする葵。だてにあんたと幼馴染してるわけじゃないのよ。ほら、早く言いなさいよ、あたしの言葉を聞いてセシリアもラウラも葵に教えて欲しそうに見てるわよ。

「うーん、簡単に言えば一夏とシャルロットの関係をリセットさせたいから」

そういつて何故か葵は申し訳ないって顔をしてシャルロットの方を向いた。

休日でごった返しているシヨツピングモール『レゾナンス』を、俺はシャルロットと一緒に手を繋いで歩いている。全く凄い人ごみだ、出発前に葵が言っていた「あそこはぐれたら面倒だからシャルロットと手を繋いでいた方がいいぞ」は本当だな。あいつの忠告に感謝せんとな。しかしさつきまでかなり不機嫌だったのに、今はかなり機嫌が良いな。鼻歌まで歌ってるし。

人の流れも落ち着いた噴水がある広場まで歩いてきて、俺はなんとなく上機嫌の理由を聞いてみた。

「なあシャルロット、どうしてそんなに機嫌が良いんだ？」

俺の質問にシャルロットは

「え、だってこうして一夏と手を繋いで買い物に来てるんだよ！嬉しくない方がおかしいよ！」

と、満面の笑顔で返した。いやそう臆面も無く言われると少し照れるな。

「そつだシャルロット、さっき思ったんだが皆もうお前が女の子だつて知ってるんだから別に二人っきりの時にシャルロットて呼ぶの

も普通だよな。でもどうせだし別の呼び名考えようか、俺とシャルロットだけの呼び名」

俺の言葉に吃驚した顔をするシャルロット。え、そんなに可笑しなこといったか？

「え、いいの!？」

「うん、そうだシャルなんてどうだ。呼びやすいし」

「うん、いいよ凄く良いよ!」

「そ、そうかそんなに気に入ったならなによりだ」

俺は笑顔で「シャル、シャルか」と喜んでいるシャルを見る。

いつものES学園の制服で無く、私服姿なんだが、シャルってミニスカート履くんだな。そこから見える脚線美がって何見てるんだ俺! しかしこうして見るとシャルって本当に女の子だな。男として入学してきたのが嘘のようだ。ん、男、シャルル…

「なあシャル、一つ聞いていいか？」

「なあに一夏」

「もしかしてだが、シャルが学園側に女だって公表した後も俺はずっとシャルルって呼んでたけど、…実は嫌だったか？」

俺の言葉にシャルは複雑な顔をした。

「うん、どうだろ。最初にシャルルって紹介しちゃったから一夏の中でそれが定着してしまっただなあと思ってたけど、……本心じゃシャルロットって本名で呼んでほしかったかな」

「そっか、ごめんシャル。俺無神経にお前の事傷つけてた」

「良いよ別にそんなの。だって今じゃ一夏から素敵な愛称もらっちゃったし。それになんとなくだけど理由もわかるし」

「理由？」

何だ？シャルは何を知ってるってんだ？

「タイミングが悪かったんだよねえ。僕が女の子だって公表した日は一夏、皆から一日中追いかけられてたし翌日は休日。そしてその翌日は葵の初登校で衝撃的な告白。でね、一夏は葵が女の子になっても変わらないって思ってるでしょ。多分だけどその意識を僕にも向けてたんだよ。シャルロットに戻ったけど、一夏の中じゃ僕は変わらずシャルルのままって」

シャルの言葉に俺は衝撃が走った。ああ、そうか俺シャルが堂々と女の子に戻ったってのに心の奥底では、男のシャルルの方が本当の姿だと……。なるほど、それで葵は昨日…。

「ごめんなシャル、確かにその通りだったよ。お前が勇氣振り絞って女に戻ったってのに俺は…」

「だからいいよもうそれは。一夏も今謝ってるし、それに」
そういつてシャルは右手を胸に当て、

「今の僕はどう見える一夏。男の子？女の子？」
と笑顔で聞いてきた。んなもん決まってる！

「ああ、可愛い女の子に見えるぜ」

俺の台詞を聞いて、シャルは耳まで真っ赤になった。風邪でもひいたのか？

「うんうん、作戦は大成功！これでシャルロットも報われるつてもよね」

「いやあんたがしたかったのはわかったけど……あんた何時の間に一夏に盗聴器つけたのよ」

先ほどまでの会話は、葵が一夏にとりつけていた盗聴器で全員聞いていた。葵が一夏をシャルロットと二人きりにさせた理由がわかり、セシリアもラウラも二人の会話を聞いて複雑な顔をしている。……あたしもね。二人にそういうのがあったなんて全然気付けなかった。

「そんなの同室で生活してるんだからいくらでもあるわよ。でもこの問題に一夏が気付くかは賭けだったけど」

「まさに穴だらけの作戦だな。一夏の鈍感さを考えたら普通に何も無く終わる可能性もあっただろうに」

ラウラの言葉にはあたしも同感。あの一夏が今回ここまで頭が回ったのは奇跡としか思えない。

「まあ多少の仕込みはしたわよ。でも私は一夏はちゃんと気付くと思ってたわよ。まあ愛称までは予想外だったけど」

「どうして一夏さんが気付くと？」
セシリアの疑問に葵は笑顔で言った。

「ん？しいていえば親友としての勘」
その言葉にあたしは少し悔しくなる。なんだかんだでやつぱ葵、
一番一夏の事見てるし、………信頼してるんだってわかったから。

「いやあこれでようやく肩の荷がおりたわ。ところで」
そういつて、あたしとセシリアとラウラを見ていく葵。何よ一体。

「これで一夏も本当の意味でシャルロットを女の子として認識した
わよ。そして前は一ヶ月間寝食を共にした相手。はつきりいつて強
敵ね」

あ~~~~~そうだった！え、これってちょっと不味いわよ！

「いや~~~~これから楽しくなりそう」
葵は他人事のように言いつて、苦悩するあたし達を眺めていつた。

買い物狂想曲（前編）（後書き）

無駄にシャルル設定引っ張ってました。そして買い物してないし今回。

次回は葵中心にやりたいです。

買い物狂想曲（後編）

「さてと、もう私は自分の買い物に行くけど皆どうする？」
そういつてこの場から離れようとする葵。ってちよつと待ちなさい。

「なによ葵、あんたさつきあんな事言っておいて続き見ない訳？あの二人の事気にならないの？」

「あんまり。だってあの一夏だし。今日はシャルロットを本当の意味で女の子だと自覚したようだけど、それだけで一気に関係が進むようなら中学の時に鈴、あんたととづくに結ばれてるわよ」

「……悲しいけど確かにそうね」
あのキングオブ鈍感の一夏の事だし。凄い説得力あるわね。

「それにしても」
そういつて一夏とシャルロットの二人を交互に見る葵。そして一夏を見て、

「シャルロットとデートしてこいと煽ったのに、一夏の奴黒のジーンズに柄物Tシャツ一枚とは……。シャルロットが気合入ってる分余計に浮いてる……」

一夏の服装に呆れてる葵。うん、確かに一夏の服装はデートに行く服装とは思えないけどさ。葵、あんたには言われたくないと思うわよ。

「……いや葵さん、貴方もそれは女の子としてどうなんですか？」
そういつて若干呆れ顔をしながら指摘するセシリア。あたしも同

感。だって葵、……上は無地の白Tシャツ、下は青い若干くたびれたジーンズ。シンプルにも程があるわよあんな。

「そう？変かな？夏らしく、そして私に似合う服装だと思うけど」
……まあ似合ってるわよ。でもねえ。

「そんなことより、二人はもうかなり先に行っちゃってしまっているぞ。葵、あの二人に交ざるのを邪魔して様子を見ようと言ったのはお前だろう。なら責任持って二人が水着を買ってまで付き合え」

ラウラが一夏達を見ながら言う。まあラウラの言い分も一理あるわね。ラウラの行動の邪魔をしたのは葵だし。

「あーもうわかったわよ。それまでは付き合おうわよ。でもそれで降は知らないからね。私も買い物したいし。でもさすがに目的は達成したから盗聴機能は止めるわよ。これ以上は無粋だし」

渋々同行する葵。そしてまた、あだし達四人は一夏達の追跡を始めたのだった。

どうしてこうなってるんだろう？

俺は現在正座されている。隣にはシャル。俺と同様正座されている。そして俺達の眼前には

「いいですか織斑君、シャルロットさん。二人の仲が良いのはいい

ことです！ですが男女が一緒になつて更衣室に……」

と私怒つてますよーって顔をして俺達に説教してる山田先生。その隣に呆れた顔をした千冬姉がいる。うゝ、どうしてこうなった？水着コーナーに来た俺達は別々で水着を買いに行つて俺の分は早く終わつたからシャルを待つていたら急にシャルが来て俺の手を掴んで試着室に引きずりこんで……

それから急にシャルが脱ぎだして、水着に着替えて俺に見せて、そして急にレースを開けて俺達をみて呆れてる千冬姉達がいる。

…あゝカオスだ。なんなんだこの流れは。シャルが急に謎の行動をするし何故か千冬姉に見つかつて山田先生に説教されてるし。しかし…、あの時のシャルの生着替えは拷問物だったなあ。

「織斑君、なんで貴方は説教中なのに顔を赤くしてるんですか！」

「大方先ほどの試着室での事を思い出したんだろう。何をしていたかは知らんが」

「お、織斑くん〜！」

千冬姉の言葉を聞き、さらに激昂する山田先生に耳まで真っ赤になるシャル。千、千冬姉！何でわかるんだよ！

「それよりもいい加減出てきたらどうなんだおまえら」

千冬姉はそう言つて近くの柱に語りかける。すると、

「あゝ、やっぱりばれてました？」

と葵が出てきて、その後にセシリア、ラウラ、鈴が出て来た。

「おまえら結構前からこそこそ俺達の後ついてきたのは知つてたが、何をやってるんだよ？それと葵、お前今日は用事があつて来れ

ないんじゃないかったのか？」

「用事が終わったからここに来たまでよ。文句ある？」

俺が睨んでもしれつと答えやがった。この野郎。その後もあくだこゝだ騒ぐ俺達を見て

「あ、そういえば私も用事があるんです。学園関係の用事何で、鳳さん、シャルロットさん、セシリアさん、ボーデヴィツヒさん、青崎さん、お手伝いお願いします！織斑先生は別件お願いします！」

と言つて山田先生は葵達を強引に引きつれてどこかに行つてしまつた。いいのか生徒を仕事につき合わせて？

「全く山田先生も変な気をつかつてくれるもんだ」

呆れた顔をして、その後事態を把握してない俺に千冬姉は説明してくれた。なるほど姉弟水入らずね。千冬姉もこの場合は千冬姉と呼んでいいと許可してくれたし、久々に千冬姉と本当の意味で二人きりになつて俺もちょっと嬉しくなつた。山田先生に感謝しないとな

「そつだ一夏、どうせだから私の水着を選んでくれ」

と言つて俺に二つの水着を見せる千冬姉。黒と白のビキニか。千冬姉なら……黒だな。でもこの水着だとなあ。男が寄るか？なら白の方がいいかな。しかしこの白の水着……これは

「どつちがいいと思つた？」

色々考えてたら千冬姉が俺に聞いてきた。うん、害虫防止のためにもここは白だな！

「白かな」

「嘘をつくな。お前は黒の水着を一番注視していた。お前は気に入

った方をよく見るからすぐにわかる」

と言つて黒の水着を掲げる千冬姉。え、俺ってそんな癖があつたのか？

「じゃあお前が気に入つた方を買つとしよう。ところで一夏、さつき白の水着も急に見だしてたがどうしてだ？」

少し笑いながら俺に聞いてくる千冬姉。何故に？

「いやその白い方は葵か、箒に合いそうだなあと思つたんだよ。いやあの二人も千冬姉同様スタイルいいし」

「ほう」

と言つて何故か少し笑いながら俺を見る千冬姉。な、なんだよ。

「いや何お前も少しは異性を意識してきたなと思つてな。水着を見て似合う女の姿を連想するとはな。葵と箒もさぞ喜ぶだろうな」

「いや千冬姉、さつきも言つたけど体型似てるからつい想像しただけだつて！それに葵は現在進行形で、箒も以前一ヶ月位同室だったんだからそりや意識するさ。…昔とはやっぱ違うんだから」

「それでも似合う水着を自然に連想するとはな。さつきはデュノアとデートしてたしな。これも同室相手か。…もしかしてお前は同室位せんと相手を意識しない朴念仁ではあるまいな？」

「ちげーよ！何言ってるんだよ千冬姉！それにシャルロットとは買い物に来ただけだつての！」

「…憐れだな」

と言つてはあゝ、と溜息をつく千冬姉。何変な事言つたか俺？

「で、どうなんだお前は。人の水着を見て私の事を心配する余裕ないだろう。お前もいい年頃だからそういう相手でも見つける。周りには余るほどたくさん異性がいるだろうが」

「いやそんなこと言っても千冬姉。今はまだ俺そいつの考えられないよ。まだ友達と騒いで遊ぶ方が好きだな」

「友達…か。そういえば葵が登校し出してからお前以前よりも楽しそうに過ごしてるな。周りにいる連中は変わらないのに、葵が来ただけでお前の笑顔が増えたな」

「まあね。やっぱり気の置けない友達が増えるのは嬉しいし楽しいぜ」

「…でも、お前も葵はもう異性として意識してるんだよな」

「それは…まあそうだよ。さすがにもう男に思えないだろ。本人も女になったと公言してるんだし。でも、やっぱり俺の中ではあいつは大切な幼馴染だ。それだけは変わらない」

「そうか…わかった。まあ今はお前は皆と馬鹿騒ぎでもして良い思い出を作る方がいいのかもな」

「と言って千冬姉は水着を持ってカウンターに向かうようなので、俺もまだ他に買う物があるから千冬姉に用件伝えて別れる事にした。」

「山田先生、生徒五人も引き連れ無ければならぬ用事つて何よ
く？」

鈴さんが不満顔で山田先生に質問しています。まあ大体山田先生
がしたい事はわかりますけど。

「それはですね、ってボーデヴィツヒさんは何処へ?!まさか織斑
先生の所に?!」

「ラウラでしたら水着コーナーに居ましたけど急に真剣な顔して電
話しに行きましたよ。先ほど用件を済ましたらこちらに来るとメー
ルが来ましたから心配は無いと思います」

「そうでしたか、ふ、よかったです」
と言つて胸をなでおろす山田先生。やっぱり胸大きいですわね。

「ところで山田先生、久しぶりの姉弟水入らずをさせるのは良いで
すけどその間どうします?お茶でもしますか?」

「あ、青崎さん!何で私の計画を?」

「いや僕もすぐわかりましたけど」

「一夏さんだけ連れなだけでバレバレですわよ」

「そ、そうよバレバレよ。すぐにわかつたわよ!」

……鈴さん先ほどの発言は?それに目が泳ぎまくってますわよ。

「そ、そんな。そんなにバレバレだったなんて」

「まあそれは置いときまして。山田先生、何も無ければ私自分の買い物に行きたいんですけどいいですか？」

「買い物ですか。いいですよ。あ、どうせですから青崎さんの買い物に皆で付き合いますよ。いいですか青崎さん？」

「構いませんよ。それに皆の意見も聞いた方が良い物買えそうですし」

「わたくし達の意見？葵さんは何を買おうとしてるんでしょう？」

「葵、何を買いに行くの？」

「ん、皆もう買ってるとは思いつけど来週で7月7日、幕の誕生日じゃない。まだ私はプレゼント買ってないからこー」

「「「誕生日~~~~~!!」「」」

葵さんの言葉に、鈴さん、シャルロットさん、わたくしは絶叫しました。聞いてませんわ！

「嘘、みんな知らなかったの？」

葵さんが吃驚してますが、それ以上にわたくし達が吃驚です！

「聞いてないわよそんなの！」

「…何でこーいうの黙ってるかな？」

「危ない所でしたわ。危うく当日何もおめでとうの言葉も無いまま過ごすはめになりそうでしたわ！」

そんなことがあって後で知ったりしましたら気まず過ぎますわ！

「あら、皆とつくに知ってるそばかり。まあ確かに誕生日の話なんてしなかったけど」

「まあ確かにしてませんでしたけど…」

「葵も一応僕達に確認しておいてよ…」

「一夏もファースト幼馴染が聞いて呆れるわよ。誕生日なんて自分から言い出しにくいものなんだからあいつから私達に話さないよつたく」

「まったくですわ。一夏さんはこういう配慮が欠けてますわ。葵さんもですけど。」

「待たせたな。どうした皆、さっきから騒いで」

「そうこうしてるうちにさっき何処かへ行かれてたラウラさんが戻ってきました。なにやら紙袋を持ってますが何を買ったのでしょうか？」

「ちょうどラウラも来たし、皆で篝の誕生日プレゼント買いにいこうか」

「誕生日？何の事だ？」

「後で説明してあげるわよ」

「こうして私達は篝さんの誕生日プレゼントを買いに行く事になりました。後ろから山田先生が「青春ですね」と微笑んでいます。…なんか恥ずかしいですわね。」

千冬姉と再度合流し、まだ皆戻って来ないから近くのカフェで時間を潰す事にした。なんか本当に久しぶりに千冬姉と二人つきり度過ごしてるなあ。今は家族として話も出来るし、山田先生には本当に感謝しないとな。

「しかし休日に弟に水着を選んで貰い、カフェと一緒にコーヒーを飲むつても……私も一夏に言える立場でも無いな」

「何で？家族なんだからおかしくないじゃないか？」

「それを平然と言える事に私はお前の教育を間違えたのかと思えてくるな」

なにやら難しい顔をして溜息をつく千冬姉。俺変な事言ったか？とか考えてると

「織斑先生〜！織斑君〜！お待たせしました〜！」

と皆を引っ張って行った山田先生が戻ってきた。山田先生の後ろにはセシリア、シャル、鈴、そして…え！？

「…葵、ラウラ。その格好どうしたんだ？」

「あ、あまりじりじり見るな！」

「はあ、こつういのはあんまり好きじゃないのに……」

顔を真っ赤にして恥ずかしがるラウラに、こちらも恥ずかしそうに自分の体を見る葵。俺と別れる前はラウラは制服、葵は白Tシャツにジーパン姿だったのに、今では

「どう一夏！あたし達がプロデューズしてあげたこの姿は！似合ってるでしょ！」

「ラウラは制服しか持ってないって言うし、葵もちよっとオシャルというかもうちよっと服装に気を配った方がいいと思ってね」

「それでわたくし達が似合う服装を選んでさしあげましたって訳です。どうです一夏さん？」

胸を張って答える鈴、シャル、セシリア。なるほどねえ。しかし、

「いやラウラの服、確かに似合ってるって可愛いんだけど…普段着で黒のゴスロリ服はどうなんだ？」

いや似合ってるし凄く可愛いんだけど…これ来て街中歩くのはラウラ的にはどうなんだろう？

「何言ってるんだよ一夏！こんなに似合ってるんだよ！問題なんてあるわけ無いよ！」

と言って「可愛いよラウラ〜」と抱きつくシャル。完全にお前の好みだろそれ！

「か、可愛い〜…」

ラウラは先ほどから顔を真っ赤にしてぶつぶつ言っている。大丈夫か？そして

「……………」

「無言で見るのはやめてくれない。余計恥ずかしい」

葵は俺をそういつて睨むが…どうコメントしようか。いつもTシヤツジーパンなのに今は、赤の可愛いデザインのカミソールに、白いミニスカート。そして黒のニーソックスでこちらもシャルに負けず劣らず綺麗な脚線美…って何をまた考えてるんだ俺は！しかもいつもはストレートにしてる髪をポニーテールにしてるし。うん、髻とはまた違った印象がする。全体を見てこれは…

「ほう、ラウラもかなり見違えたが葵はそれ以上だな。キャミソールはセシリア、お前の見立てだな」

「ええ、そうですね織斑先生！何でわかりましたの？」

「いやお前がこういう服装が好きそうだからだ。で、このミニは鈴おまえだな？」

「え、ええ！そうですね！千冬さん！」

急に昔の呼び名で呼ばれたため、鈴も昔からの呼び名で答えたが、直後にしまったって顔をする。

「大丈夫だ鈴。今はオフだから千冬姉もそれで注意しないぜ」

「そ、そう。よかった」

かなりホツとした顔で答える鈴。まあ頭叩かれたくないからなあ

「ふむ、かなり見違えたな。ラウラも葵もかなり似合ってる。一夏、お前もこういうのを相手にプレゼントできる男になれよ」
「前進します。」

「で、一夏。どういれ」

葵が俺に聞いてきた。いやどつってお前…。ってなんだ皆無言で俺を見て！山田先生も千冬姉も俺に注目してるし！

「い、いやあまあ、あれだ。に、似合ってるぞ」

「つまらない回答だなあ。可愛いとか一言位言えないの？普通それくらいは男のたしなみと思うんだけど」

と言つてつまらない顔をする葵。いやだつて可愛いし凄く似合ってるし正直……。

でもお前にそれ言うの凄く恥ずかしいし言えるかよ！

「全く、つまらん男だなお前は……」

…千冬姉までそう言わなくてもいいじゃないかよ。そして千冬姉、葵に何か言つた後葵連れて何処かに行つてるし。

その後は山田先生からは「織斑君には失望しました」と残念な子扱いされるし散々だ。

「ねえ、さっきの一夏の態度さ、ヤバくない？」

「わたくし達、もしかしたらとんでもない事をしてしまったのでは？」

「同じ私服を見たつてのに僕とラウラと葵じゃ差がありすぎないかなあ……」

「可愛い……」

なんか鈴達顔を寄せ合つて何か話し合ってるな。何を話してるんだ？そうこうしてるうちに千冬姉と葵が戻ってきた。葵の手には紙袋。何を買つたんだろう？

「さてと、もうすぐ夕方だ。学園に戻るぞお前ら」

こうして俺達は買物を終え、学園に戻ることにした。色々あったけどまあ結構充実した一日だったかな。そして俺は隣にいる葵を見る。……俺の評価が気に入らなかったのかまた元に戻っている。

「どうかした？」

「いやなんでもない」

…やっぱり少し位褒めとくべきだったかな。

おまけ

「一夏も、葵も、鈴も、セシリアも、シャルロットも、ラウラもない。私以外誰もいない……。何故私だけ除者にされたんだー!!」

「あ、あの篠ノ乃さん！久しぶりに部活に精を出すのは嬉しいけどちょっともう勘弁して！皆もう疲れて」

「どうして私だけー！」

「あーもう！誰かなんとかしてー！部長もこんな時だけいないしー！」

本当に偶然が重なった結果箒だけ皆と一緒になれなかったのだが、無論箒にはそのような事はわかるはずも無く、一夏達が帰ってくるまで荒れに荒れた箒であった。

買い物狂想曲（後編）（後書き）

買い物終了

いやね原作では描写無かったけど、篇結構落ち込んでないかなあと

臨海学校（序章）（前書き）

そういえば、自分の高校はこんなイベントなかったなあ…
いやある方が珍しいのかな？

臨海学校（序章）

「あー海だー！皆ー！もうすぐ泳げるわよー！」

IS学園をバスで出発してからはや数時間、目的地に近付いてきたためクラスの女子達はかなり興奮している。まあ無理もないか、今日の日を皆楽しみにしてたもんな。なんせこの臨海学校、初日はまるまる自由時間だから皆何して遊ぼうとか移動時間中そればっかだったし。

「一夏さん、もうすぐ到着しますわね」

通路の向かい側に居るセシリアも楽しそうな顔をしている。

「海で泳ぐなんて久振りだな。ラウラ、一緒に泳ごうね」

「あ、ああ。そうだな」

こちらも楽しそうな顔してラウラに話しかけるシャル。しかしさつきからラウラはずっとボーっとしている。どうしたんだ？バス酔いか？

「大丈夫かラウラ？気分悪いのか？悪いならすぐに言えよ」

「だ、大丈夫だ一夏！心配はしなくていい！」

そういつて顔を赤くしてそっぽむくラウラ。いや本当に大丈夫か？

「そうか、でも無理するなよ。なにかあったら」

「わ、わかっている。私の事は気にするな」

「大丈夫だって一夏。少し敏感になりすぎだよ」

「葵さんの事はしかたありませんわよ。ですから一夏さんが責任を感じる必要はありませんことよ」

「でもなあ…」

皆はそう言うけど、やっぱりしなかなあ。

「しかし葵も、何故よりもよって今日に…」

皆が楽しみにしていたこの臨海学校。目的地に向かうこのバスには葵の姿は無い。何故なら…

「38度6分。風邪ですね」

「体調管理位しっかりしろ。代表候補生たる貴様は」

「も、申し訳ありません…」

今日の朝、俺が起きたら隣のベットで顔を赤くしてうなされてい
る葵がいた。葵の額に手を当ててみれば物凄く熱く、これはヤバい
と思った俺は急いで寮監している千冬姉を呼んだ。山田先生も一緒
になって俺の部屋に行き、葵の容体を見てもらった。

「しかしどうします織斑先生？普通の風邪でしたら注射を打って薬
飲んでぐっすり寝れば明日には治ってるでしょうけど」

「ま、まさか俺だけここに留守番しろなんて言いませんよね！千冬さん！」

葵！お前風邪のせいで状況判断ヤバくなってるぞ！千冬姉の前でその口調にその呼びかけは！

「…まあ安心しろ。今回青崎が行かないと困る事になるからな。別の車に青崎は寝ながら運ぶ事にする。今日の所は向ここの旅館で寝てる」

お、さすがの千冬姉も病気で苦しんでる葵に鉄拳制裁はしないか。しかし葵が行かないと困る？何の事だろうか？そして千冬姉は葵を慈しむような目で見て言った。

「まあゆっくり休め。治ったら色々待ってるぞ。特に出席簿がな」

…どうやら治るまでは見逃してやるだけのようだ。治ったら葵の運命は…」愁傷さま。

「よかったな葵、臨海学校に行けるぞ」

「それはホツとしたが、…結局一番楽しみにしていた初日の自由時間」

「まあ、それは諦めるんだな。たたくせっかく私が」

「？織斑先生どうしました？」

「いやなんでもない」

そして葵のために色々用意すると言って部屋を出る千冬姉。山田先生も薬を取りに部屋を出て行った。

「あゝ糞！なんで今日に限って俺は体調崩してるんだよ…」

「ごめんな。俺がお前の変化に早く気付いてれば」

「別に一夏が謝ることじゃないだろ。それに俺もいつこうなったかなんて見当がつかないんだし」

「だが同室にいなから」

「だからお前が責任を感じることは無いって。あ、そうそう
そう言っつて葵はベットから降り鞆を漁り始めた。

「おいちゃんと寝てろよ」

「あつた。一夏、これを」

そういつて葵は俺にカメラを渡した。

「一夏、俺の代わりにそのカメラで皆の水着写真を撮ってきてくれ。こんなチャンスはもう無いんだ！女の子の水着姿を見れないなんて男としてこれほど悔しいことは無い！」

「おい葵、お前熱のせいで完全に昔に戻ってるぞ。それにお前もう女だろ！」

大体お前女子更衣室でそんな光景毎日見てるだろが。相当熱で頭ヤバいなこいつ。それにこう言っつてはなんだが、お前以上のスタイルを持った女子なんてほとんどいないと思うが。

「あゝそうだっけ」

そういつて再びベットに横になる葵。先ほどから声は元気だが顔はかなり苦しそうだ。

「あゝ一夏にも移つたらヤバいからもう荷物まとめてこの部屋でろ
葵はそういつて扉を指差した。

「馬鹿か。看病位させろ」

「ここでお前まで移つたら俺がへこむんだよ。頼むから出てけ。そ
れに汗かいたから体も拭きたいんだよ。ああ、お前が俺を拭いてく
れんの」

と挑発的な笑みを浮かべる葵。くそ、そんなこと言われたら出る
しかないじゃないか

「わかったよ。葵、お前もよく寝て早く元気になれよ」

「ああ。あ、一夏最後に頼みがある」

「頼み？」

「ああ、箒をここに呼んでくれ」

以上回想終了。まあ葵は別便で向こうに行くと思った時は皆ホッ
としてたな。箒が一番よかったよかったと言ってたっけ。

…前回一人だけ除け者にされたと誤解したからな。一人の苦しみ
が一番わかるんだろう。

「そついや箒、葵はお前に何の用事があつたんだ？」
俺はバスに乗ってからずっと心ここにあらずな状態になっている
箒に尋ねてみた。

「あ、な、なんだ一夏！何か言つたか？」

「いや葵は箒に何の用事があつたのかと思つてな」

「あ、いやそれは……」

と言つて顔を赤くする箒。何故に？

「と、とにかく！葵も明日には元気になるんだ。心配はいらないな、
うん」

いや俺が聞きたかつたのはそついう事ではないんだが。

「そつだね、まあ今日は葵の分まで僕達は楽しんでこうよ」

「うむ、葵が言っていた海の家とやらで不味いラーメンを食べ、食
べにくくなつても目を隠して棒でスイカを割り、海に向かって「バ
カヤロー！」と叫ぶのを代わりにやっておいてやるう。葵はそれら
が日本の風物詩で海に行つたらやらなければいけないとか言つてた
からな」

「…日本には随分変わった風習があるのですわね」

いやラウラ、セシリア。確かにそれはある意味間違つてはないん
だが…あー説明が難しい！葵、絶対わざとぼかして話してやがるな。
と、そんな事話してるうちに俺達は目的地に到着した。

旅館に到着後、俺の部屋は千冬姉と一緒に山田先生から聞かされた。それは俺が一人部屋だと就寝時間後部屋に突撃する女子が必ず出るからとか。…まあたしかに千冬姉と一緒にだとそんなことする度胸の奴はいないか。ちなみに今回は葵と一緒にでは無い。聞いた限りでは篝とのほほんさん達と一緒にらしい。

「いや〜アオアオと同室なんて楽しみだよ。風邪治ったら一杯ガールズトークやりたいよ〜」

「本当よね。こういう機会でも無いと青崎さんいつも織斑君というし。ま、それは篠ノ乃さんも同じだけど」

「全くそうよね〜。ねえ篠ノ乃さん、織斑君との昔話よろしくね〜」

「う、ああ」

おお篝、のほほんさん達に押されてるなあ。しかし安心した。入学したての頃とは随分変わったな篝も。

「…おい一夏、何故娘を見る父親みたいな目で私を見ている」

「きのせいだ」

そう言った後、旅館の前に一台の救急車が現れた。もしかしてと思ったら、案の定そこからストレッチャーに乗せられた葵と千冬姉が出て来た。

「…救急車で来たのか」

「確かに寝ながら運べますけど…」

救急車から出た葵は熟睡している。顔色も朝よりもかなり良くなつており、これならすぐに元気になりそうだ。葵はそのまま旅館の一室に運ばれ、そして救急車から降りた千冬姉と一緒に、俺は旅館の女将から部屋を案内された。部屋までの道中俺は千冬姉に葵の容体を聞いてみたら、注射と薬を飲んだらかなり容体は良くなつていて、明日には山田先生の言つとおり元気になるとの事らしい。いや本当に安心した。

早く元気になれよ。

部屋着くと千冬姉は開口一番に

「まあ部屋割の都合上、お前と私は一緒に部屋になつたが、あくまで私が教員だと言つ事を忘れるなよ織斑」
と言つてきた。相変わらず仕事人間だな。

「わかつてますよ織斑先生」

「ならばいい」

…うん、千冬姉少し硬すぎないかな。部屋で二人っきりの時位は千冬姉と呼んでも良いじゃんか。

「公私の区別はつけんといかん」

…相変わらず俺の考えてる事は何故か読まれてるし。その後俺は千冬姉から風呂場等のいくつかの注意事項を聞かされた。

「まあ以上だ。さて初日は自由時間だ。着替えて海にでも行ってこい」

「織斑先生は行かないんですか？」

「私は他の先生達と連絡なり色々ある。まあ、どこかの弟がせつかく水着を選んでくれたからな。暇になったら海に行こうと思ってる」
おお、千冬姉もやっぱり泳ぎに行くんだ。しかし千冬姉の水着姿か……、何年振りかなあ。

「では私は仕事に戻る。織斑お前は遊んで来い」

「わかりました織斑先生」

千冬姉に行つてきますと言つて、俺は水着を片手に海へ行く事にした。

「なあ箒、これどう思つ？」

「知らん」

更衣室がある別館に行く途中箒と出会い、一緒に歩いてるんだがその道中に珍妙な物があつた。ウサ耳。どうみてもウサ耳にしか見えない物が地面に埋まっている。そしてその横には「引つ張つてください」と書かれた看板。：まあこんなことする人はあの人位しかないよな。

「なあ箒これ」

「知らん。私は先に行くぞ」
そう言っただけで本当に先に行ってしまう筈。うん、相変わらずだなあ。しかしやっぱり筈もこのウサ耳は……筈の姉、束さんだと確信してるんだな。

「まあ他の誰かが抜いたら面倒な事があるだろうし……」
そう思って俺はウサ耳を抜く事にした。えい、ってあれ？てつきり地面の下に束さんがいるかと思ったのに、ウサ耳の下は何も無かった。

「どうしましたの一夏さん、そんな物持って？」

「いやウサ耳が地面にはえててそれを抜いたんだが下に何も無くて」

「はい？」

わけわからんって顔をするセシリア。…うん、俺も言っただけで支離滅裂だと思っただけ。

「いや束さんが」

しかし俺が言い終わる前に、

ドカーン！

と空から巨大なニンジンが落ちてきて、俺達の前に突き刺さった。

「な、なんですのー！」
セシリアがニンジンに向かって叫ぶ。そのニンジンだが急に二つに割れ、

「ふっふっふっ！引っかかったねいつくん！」

と叫びながら、世界一の天才、篠ノ乃東さんが現れた。…しっかしなんていうファンシーな格好だろう。千冬姉なら絶対着ないだろうな。いや東さん似合ってるからいいんだけど。東さんは俺から先程抜いたウサ耳を取り、頭に装着した。

「いや〜久しぶり！本当に久しぶりだね。！元気だったいつくん。で、ところで篝ちゃんはどこかな？さつきまで一緒だったよね？」

「あ〜それなんですけど」

まさか東さんと会いたくないから逃げたとは言えないし、どうしようかと思ったら

「まあ私が開発した篝ちゃん探知機があればすぐ見つかるけどね〜。じゃあいつくん、またね〜」

と言って走り去ってしまった。相変わらずゴーイングマイウェイな人だ。

「あの一夏さん、先ほどの方は一体…？」

「ああ、さっきの人が篝の姉の篠ノ乃東さんだよ」

「えええ！さっきの方が篝さんのお姉さまで、現在各国が探してる行方不明中の篠ノ乃博士?!」

かなり驚いてるセシリア。まあそうだよな。ISを開発した天才科学者があんな人だとは普通思わないよな。

「そうそういつくん」

「どわあー！」

いつの間にかまたこっちに戻ってきた東さん。何時の間に！

「たしかあーちゃん風邪ひいたんだよね。だったらこれ渡しといてね。」

と言って俺に紙袋渡してまた何処かに行ってしまった。ていうか何で知ってるんだろう？まあ東さんだからで納得するけど。

「あーちゃんとはもしかして…。」

「ああ、葵の事だよ。東さん、昔から葵の事はあーちゃんって呼んでるんだよ。」

…多分これ薬だよな？まあ東さんが変な物渡すとは思えないし。

「じゃあ俺一旦葵のとこまで行ってこれ渡してくるよ。セシリアは先に行ってくれ。」

「あ、ちょっと待ってくださいー夏さん！」

その後俺はセシリアにサンオイルを塗る約束をさせられた。友達に縫ってもらえばいいのにどうして俺なんだろう？

そして俺は葵の部屋まで行った。そして部屋に入ろうとしたら

「こら貴方！寝てる女の子の部屋に何入ろうとしてるの！」

…部屋の中にいた旅館の従業員に止められた。どうやらこの人は葵の世話を任されてるらしい

「いや友達の見舞いに」

「何言ってるの！気持ちはわかるけど女の子の寝顔を見て良い理由

にはならないわよ。さあさあ行つた行つた!」

と俺を部屋から遠ざけようとする従業員さん。いやちよつと待つてくれ!

「わかりましたよ! 部屋には入りません! ですからお願いですがこれを葵の部屋に置いてくれませんか」

と言つて俺は束さんがくれた紙袋と伝言を書いたメモを従業員さんに渡した。

「まあそれならいいでしょう」

と言つて俺から紙袋とメモを受け取る従業員さん。そして俺を見てニヤつと笑い、

「ところでさつき貴方友達とか言つてたけど、実はこの子の彼氏? と、とんでもない事を聞いてきた。

「いや違いますって!」

「ふ〜ん」

なんだよこの人。ニヤニヤ俺を見て! なんか恥ずかしくなった俺は逃げるようにその場を後にした。

そして俺は、皆がいる海に向かう事にした。

臨海学校（序章）（後書き）

東さん、もういい年なんだからあの服装は無いなとか一夏に言わせようと思ったが、東に抹殺されるので止めました

臨海学校（初日自由時間）

蒼い空、白い雲、輝く太陽が煌めく絶好の海水浴日和の日。そして砂浜にたくさんいる自分と同年代の少女達。しかも全員水着姿。そしてこの場に男は俺だけ。弾とかに今の状況を言ったら呪い殺される事は間違いないだろう。で、そんな中俺こと織斑一夏は現在…砂浜に体を完全に埋められ頭だけ出ている状態になっている。そして俺の前方にはラウラ。ラウラは目隠しをされ、手には…木刀を持っている。

「さて、葵が言っていた日本の風物詩とやらを体験するか。割るのはスイカではないが」

「頑張ってくださいラウラさん！わたくし達がちゃんと誘導してさしあげますわ」

「ラウラ　！その馬鹿スイカ粉々にするのよー！」

「まあ割っても食べられないけどね」

ラウラに声援をかけるセシリア、鈴、シャル。皆その目は怒気を孕んでいる。セシリア達の後ろでは千冬姉が呆れた顔で、山田先生はオロオロしながら俺とラウラを見て、そして…箒は顔を真っ赤にして俺を見ている。

おかしいな、何でこんなことになったんだろう？

葵に束さんから渡された物を届けた後、俺は水着に着替え海に向

かった。すでに多くの生徒が着替えて海に来ており、かなり賑やかになってる。俺は数人の女子からビーチバレーやサンオイル縫つて等の誘いを受けたりした。そんな中水着に着替えた鈴が俺の前に現れ、

「どう一夏、あたしの水着姿！」

と胸を張って俺に水着姿を見せつけた。…うん相変わらず胸ないなど言ったら殺されるな。しかし鈴はタンキニタイプの水着か。うん似合ってるな。

「おお鈴、その水着似合ってる可愛じゃんか」

「か、可愛い！」

やたらと笑顔になって嬉しがる鈴。よし、俺の返事は間違ってるはないようだ。前買い物行った時葵がこういう場合は可愛いとか言うのが男の嗜みとか言ってたし。

そしてその後も

「どうですか一夏さん、わたくしのこの姿は！」

「どう一夏、前も見せたけど…似合ってる？」

「一、一夏！わ、笑いたければ笑え！」

と水着の感想を聞いてきたセシリア、シャル、ラウラに

「おお、似合ってる可愛いぜ！」

と答えていった。まあ実際に似合ってる可愛いし嘘は言っていない。しかしラウラの水着姿は普段と違った印象を受けて…いや本当に可愛いと思えた。ツインテールがまた良い感じに映えてる。しかしラ

ウラに感想言った辺りで鈴が

「ねえ一夏。あんたまさか取りあえず似合ってるとか可愛いとか言えばいいと思ってる無いです？」

と目を座らせて俺に聞いてきた。

「バ、バ力違う！本当に似合ってるし可愛いと思ったからそう言ってるんだよ！」

「ふん」

まだ疑いの目を向ける鈴。いやまあ…そう言えば大丈夫だと思ってたのは事実だけだな。あ、鈴の話聞いてラウラ達も俺にそんな目を向けている。

「何をしてるんだお前は？」

「皆仲良く遊んでますか」

俺が皆から不審な視線にさらされてる時、千冬姉と山田先生が俺達の前に現れた。あ、千冬姉あの水着ちゃんと着てる。…うん、弟の俺から見ても凄く似合ってる。いや弟じゃなかったらマジでヤバい位千冬姉の水着姿は…綺麗だ。うん、千冬姉胸大きいなこうして見ると。しかも形良いし。山田先生もビキニの水着を着てるんだけど、俺の視線は千冬姉に注がれてしまう。

「…何を無言でじっと見てるんだ貴様」

「ゲハッ！」

若干顔が赤くなった千冬姉に俺は頭を叩かれた。うん確かにちょっと見過ぎてた。しかし白でなくやっぱ黒のビキニが似合ってると思っただ俺の直感はずしかった。

「はい一夏。ずばり織斑先生の水着姿の感想は？」

「凄く似合っつて綺麗だ」

鈴が横から俺に聞いてきて、俺は無意識に答えた。

「へへ、あたし達は可愛いただけで織斑先生の感想は綺麗なんだ」と言っつて俺を睨む鈴。いやちよつと待て！

「いや鈴！それは深読みしすぎだ！大体千、いや織斑先生は可愛いより綺麗の方が的確だろ！」

「うむ、確かに教官は綺麗だ。しかし……」

「普通姉にそこまではつきり言いますかしら？」

「ていうか一夏完全に見惚れてたよね。僕達と比べて明らかに反応違っつたし」

うわ、なんか千冬姉の感想で皆の不満がいきなり爆発しやがった。

「いやよかつたですね織斑先生。織斑君から綺麗とか言われて」「ふん、別にどうでもいい」「照れなくてもいいじゃありませんか」「山田先生、ここで生徒達に砂浜での格闘術を披露しましょう。相手をお願いします」「ま。待つてください織斑先生！今は少ない休憩を満喫しましょう！」

なんか千冬姉と山田先生が言いあつてるが取りあえず無視。まあその後は「まあ一夏はシスコンだし」というかなり不名誉な理由で皆が勝手に納得した。……いやまあここで下手に反論したらまたややこしくなるから黙つたけどさ。

その後ビーチバレー等して一通り遊んだ後、お腹が空いたので海の家で何か食べる事にした。セシリア達は勿論、千冬姉と山田先生も一緒に俺達と食べる事となった。

「さて、海の家で不味いラーメンとやらを食べるとするか」

「ラウラ、わかってて不味い物食べるの？」

「しかしそれが日本の風物詩らしいからな」

「もしかして葵さん出鱈目を言ってるのでは？山田先生、本当ですか？」

「え、え〜とまあ確かに青崎さんの言ってる事は間違ってるは無いですが〜」

「どう言えばいいのか迷ってる山田先生。うん、確かに間違ってるからややこしいんだよなあ。」

「ところで織斑、篠ノ乃はどうした。いつもお前達と一緒にいるのに姿が見えないが？」

「いや俺も知らないんです。先に行ったはずなんですが。…ここに来る前に東さんに会いまして筭を探してましたから…東さんから逃げてるかもしれません」

「東が？あいつもここに來てるのか。なるほど、納得した」

「え、もうってどういつ」

と千冬姉と話してたら海の家の前で話題の人物の筭が息を荒くし

て膝に手をついていた。：どうやら東さんから逃げ切ったようだな。しかし箒の奴この糞熱いなかパーカーなんか着てる。

「あ、箒どうしたのこんなに息荒くして。てかさっきから姿見えなかったけど何処行つてわけ？」

「はあはあ、鈴、いや少し悪魔から逃げていた」
疲労困憊って顔で答える箒。いや悪魔はないだろ。

「なにがあつたのかわかりませんがかなりお疲れのようですよわね。箒さん、ちょうどわたくし達もこの海の家で食事をとりますから一緒にどうですか。休憩いたしましょう」

「うむ、一緒に不味いラーメンを食べようではないか」

「…ラウラ、やけにラーメンにこだわるね」

「あ、ああそうさせてもらう。い、いやその前に」
と言つて俺の前に立つ箒。顔を赤くしてもじもじし、

「あゝそ、その」
と言いながらパーカに手をかけるもまた手を放したりする。何がしたいんだ？

「あゝもうじれったいわね！」
と言つて鈴は箒が着ていたパーカーを強引に剥ぎ取った。

「…ら鈴！」

「一夏に水着の感想ききたいんでしょ。まあどうせ一夏はあたし達

と同じ事言っただろっけどね！」

鈴によってパーカーを取られ、その下に隠された水着はって、え？

「あ、あれ箒、その水着は…」

「ど、どうだ一夏！私の水着姿は！」

顔を真っ赤にして聞いてくる箒。白のビキニで機能性重視の作り。その水着は…そう先日水着を買いに行った時、千冬姉が黒の水着以外で候補に持ってきたあの水着だった。そしてそれは…あの日思い浮かべた通り箒に、いや想像以上に似合っていた。しかし箒も千冬姉同様、胸デカイな。そしてその白い水着は、箒の体に本当に合っていて…うわヤバイ。なんかすごく気恥かしい。

「どうなんだ一夏？」

もはや耳まで真っ赤にして上目遣いで俺に聞いてくる箒。輝く太陽の下その日差しにさらされたその姿に

「ああ、まあなんだ。綺麗だな」

と思わず言ってしまった。

「き、綺麗だと…」

俺の言葉を聞いてもはやゆでダコのようになった箒。あ、両膝が地面についた。

「だ、大丈夫か箒？」

「キレイキレイキレイキレイキレイキレイ」

なんかうわ言のようにキレイを繰り返す箒。おいおい大丈夫か？ん、何やら背中から殺気がする。恐る恐る振り向いたら…鬼が四人いました。

「ふ~~~~ん、僕達は可愛いけど箒だけ綺麗なんだ」

「一夏さん、この違いを明確に答えて貰えませんか？」

「ねえ、一夏ついでにさっきの態度の違いも教えて貰おうかしら」

「私以外の女に私以上の賛辞を送るとはな。嫁失格だな」

「うわなんか凄い怒ってるし！あ、千冬姉そんな呆れ顔しないで助けてくれよ。」

「知らん。ガキ共の色恋沙汰なぞ興味も無い」

「ひでえ。や、山田先生助けて！」

「織斑君、頑張ってください」

「いや何ですかその極上の笑顔は！面白がってますよね絶対！」

「さてと、一夏。懺悔の時間は終わった？」

「こうして俺は鈴達に生き埋めにされる事となった。」

今一夏はラウラ達にスイカ割りの刑に処されている。理由は一夏が私だけ水着姿を見て綺麗と言ったかららしい。それを聞いて私は頬が緩むのが止まらなくなる。そうかそうか一夏、私だけ特別に綺麗

麗と言ったのか。こ、これはあれか！私は他の皆よりも一夏に対しリードしてると言う事なのか！

「ずいぶんと嬉しそうだな篠ノ乃」

と、私の水着を見ながら千冬さんが私に言ってきた。ええ、物凄く嬉しいです。って千冬さん、何故私を睨んでるのですか？いや、これは…私の水着を睨んでいる？

「ところで篠ノ乃。その水着ずいぶん似合ってるな。良いセンスをしている」

「いえ、これはその実は今日学園を出発する前に葵に呼ばれまして、その時渡されたんです。なんでも一夏にこれ着て見せたら好感度上がる事間違いないとかあいつが言いました。しかし、そのどうやら本当だったようで葵に感謝してます」

「そうか青崎が…」

そう言って千冬さんは溜息をついた。え、何故？

「いやそうか、なら青崎に礼を言っとくんだな」

と言って千冬さんは山田先生と一緒に海の家に入っていく。そして一夏達の方を見てみると

「~~~~~待て~~~~~!~~~~~」

「誰がまつか~~~~~!」

どうやらISを展開して生き埋めから脱出した一夏をセシリア達が追いかけてるようだ。長くなりそうだし私も千冬さんと同様に海の家に入る事にしよう。

あやうく殺されそうになったりもしたが、まあなんとか落ち着いた鈴、シャル、セシリア、ラウラから半殺しにまけてもらい、ボロボロになったがその後は皆で海の家で食事をし、午後も皆で楽しく遊んで楽しい時間を過ごした。ちなみに

「葵の奴唄を言いおつて！凄く美味しいではないかこのラーメンは！」

「うん、確かに美味しいね。不味いと覚悟してただけに吃驚だよ」

「いえわたくしは不味いですわよ…」

とセシリアを除き俺も鈴も箒もラーメンは美味しいと絶賛した。…まあこれをここ以外で食べたなら食えたもんじゃないんだけどな。

まあ初日の自由時間、葵がないのは残念だったが皆と一緒に良い思い出を俺は作る事が出来た。

「ふん、よかったね楽しそうな思い出が出来て。私は目が覚めたらもう沈んでいく夕陽しか見れなかったけど」

「いやそれはお前が」

「いゝもんいゝもんどゝせねえ」

時間も過ぎ、今俺達は大宴会場で夕食を食べている。葵も風邪が完全に治ったとのことなので、俺達と一緒に夕食を食べている。

「しかし目が覚めた後束さんがくれた薬を飲んでみたけど、怖い位一瞬にして完治したわ。起きた当初はまだ体だるかったのに。さすが天才としかいいようがないわ」

「全くだ。束さんに感謝しないとな」

「ああ……。どうして私はもつと早く目が覚めなかったのだろ……。せめて昼にでも一回起きて薬を飲んでれば……」

「まあだからしかたないだろ」

「う〜〜〜〜」

さっきからずっとこんな調子で嘆いている葵。気持ちはわかるがな。そしてその気持ちを紛らわせようとさっきから恐ろしく食べまくっている。病み上がりだったのに元気なこった。

「まあ元気だしなよ葵。海ならまた夏休みにでも皆と一緒にいこうよ」

可哀想に思っただのか、シャルが葵を元気づけている。

「そうですね、葵さん、夏休みは今日以上に皆と遊びましょう」とセシリアも同調。俺もそうだから皆と遊ぼうぜと励ました。そのかいもあって葵も次第に元気を取り戻し、

「ええ、そうですね！次回リベンジすることにする！」
と笑顔で夏休みになったら遊びにいくと決意した。

「ああ、ところで一夏」

「なんだよ」

なにやらニヤニヤした顔で俺に聞いてくる葵。どうやら本当に調子を取り戻してきたなこいつ。

「筥の水着姿はどうだったかな。凄かったでしょ？」

「そついやあれはお前の仕業だったな。ああ、凄かったよ。あやうく殺されかける位な」

「は？それは筥に悩殺されかけたってこと？」

「違う…まあまた今度話すよ」

「そつ」

と行ってまた食事を再開する葵。勝手に刺身を追加注文したりしてるけどいいのか？

「そついや筥が着てた水着、もしかしてお前あの時千冬姉と二人だけで行ってたけど、その時買ったのか？」

「ピンポン」

「しかし何で筥に？それにもしかして、今日お前が着る予定だった水着って」

と俺が最後まで言い終わる前に、葵は人差し指を唇に当て、笑顔で言った。

「それは秘密です」

臨海学校（初日自由時間）（後書き）

アニメの千冬姉水着シーン、あれは弟としてヤバいだろう。

そして一夏は巨乳好きなイメージがある。いや私の妄想ですが。

臨海学校（初日夜）

風邪が全快した葵と夕食を食べた後、俺は千冬姉の命令で葵を俺と千冬姉の部屋まで連れて行った。千冬姉がら大事な話があると葵に伝えたら急に顔つきが変わり、「わかった」と堅い声をして俺と一緒についてきた。何か心当たりがあるのか？と聞いたら「ええ、私は代表候補生だから…」と意味深な台詞を神妙な顔と声で言うものだから、どれだけ重要な用があるのかと思っただが：

スパンスパンスパン

「~~~~~!」

部屋に入り千冬姉に合った葵は、問答無用で連続して出席簿で頭をどつかれていた。痛みで部屋をゴロゴロする葵を千冬姉は冷めた目で見ている。…ああ、そっぴや今朝風邪が治ったら葵に出席簿が待ってるとか言ってたっけ。

「……お、織斑先生。何故病み上がりの私にこのようなひどい仕打ちを。てかこれはもう立派な体罰でPTAとかが見たらヤバいのは？」

頭をおさえかなり涙目で抗議する葵。ああ、こいつ熱のせいで覚えてないな。

「青崎、お前今朝私の前であれだけ注意してきたのに男口調で話をしただろ。これはその罰だ。ちなみにお前を罰するために叩くのは政府公認だ。お前が日本の代表候補生でいるうちは口調に気を付ける」

千冬姉の言葉を聞き、葵はがっくりとその場に崩れ落ち、「別に

熱でうなされてる時位い〜じゃない」といじけ出した。

「ところで織斑先生、葵に大事な用があるって言ってたけどまさかこれの事ですか？」

「ああ」

え、本当にこれだけ？

「ええ！！これだけのために私呼ばれたんですか！」

あ、葵が一番驚いてる。まあここに来る前あれだけシリアスな空気だしてたからな。蓋を開けたらただの愛の鞭だったし。再度いじけだした葵を無視し、千冬姉は急に布団を敷き、その上にうつ伏せになった。

「さてと私はもう明日の朝まで仕事は無い。見周りも今日は山田先生が担当だしな。だからそうだな、一時的に教師の肩書を降ろそう。今からは公私の私だ。だから一夏、久しぶりにマッサージしてくれ」
：千冬姉、何か言い訳くさいな。でもいいか。つまりそれほどマッサージして欲しいって事だし。

「わかったよ千冬姉、じゃあ始めるぞ」

「ああ頼む」

さてと、始めますか。おお、凝ってるなあ千冬姉。これは本気でやらないとなあ。

マッサージを始めて結構経ち、千冬姉の体も大分ほぐれてきて、ふいに葵の方を向いてみた。さすがにもういじけてはいなかったが、何故か扉の方をじっと見ている。そしてニヤツと笑うと

「一夏、織斑先生をやり終わったら、次は私をお願い」

と妙に大きな声で俺に言った後、布団を敷いてうつ伏せになった。何だ急に。まあ別にかまわんけど。

「一夏、私は充分満足した。だから次は葵の相手をしてやれ」
なんだ千冬姉もニヤニヤして。じゃあ次は葵の番だな。

「そついや一夏にやってもらうのって初めてかな。いつも千冬さんにやってるってのは聞いてたけど」

「そつだな、今日が初めてだな。葵、千冬姉で鍛えられた俺の腕前で気持ちよくしてやるよ」

俺がそう言うとは何か口に手を当て笑いを必死で耐える葵。何でだ？千冬姉の方を向くと葵と似たような状況になってる。だから何で？

「じゃあ一夏、……初めてだから優しくしてね」

…いや葵、何でそんなに艶っぽい声出してるんだよ。

「わかった、なるべく痛くないようにする」

…何故かさらに笑いを必死になって堪えようとする葵と千冬姉。ああ、もういいや、さっさと始めよう。

うーん、葵も結構凝ってるな。やっぱ毎日体をあれだけ動かしてるからなあ。ここは温泉宿だから後でゆっくり入った方がいいかもな。

と、意識を逸らさなければならぬほど、…葵の体の感触はヤバい！何この柔らかかさ！千冬姉とはまた違うこの感触。はっきり言って気持ち良い。いかん、俺の方がハマりそうだな。

「あ、そ、そこ！う、うん！」

顔を赤くして気持ちよさそうに悶える葵。…いや何この声？いく

らなんでもぞ。

「はあ〜〜」

恍惚した表情で俺のマッサージを堪能しているなあ。…しかし葵、わざとそんな顔してるだろ。うう、千冬姉がなんかニヤニヤしながら俺を見てるし。

「あ、あ〜気持ち良い。今日初めてやってもらったけどこんなに気持ち良いならもっと早く言えばよかった」

「そ、そうか。ならまたやって欲しければ言えよ。やってやるから」

「そう、じゃあ毎晩やってもらおっかな」

「いや毎晩は勘弁してくれ」

「甲斐性ないなあ」

いやこれは甲斐性とかの問題では無いだろ。と思ったら急に葵は起き上った。

「おいま」

だ終わってないぞと言いつつ終わる前に千冬姉が俺の口を塞いだ。そして喋るなというジェスチャーをした後、足音を殺して扉に向かう千冬姉と葵。そして千冬姉は強く扉を叩くと「叩叩叩叩へぶ!」「シリア、シャル、ラウラが顔を真っ赤にして床にうずくまっていた。」

「はあ〜い、皆さん!楽しい妄想はできたあ?」

葵がそう言つと、全員涙目で

「「「「~~~~~!!!!!!」」」」
と声にならない叫びをした。

「紛らわしいのよ全く!」

「まあ常識的に考えたらここでそんなことするのはあり得えないけどさ…」

何故か部屋を盗み聞きしてた五人に、俺が千冬姉と葵にマッサージをしていたと伝えたら、皆千冬姉と葵に怨みが籠った目で見つめている。皆そんなにマッサージが羨ましいのか？

その後はマッサージをしたため汗をかいた俺は温泉に入りに行った。葵も一緒に行こうとしたが、千冬姉に止められ部屋に残された。

あゝもう、なんなのよこの状況!さっきは千冬さんと葵が共謀してあたし達に変な想像させて身を悶えさせたと思ったら、今は一夏は温泉に行って目の前に千冬さんがあたし達の前に座って見てるし……しっかしさっきのはあたし達の勘違いで本当によかったわ。正直聞き耳立てたあたし達の絶望感は半端じゃなかったもの。いやだって、千冬さんがいるのに止めもせず葵にやってやれとか言う

から。つまりそれって千冬さん公認の仲ってことじゃ…と思っちゃうじゃない。葵だけなら全員ISに乗って部屋破壊しただろっけど。

「お前達に少し聞きたい事がある」

一夏が部屋を出た後だんまりなあたし達を一瞥した後、千冬さんはあたし達に向かって言った。

「今一夏がいないから聞きたいが、…お前達はあいつのどこがいいんだ？」

あ、やっぱり姉として気になるんだそうなの。その後、箒、あたし、セシリア、シャルロット、ラウラと千冬さんはあたし達に理由を聞き、あたし達も答えて言った。千冬さんはそれを聞いて頷いたり茶化したりしたりして、

「では葵、お前の理由を聞きたい」

最後に葵に質問した。え、でも葵は違うんじゃないの？

「私ですか？そうですねえ……色々ありますがやっぱり一緒に居て楽しいことですね」

「そうか、一緒にいると楽しいか」

とニヤリとする千冬さん。え、ちょっと待って！

「葵、お前一夏の事が好きだったのか!？」

あ、箒に先越された。

「そりゃ好きだけど。友達として。…いや誤解させるような事してそれは謝るけど、一夏に対する好きは英語で言うlike。決してloveじゃないから」

何を当たり前な事をという顔して言う葵。…なんだやっぱりそう

か。箒も他の皆も葵の言葉を聞いて納得してるわね。千冬さんは…あれなんか顔険しくない？

その後は千冬さんから一夏はやらんと宣言され、一夏が欲しければ奪い取れとか焚きつけられて解散した。

それにしても……やるか馬鹿とは。一夏もシスコンだけど、千冬さんも充分ブラコンよね…。

風呂からあがって部屋に戻ると、葵達の姿は無く千冬姉だけだった。

「あれ千冬姉、葵達は？」

「もう夜も遅いだろ。明日は早いからもう帰らせた」

ふ〜んと相槌打って俺は急須にお湯を入れ、自分の分と千冬姉の分を作った。

「はい、千冬姉」

「うむ、悪いな」

ふ〜、風呂上がりには飲む熱いお茶つてもまた美味しい。

「なあ一夏」

と言って俺の前に座る千冬姉。その顔は真剣な表情をしている。

「ちょうどいい機会だからお前に訊きたい。一夏、お前は将来の事は考えてるか？」

「将来の事？」

「ああ、今お前は世界で唯一の男のIS乗りとしてここにいる。なら将来は私同様ISに関わって生きていくのか？それともISとは関係ない別の道を歩むのか？…もっともお前にその道を選ぶのは難しいがな。なにしろ世界で唯一のIS乗りの男なのだから」

「そうだなあ、考えた事無かったなあ。でも確かに千冬姉の言うとおり、俺は多分ISに関わる仕事を目指すと思うよ。ていうかそれ以外選択肢ないと思うし」

「そうか。ならもしお前が競技者としての道を歩むとした場合だが…止めておけ。現状では私は勧めない」

「え、なんで？」

「葵がいるからだ」

そういつて千冬姉はお茶を飲みほし、真剣な顔で俺に言った。

「一夏、一つ聞くがお前は葵が来てから何度かISで勝負したな。勝率を言ってみろ」

「…全戦全敗。でもそれがなんの関係が」

「おおありだ馬鹿者。あいつは日本の代表候補生だぞ。そしてこのまま順当に行けば代表は確実だ。私が保証する。そうなるとお前はどうかなる？代表かけて戦ってもお前は負けるだけ。ちなみにお前の

コアは日本政府が保管している分だと言う事を忘れるな。他国に行こうもんなら問答無用で百式は没収される。で、お前は百式以外の機体に乗って鈴等の他国の候補生に勝てると思うのか？無理だろうが」

。「う、そ、それはそうだけど…。」

「はっきり言おう。競技者の道を歩むなら、葵はお前にとって最大の障害として立ちはだかる。同じ近接格闘特化型だが、実力に差がありすぎだ。しかしお前は葵がもつとも得意とする土俵で戦い勝たなければその道は開かれない」

千冬姉の言葉を聞き、うつむく俺。今まで考えた事は無かったが、こうしてはっきり言われると…

「強くなれ」

「え？」

「だから強くなれ。今はお前と葵との差は恐ろしく離れてるが、死ぬほど努力しろ。目指すなら血反吐吐いてでも強くなれ」

「でも千冬姉さつき勧めないって…」

「現状ならな。しかし、お前が本気で目指し実力をつけるなら止めはしない」

そう言っって微笑する千冬姉。

「ま、決めるのはお前だ。よく考えて結論をだせ。そしてさつき言った道を目指すなら…私も協力してやる。なに、全くの不可能って

わけじゃない。お前だつて昔は葵より剣道強かつただろ」

…いやそれはもう6年も前の話じゃないか。

その後は、千冬姉の朝が早い事もあつて寝る事にした。布団に横になりながら、俺は千冬姉に言われた将来の事について考えた。確かに今後葵に負けっぱなしというのは幼馴染抜きにしても悔しいが…別に今の俺は代表になってモンド・グロツソに出たいという気持ちはあまりない。むしろそれに出場しようとする葵を応援してやりたい位だ。おそらくこれは千冬姉の警告なんだろう。

もし、私を目指すなら今のままでは無理だ、もしそれを目指すなら死ぬほどの覚悟がいる、と。

俺は…何を目指すべきなんだろうか。

「ねえねえアオアオ、何で空手習つてたの？」

「私の父が世界大会優勝する程の格闘技の達人だったのよ。知ってるかな？青崎誠つて名前だけど」

「あゝ知ってる！確か20年前世界格闘技大会で優勝した初の日本人でしょ！それ以外でも数々の大会で優勝した！」

「そ。で、その父からコミュニケーション代わりに空手を幼い頃から仕込まれたっ訳。…まあ理由もあってね」

「理由？なにそれ？」

「まあ隠してもいざればれるかもしれないから…まあ言っちゃおうかな。私の母ね、五歳の時病気で死んじゃったのよ。ってちよおつと皆暗い顔しないで！大丈夫！もう大丈夫だからさ！ 悲しみは乗り越えてるから！で、話の続きだけでもまあ格闘技一筋な父はどうやって息子と交流をかわせばいいのかわからなかったのよ」

「それで息子に空手を教えたっていうわけ？…なんていうか」

「でも私も元々体を動かすのは好きだったからね。それに空手に打ち込むことで母の悲しみも紛らわす事もできたし。父もその時が一番良い顔してたからその顔を見ると安心するし。ああそれから空手だけじゃないわよ。父は色々な格闘技覚えてたから空手以外にも古武術や中国拳法の技も一部教えて貰ったわね。…ただ毎日朝五時に起きて朝練されたけど、今は平気だけど昔はかなりしんどかったなあ…」

「そっぴや剣道もやってたよね、篠ノ乃さん家の道場で。何で空手やってたのに剣道も始めたの？」

「んゝそれは一夏が千冬さんの影響で剣道習い始めたから。その間一緒に遊べないから私も参加することにしたのよ。まあ門下生が千冬さんと一夏と篤しかいなかったから歓迎されたっけ」

「余計な事は言わなくていい」

「痛！」

「へーそうなんだ。じゃあじゃあ今はしののんが剣道一番強いけど、当時はどんなだった？」

「し、しののん！？いや当時は…最初は私が一番だったが、小学四年生になる頃は一夏が一番強く、その次に葵、…最後に私だ」

「えー、意外！織斑君強かったんだ！」

「昔はな。しかし今は…、全く情けない！」

「まあ落ち着きなさい箒。一夏にも事情があつたんだし」

「それはわかるが…」

「まあ鈴と遊び倒してたつても大きいかもね」

「やっぱり殺す！」

「まあまあ落ち着いて篠ノ乃さん。そういや青崎さんと篠ノ乃さん、よく屋上で他の専用機持ちの子達と一緒に弁当持って食べてるけど、料理上手いよね」

「まあね。さつきも言ったけど母が幼い頃に死んじゃったから。父は…家事がお世辞にも上手いとは言えなかったから私が必死になって覚えたし。一夏の家も似たようなもんだからお互い家事について一緒になって覚えていったわよ」

「へーそうなんだ。じゃあしののんも、その時一緒になって覚え

「ただ」

「え、あ、そ、そうだ!」

「...まあそういうことにしてあげる」

「黙れ葵」

「ふうん、じゃあさ...」

千冬さんから早く寝ろと言われ葵と一緒に部屋に戻ったが、布仏さん達からもう延々と質問をされ続けている私と葵。

...頼む、もう勘弁してくれ。明日起きられるだろうか？

臨海学校（初日夜）（後書き）

八巻出ないからわからないけど、順当に行けば簪が日本代表になるんだろか？

しかしなんだかんだで一夏も男で唯一のIS乗りつてことで国籍関係無く特別枠でモンド・グロッセ出場しそうな気がする。男達の最後の希望として

番外編 久しぶりのカルテット（前書き）

いきなりですがこれは第四話よろしくと第五話日常の間にあった話です。

番外編 久しぶりのカルテット

それは葵が登校して数日経った時の出来事だった。

「ねえ一夏、明後日用事ある？」

食堂で夕食をいつものメンバーで食べていたら、葵はそう俺に話しかけた。

「明後日？別に無いが？」

「よかった。次に鈴、明後日用事ある？」

「あたし？いや無いけど。どうしたのよ急に？」

「いや用事ないなら明後日私と出掛けないと思って」

俺と鈴を交互に見て言う葵。いや別に構わないけど、どうして俺と鈴だけなんだ？

「何故一夏と鈴だけ誘う葵？」

誘われなかったのが気に入らないのか、不満げな顔をして言う葵。そして名前を呼ばれなかったセシリア達も箒同様面白くないって顔をしている。

「ごめん。中学の時の友達に会いに行こうと思ってるから」

中学の時の友達？ああ、もしかして

「葵、もしかして弾に会いに行こうってわけか？」

「当たり前。あいつにはまだ私がどうなったかとか説明してないし。」

話しておこうと思って。…一応聞くけど、一夏も鈴も弾にもう私の事メールや電話で話したりした？」

「いんや。やっぱこういうのは直接本人から話すべきと思ったからな」

「あたしも。というか私そういや日本に来てから弾に会いに行っていないわね。ちょうどいい機会かも」

その言葉に俺も葵も呆れた。いやお前、日本にいた時はあんだけ一緒に遊んだだろうが。顔ぐらい見せに行けよ。まあ俺も弾に会いに行く時誘わなかったのも悪いけどさ。

「…いや鈴。あんたそれはちょっと薄情じゃないの？まあいいや。久しぶりに四人揃って遊びに行きますか」

「そうだな。しかし今の葵見たら弾吃驚するだろうな」

「最悪信じないかもしれないわね」

「…だから二人も一緒に来てほしいのよ。まあ顔はそこまで変わって無いとは思うけどやっぱり体つきは激変してるしね」

…確かにな。二年前よりも少し身長伸び髪も伸び、体つきも完全に女になってるしな。

その後行く事が決定した俺達は昔話に花を咲かせた。そんな俺達を篤達は羨ましそうに眺めていた。

それから二日後、俺達は弾に会いに五反田家に向かっている。一応弾に行く事は伝えてるため、家で待っているだろう。ちなみに弾には俺と鈴が行く事しか伝えていない。葵から黙っているよう頼ま

れたからだ。理由は

「いや吃驚させようと思って」

…らしい。まあいいけどさ。

「ところで葵、あんた何でIS学園の制服着てるの？」

鈴が葵の服装を見て呆れている。俺も鈴も私服姿だが、葵だけ何故か制服を着ている。

「いや女の子らしい服がこれしかないから。この格好の方が現状を説明するのにむいてるかなと思って」

「制服が一番女らしい格好って…。まあ確かに女子を象徴する服装だけど、葵あんたも女として生きてくつて決めてるんでしょ。ならそれらしい私服もちゃんと用意しなさいよ。なんならあたしが選んであげるわよ？」

「まあ確かにそう決めたのは私だしね。じゃあ今度お願いしようかな」

「まかせなさい。似合うの選んであげる」

葵と鈴が楽しそうに会話してるのを見ながら、なんか不思議な感じがする俺。最近じゃ千冬姉に矯正されてか、部屋で俺と二人の時位しか昔の口調で話さないもんなあ。いや鈴達も千冬姉に賛同し、葵が昔の口調で喋ったら注意するようにしてるせいもあるけど。にしてもこの二人、二年前よりも仲が良くなってるな。やはり同性になっただからか？

そんなやり取りをしながら、俺達はその後五反田家に到着した。

店に入ると中には蔵さんと弾と蘭とお客さんが数人いた。蔵さんは中華鍋を振るい何か作っている。蘭は客に料理を運んでおり、弾は厨房で皿洗いしている。俺の姿を見た蘭は眼を見開き

「一、一夏さん！え、どうしたんですか急に！」

と酷く驚きながら俺に話しかけてきた。…いやその前に料理を客に運べよ。

「おお一夏、早かったな。そして鈴！久しぶりだな！元気そうだなによりだ。で、ところで…お前達と一緒にいる」

厨房から弾が出て来た。そして俺と鈴の後ろにいる葵が誰か聞こうとする前に

「会いたかったわ！弾！」

と葵がいきなり弾に抱きついた。は？

「え、い、いや…ええ！」

急に葵に抱きつかれ、顔を真つ赤にしてうろたえる弾。…まあ弾からすればいきなり見知らぬ美少女から抱きつかれてるからな。

「え、えくと、誰君？」

顔を真つ赤にしながら葵に尋ねる弾。その瞬間葵は泣きそつな顔をしながら弾から一歩離れた。

「そ、そんな酷い！昔あんなに一緒だったのに！私の事忘れたの！」
と言って両手で顔を覆い泣く真似をする葵。多分顔をよく見られたら気付かれるかもと思って隠してるんだなあきつと。

「え、昔一緒だった？え〜っと」

「一緒にお風呂にも入った仲なのに忘れるなんて…」

その台詞を言った瞬間、空気が確かに軋んだ。…まあ確かに一緒に銭湯に行つたから嘘は言っていないが。

「え、えええ！風呂！一緒に！」

さらにうるたえる弾。葵はさらに何か言おうとしたが

「この糞ガキがー！お前、一体この子に何をしたー！」

「グハアツ！」

敵さんに思いつきり弾は殴られた。蘭も追い打ちで「この女の敵！」と叫びながら弾を蹴っている。

「…いや葵、さすがにもうばらしなさいよ」

鈴が葵に呆れた声で言っている。さすがに弾が不憫に思えて来たんだろう。

「そうね。さすがにやりすぎちゃったかな。あのーすみません！実は私は…」

その後葵は弾達に正体をバラした。弾は葵の名前を聞き、事情があつて女になつたと話したら「ハア！？」と叫んだが、葵の顔をよく見て「…マジか？」と俺達に訊いてきた。俺と鈴が頷くと「嘘だ

る…」と茫然となったが、葵が中学ん時の、しかも俺と弾しか知らない事を幾つか話したら

「…なんてこった。こいつ本当に葵だ」

とようやく信じた。ちなみに巖さんと蘭はなかなか信じなかった。だが俺と鈴、そして納得した弾が保障することでようやく信じて貰えた。巖さんは

「長生きしてみるもんだな…」

と呟き、蘭は

「…狡い」

と葵の胸を凝視しながら呟いた。ちなみに鈴もうんうんと頷いていた。

その後俺達は積もる話を弾の部屋ですることにした。

「しっかし二年前急に消えたと思ったら、女になって現れるとはなあ。さすがに予想外すぎる。そしてさっきはよくも俺を騙しやがったな」

ジト目をして葵を睨む弾。まあそのせいで巖さんに殴られるし蘭に蹴られるはされたもんな。

「わりーわりー。いやあお前の反応は面白かった」

と笑う葵。真っ赤になってうるたえてたもんな弾。

「うっせー！っか二年前はよくも黙ってどっか行きやがったな。心配したんだぞ俺は」

「…ああ、それについては本当にごめん。謝るよ」

「いや別にもういいよ。お前が元気だったってことはわかったから」

「すまん」

さすがにしおらしくなる葵。そんな葵を弾はしばし見て唸った。

「…お前本当に女の子になったな。しかも極上の。いや中学いた時から女が男の制服着てると勘違いしてた奴が多かったが、それでも男と認識されてたが」

と言つて葵の胸を凝視する弾。恥ずかしくなったのか葵は腕で胸を隠した。

「スケベ。敵さんにセクハラされたと言つぞ」

「いやそれは勘弁してくれ！…ていうか葵、余計なお世話かもしれないが話し方替えた方がいいぞ。今の姿で昔みたいに話したら違和感ありすぎる」

「あ、弾もやっぱそう思う。あたしもそう思うのよね。いやさつきまでは弾に信じて貰うため昔の振る舞いさせてたけど、もうそれもいいわよね。葵、昔の口調はもう禁止！わかった！」

いいわねと葵に念を押す鈴。それを聞いてえくって顔をやる葵だが、鈴に睨まれ渋々納得する。

「はいはいわかったわよ。鈴は敵しいなあ」

「これもあんたのためでしょ」

やいやい言う二人を眺める俺と弾。なんか鈴が葵の姉さんみたい

に見えるな。

「なあ一夏、なんか鈴と葵、昔よりも仲が良くなってる気がするな。いや前から良かったけどさらにな」

「やっぱお前もそう思うか。やっぱ同性になったのが大きいんだろな」

「じゃあお前とは疎遠になったのか？」

「いやそれはないと俺は思うぞ。昔同様お互い馬鹿やったりするし。同室だけど気まずく感じる事は無いしな」

「はあ！お前葵と一緒に部屋なのか？
かなり吃驚した顔で俺を凝視する弾。」

「ああそうだが、何を驚いてるんだお前は？」

「いやだって今は葵は女だろ！なのに同室って。ってそーいやその前に一夏の幼馴染とも一カ月位一緒に生活してたとか言ってたな。」

…何考えてるんだIS学園は？」

実は筈の後にまた別の女の子と同室になったんだが、ややこしくなるだけだから言うのは止めておこう。

「ま、葵が女になったからといって、お前がそれを理由で疎遠になるわけないか。中学の時初めてお前たち二人に会ったが、一目見て『ああ、この二人仲が良いな』と思ったしな。」

それだけあいつが急にいなくなった時のお前の反応は…正直痛々しかった。だからまたお前ら二人が出会えて良かったと俺は心底思うぜ」

「ああ、俺もだ」

…あの時は本当に絶望した。あの頃は千冬姉も家にいなかったから余計寂しかった。一週間は飯もろくに喉を通さない日々が続いた。鈴と弾が俺を励ましてくれなかったら俺は本当に潰れてたかもしれない。

「鈴も帰ってきてよかったよ。お前結構強がつてたけど、鈴が中国に帰った後しばらくは俺の家に入り浸りだったもんな。鈴はきちんとして別れを告げたからそこまで大きなダメージ無かったようだが、それでもかなり堪えてたなお前」

「…そりゃな。箒を始めこうも親しくなった奴が俺の前から消えていったら落ち込まない方が変だろ。まあ鈴はまだ箒や葵と違い、別れをきちんと言えたのはせめてもの救いだったぜ」

いや一時期は本気で俺と仲良くなる奴は俺の前から消えるんだと思ひ詰めたりしたな。…家族の千冬姉だってあんまり家に顔出さないせいで。しかし、

「弾、さっきから俺が寂しい寂しい言ってたがお前だってそうだったじゃねーか。葵ん時も顔真つ赤にして怒ってたし鈴がいなくなったら後は妙に中華料理食べるの多くなつたなあそついや」

ニヤニヤしながら俺が言つと、

「いやそれはそうだがお前よりはマシ」

しれつと言いやがった。…うん否定できないかなこりゃ。二人の付き合いの長さに考えて。

と、俺と弾が話をしていたら

「へ〜そんなに寂しかったんだ。…ごめんね一夏悲しい思いさせて」

「あたしの存在の重さがよくわかったようね。これからは大事にしないさい」

いつの間にか俺達の会話を聞いていた葵と鈴が、俺の頭に手を置いて「よしよし」と言いながら撫でまわしてきた。ってやめるころ。ガキか俺は！

「バカやってないでそろそろ始めようぜ」

と言って弾は俺達にそう言った後押入れを開け何かを探し始めた。

「ん、まさか弾」

葵が言い終わる前に弾は押入れから物を取り出し、俺達の前にそれをどんと置いた。

「このメンツが揃ってるんだ。ならやる事は一つだろ」

と言って俺達の前に置いた麻雀卓を見て笑った。

「ふうん、IS戦じゃお前らの中じゃ一番葵が強いのか」

「今はね。あたしがそのうち一番強くなるわよ」

「ふうん、まあ頑張れよ。……っと、取りあえずピンフ親だから千五百点」

タン タン

「って一夏に鈴。さつきから話聞いてれば葵って専用機持ってないんだろ。なのに負けるって…」

「うつさいわね！でも一夏は全敗だけど、あたしは葵に勝ったことはあるわよ」

「いや鈴、それは打鉄の整備が甘かったのか私が酷使しすぎたのかはわからないけど、鈴を殴りとはしたら殴った右手が砕けたせいでしょう。そのせいでシールドエネルギーは減るし片手だけになったから最終的に鈴にやられたけど、結構僅差まで追いつめたけど」

「うつさいわね！勝ちに勝ちよ！」

「…まあお前がそう思うんならそれでいいけどな」

「全敗のお前もそういう要因がなければ勝てないだろーがな。……つと、リーチな」

「ま、私もラウラには勝てないんだけどね」

「へーお前にも勝てない奴がいるんだな。ロン。メンタンピン一発三色イーペーコードライチ！二万四千点な」

タン タン

「そついやお前らはIS学園では麻雀やんねえの？」

「IS学園じゃやらないわね。他に出来る子知らないし三人打ちじゃつまらないし」

「麻雀やる暇があればISの訓練やれと千冬さんに言われそうだし」

「てーか俺達だけで遊んでたら筈達が不機嫌になりそうだしなあ」

「ふーん、色々事情あるんだな。ま、だから弱くなってるのか。チ
ートイドラドラ六千四百点」

「ってまたお前かよ！」

タン タン

「ま、俺は爺さん達とたまに打ったりしてゐるからなあ。お前達に勝
つても不思議じゃねーよ」

「うっせー！今に見てるよ」

「ま、あたしもようやく勘が取り戻してきたからね。そろそろ反撃
しようかなあ」

「しかしこうやって四人で卓を囲んでると懐かしいわね」

「…そうだな。中一の頃こうやって一夏の家で夢中になって遊んで
たら気が付いたら朝だったってことがあったよな」

「…あの時は大変だったわ。連絡もせず朝帰りしたからあたしの両
親が相当心配してたわね。しばらくは夕方五時になったら帰りなさ
いと言われたし」

「俺の家の電話がちょうどその時壊れてたからな。当時皆携帯持っ

てなかったし鈴と弾と葵の親達マジで心配してたな」

「私も心配した親から思いっきり殴られたっけ。あれは痛かったなあ。でもあれがきっかけで全員携帯を親からもたされるようになったのよね」

「俺も爺さんから殴られるししばらく店の手伝いを強制されたなあ。つたくー夏め！自分の家だからおとがめなしとかずるいよなあ」

「全くそうよね。ってところでツモ！メンチンタンインリャンペーコー。三倍満二万四千」

「げえ何時の間に！葵このやるっ…」

タン タン

「そういえば何で葵だけ専用機ないんだ？」

「話があったけどコアの数の都合上と一夏の専用機の方が優先されたからねえ」

「だから葵、それで俺を責めるなよ…って来た！リー即ツモオモテ3ウラ3オヤバイ！おら二万四千よこせ」

「ちっ、一夏も調子づいてきたか」

タン タン

「でもさあ、前葵の話聞いてたらあんたが訓練してた所に日本の代

表候補生いたのよね。あんたそいつより強かったらしいじゃん。その子の専用機取り上げてあんたにあげればいいのに」

「そう簡単な話じゃないでしょ。専用機ってワンオフアビリティ開発の意味も強いし。…色々複雑な理由あるのよ、ってリーチ」

「なんか聞く限りその専用機持つてる代表候補生ってIS学園にいないようだな。どこにいるんだ？とリーチな」

「う、葵も弾もリーチとはね…。でもそついやそつね。確か4組にいる子が日本の代表候補生とか言ってたけどその子の機体は完成してないとかいってたっけ」

「あ、鈴。更識さんは違うから。更識さんは別の施設で訓練してたから私も面識無いわね」

「じゃあどこ行ったんだそいつ？あ、リーチ」

「……さあ。私も知らないかな。鈴！さあトリプルリーチになっただけどどうする？」

「…なんか話逸らさせたいみたいね。まあ深くは追求しないであげるわ。ふ、ふ、ふ。あんた達みんな甘いのよ！これでもくらいなさい！」

タン

「「「「」、国土無双！……！」「」」

その後麻雀をやり続けていたら日もかなり暮れ、「いつまでやってやがるガキども！」という敵さんの一喝の下お開きとなった。ちなみに最終的に鈴がトップで次に弾、三位が俺でドベは葵。まあ元々麻雀の強さは昔から鈴が一番強く、俺と弾と葵はほぼ同じ位だったから妥当な順番だろう。これがTVゲームだと俺と弾がツートップで、次に葵、鈴は万年最下位となる。…だからあんまりTVゲームはしないようにしている。負け続けると鈴が暴れるからなあ…。

一階に降りたら敵さんが俺達の夕食を作ってくれていた。トンカツコロツケ野菜炒め肉じゃがハンバーグ唐揚げとかなりの豪華な夕食がそこにあっただ。

「ま、お前達の再会記念だ。たらふく食べ。うちの孫もお前達とまた会えて喜んでるからな」

「「「ありがとうございます！」「」」

「あ、金はもらっからな」

「「「え？」「」」

「嘘だ。ま、しっかり食べ」

夕食は蘭も一緒になってたらふく頂いた。このときばかりは敵さんも食事中の会話は見逃してくれたので、和気あいあいと皆で夕食を楽しんだ。ちなみにテーブルに座る時、俺の隣をじーつと鈴と蘭が睨んでたが溜息ついた葵がさっさと俺の横に座ったら二人とも何故か葵を睨んでたな。なんでだろう？弾はそんな二人を見て笑い二人から殴られたりした。

夕食を食べたらもう外は暗く、IS学園に戻る時間となった。

「さてと、俺達ももう帰るか。これ以上は千冬姉に怒られる」

「そうね、名残惜しいけど」

「あ、ちょっと待って！」

俺と鈴が帰る準備をし始めたら、葵はポケットからデジカメを取り出した。

「帰る前に、皆で写真撮らない？この四人で撮った写真ってもう二年前の春のやつしかないし」

と言つてにっと笑う葵。

「へ〜いいな。そういや葵がいなくなってからそんなに写真撮ってないよな俺等。鈴もいなくなってからは一枚も無いし。ま、一夏と男二人でツーショットなんてキモいだけだしな」

「そりやお互い様だろうが」

「いいわね。葵、あたしにも写真頂戴ね」

「もちろん、全員あげるに決まってるじゃん！」

「あ、それなら私が撮ってあげますよ」

「ありがとう。じゃあお願いね蘭」

蘭にカメラを渡し、横に並ぶ俺達。右から鈴、俺、葵、弾の順番で並んでいる。鈴は俺の左手に腕を絡め、俺と弾と葵は互いに肩を

組む構図にしている。

「じゃあ撮りますよ！はいチーズ！」

カシャっという音がして無事撮影終了。撮り終わっても俺に腕を組んでいる鈴に蘭が睨んでいる。

「じゃあ次はわしが撮ってやるから蘭、お前も入れ」

蘭を交えもう一枚撮る事にした。並びは俺の両隣りに蘭と鈴。二人とも俺の腕を組んでいる。それを見て葵は弾の右手を左手で絡めている。「お、おい葵。胸当たってる！」「当ててるのよ」と言いながら顔を赤くしてる弾と笑ってる葵。ああ、完全に遊ばれてるな。

「：なんか色々思う所がある光景になつとるな。まあいい。一夏！弾達見てないで前向け！」

蔵さんに一喝され前を向いた瞬間、カシャと写真が撮られた。

二枚の写真の画像を眺めながら

「なんかこれ二枚目だけ見たら私と弾が付き合ってるみたいに見えるわね」

「ん？なんだ、じゃあ俺と付き合うか？二年前ならともかく、今のお前なら大歓迎だぜ」

「いや、私は戦って自分より弱い男は嫌かなあ」

「そっか、なら残念」

ちっとも残念そうに見えないで言う弾。まあ本気じゃないだろうしな。しかし、お前より強い男って条件厳しすぎだろ。お前に勝てる奴って同年代じゃ物凄く限られるぞ。

「じゃあ弾、次来た時にこの写真持つてくるから」

「おお、楽しみにしてるぜ」

「あ、いやこれデジカメだからメールで送ればいいか。携帯にでも送っとくわね」

「いや、次来た時直接持つてきてくれ！…いや俺の家写真を加工する機械ないからさ。ちゃんとプリントアウトしてくれたら助かる！」
妙に直接持つてきてくれとこだわる弾。別にお前機械音痴じゃないだろうに。そんな弾を見ていた鈴が

「大丈夫よ。またあたし達はあんたと遊びに来るわよ」

と妙に優しい声で言った。その言葉を聞いて赤くなる弾。…ああ、なるほどな。葵を見たら葵も納得したようで、

「大丈夫よ。また私も弾の家に遊びに来るから。そんな小さいまた来る理由を作らなくともね」

葵の言葉にさらに赤くする弾。……そっか。俺達は今はIS学園で三人一緒に過ごしてるけど、弾は違うもんなあ。…こいつが一番別れが寂しいんだらなあ…。

「ま、じゃあこの写真は私が弾の言う通りにするとしますか。弾、今日は麻雀しかしなかったけど今度は外に遊びに行きたいわね」

「あたしはカラオケ行きたい！」

「お前マイク独占するからなあ…」

「下手糞な一夏が歌うよりかはマシでしょ！」

と、俺達はまた集まる時は何しようかと一通り話した後、五反田家を後にした。

その後、俺の家の机に飾っている写真立てが一つ増えた。それらの写真は、共通して四人とも最高の笑顔をして写っている。

番外編 久しぶりのカルテット（後書き）

すみません急に番外編始めました。

情けない理由ですが単純に今後の展開に悩んだからです。後の福音戦のために専用機をご登場させようと思ってましたが、なんとなく無い展開でもいいかなと思ったり。これを書いたのはまあ悩んでたせいですね。まだ悩んでるんですけど。

まあ次回も頑張って更新できるようにします。

臨海学校（二日目 専用機前編）

「よし、呼ばれたメンバーは全員集合してるな」

臨海学校二日目、俺とまあいつものメンバーの葵、箒、鈴、セシリア、シャル、ラウラは一般生徒達とは隔離された海辺に集合している。この場に先生も千冬姉だけしかない。

この日は生徒全員でIS装備の各種試験運用データ取りが行われる。無論専用機持ちにはその名の通り国から専用の装備や秘密性の高い装備が送られてくる。そのため一般生徒とは隔離して性能チェックするのはわかるんだけど……なんで俺と箒はここにいるんだろ？葵は代表候補だからなにかしら特別な装備の試験を任されるんだろうけど。しかしそれにしては…

「織斑先生、何故わたくし達だけこのような場所に呼ばれてますの？本日はIS装備の試験運用データ取りが目的のはずでは？それに本国から送られてきた装備もここにはありませんし」

セシリアが当然の疑問を千冬姉に言った。そう、この場には試験用のIS装備が見当たらない。なにやら黒い横長の小さなコンテナが一つあるが、そこにここにいる全員分あるとはとても思えないし。「予定変更だ。その前にお前達にやって欲しい事がある。それはこの場で専用機を持っていない」

と千冬姉が説明を始めた時、

「ちーちゃ~~~~ん！」

とどこからか声が聞こえてくる。声が聞こえた方に顔を向けると物凄い勢いで束さんが走りながらこちらに向かっている。そしてそのまま束さんは千冬姉に近づき、

「会いたかったよちーちゃん！」

と千冬姉に抱きつこうとした。が、千冬姉はそれを拒否。見事なアイアンクローで束さんの抱きつきを阻止した。…なんかヤバい位指が顔に食い込んでるんですけど。

「暑苦しくなるから止める束」

「ちええ〜。ちーちゃんのいけず〜」

と言つてするりとアイアンクローから逃げた束さん。…やっぱこの人もただ者じゃないなあ。そして束さんは箒の方を向いた。

「やあ！今度こそ会えたね箒ちゃん！てか昨日は酷いよ箒ちゃん！私から逃げるなんて！」

「え、いやまあその…、なんというかつい」

「つい！ついでに逃げてたの箒ちゃん！ってまあいいや。こうして直に会うのは久しぶりだね。いやあしばらく見ない内に成長したねうんうん。特におっぱいが」

「ふん！」

あ、箒が束さんを木刀で殴った。

「怒りますよ姉さん」

「殴ってから言った〜！しかも木刀で〜！酷いよ箒ちゃん〜！」

と涙流しながら抗議する束さん。う〜ん、相変わらず束さんにたいして態度が堅いなあ箒。いや遠慮無くどついてるからそれなりに心を許せる相手と思ってるのかな？

「おい束、こいつらに自己紹介しろ」

と言つて東さんと面識が無い鈴達を指差す千冬姉。まあ鈴達も東さんの名を知らないわけないからもうわかつてるけどね。皆驚愕の目で東さんを見つめている。

「え、めんどくさいなあ。別に知って欲しくないけどちやんの頼みなら仕方ないか。はい、私が天才の東さんだよ。終わり」とほとんど棒読みで言つて鈴達とはそっぽ向く東さん。…こっちはこっちで相変わらずだな。東さんの視線は今度は俺と葵をとらえた。

「やつほーいつくん！一日振りだね！そしてあーちゃん、久しぶり！うんうん昔から思つてたよあーちゃんが女の子だったら絶対美人になると！いや私の予想は正しかったね。おっぱいも大きいし」
葵の胸を凝視しながら言つ東さん。…東さんおっぱいネタ好きなんですか？

「東さんお、お久しぶりです。この姿になつて直接会つのは初めてでしたね。そして昨日は薬ありがとうございました。おかげでこの通り元気になりました」

さすがに算みたいに殴つたりしないが、微妙に照れているのか胸を隠す葵。

「いやいやお礼なんていらないよ」

「でも」

「いいからいいから」

「…なんか態度があからさまに算、一夏、葵と僕達とでは違うね」
東さんと葵を見ながら少し落ち込んだ声で言うシャル。セシリア

とラウラ、鈴も同感と言った感じで頷く。…千冬姉、箒、俺、葵以外の人間には冷たいと言うか興味無しだもんな東さん。

「…一つ忠告するけど、東さんに話しかけない方がいいぞ。俺達以外の人が話しかけても絶対友好的な態度取らないから」

「…わかったわ」

心得えましたという感じで鈴達は頷いた。

「…いい加減話を進めるぞ。東、例の物は」

と千冬姉が東さんに言うと、東さんはふっふっふと笑うと大空を指差して言った。

「ちーちゃん！それはばつちりだよ！さあさあご覧あれ！」

そう東さんが宣言した瞬間、

ドゴーン！

と上空からなにやら縦に細長いひし形の形をした金属の塊が俺達の目の前に落ちて来た。そしてその外装が捲れていき、中に一体の赤いISが入っていた。

「本邦初公開！これぞ箒ちゃんの専用機にして第四世代型IS、その名も紅椿！その能力は現行の全てのISを上回る東さんお手製の一品だよ！」

と言って大きな胸を張る東さん。その言葉を聞き、全員驚愕した。

「第四世代、だと…」

「各国でようやく第三世代の運用が始まってきたといえますのに…」

「それを飛び越えて第四世代……」

茫然とした感じで紅椿を眺めるラウラ、セシリア、鈴。シャルは実家を思い出してるのか……いやふれるのはよそう。

「じゃあさつそくフィッティングとパーソナライズ始めようか箒ちゃん！お姉ちゃんがやってあげるからあつという間に終わるよ！」

「ええ、お願いします姉さん」

と言つて、箒は紅椿に近づいて行つた。

今姉さんは私の為に紅椿の調整を行つてくれている。姉さんの調整速度は素人の私が見てもわかる位……早い。学園の整備士が束になつてかかつてお姉さんには敵わないだろう。いやそれだけでなく、科学という分野において姉さんに勝てる人等存在しないだろう。そんな姉さんを昔私は……

「うんうん箒ちゃん剣道の腕上がったね！筋肉のバランスを見てたらわかるよ……。いや〜お姉ちゃん嬉しいな〜」

「……………」

姉さんが話しかけて来たが、……つい無視してしまった。しかし姉

さんは気を悪くすること無く笑顔で調整を続けている。いや私だつてよくない態度だつてわかっている。姉さんは私の為にこの機体を用意してくれた事を。妹からの初めての電話がこの機体が欲しいからかけたつていうのに、姉さんは物凄く喜んで、この機体を私の為に作つていてくれていた。姉さんが肉親だからよくしてくれるというわけでは無い事も知っている。両親と姉さんの関係を見てたらそれはわかる。ただ姉さんは、…私だからこの機体を用意してくれた。それは私にだつて充分わかっている。でも、それでも、まだ私は姉さんのことは…。

姉さんの方を向くと、一夏と葵とで何か話している。昔から姉さんは私と千冬さんとあの二人にしか笑顔を向けない。

一夏。私が専用機を欲しいと思ったのは一夏が原因だ。男として唯一のIS乗りの一夏は専用機が与えられている。初めは私がよく知りもしないISの知識を絞り出し操縦を教えていたが…最近ではもう私と一夏の間では差はなくなつてきている。そして一夏は何故か代表選にタッグトーナメントでもイレギュラーな事件に巻き込まれている。そしてその度に思った。私に専用機があれば…一夏と一緒に戦えるのにと。

葵。一夏と同じ六年振りに再会した私の幼馴染。かつては少年だったが今では少女となっている。…まあ見た目は昔から少女みたいだったからあまり違和感ない。そして葵の登場で…今まで私が思っていた常識は覆されてしまった。葵が来る前まではセシリア達と模擬戦で戦つて負けても、訓練機の私が勝てる訳が無いと思つていた。しかし葵は私と同じ訓練機に乗つてるのに、…セシリアに鈴、シャルに勝っている。ラウラには負けているが、それでもごく稀にラウラに勝利することもある。初めて葵と模擬戦をした時の事は、私は今でも忘れない。

「はあ！」

「甘い！」

私の気迫を込めた一撃を、葵は少し後退しただけでかわした。そして私に刀を振り下ろす葵。その一撃を私はかろうじて防いだ。私は葵の刀を上へ押し上げると、すかさず葵の腹を横薙ぎに斬った。しかし葵は急上昇してそれを回避。上へ飛んでいく葵を追い、私も上昇。葵を追って上昇していたらいきなり葵は急旋回し、急降下しながら私に向かってきた。その速度に私は対応出来ず、上から葵に肩を突かれ私はその衝撃で地面に叩きつけられた。急いで体を起すと葵は空の上におり、私が起きるのを待っていた。その姿を見て私は見下されてると思った。すぐにまた上昇し、葵に向かった。空中で静止している葵に斬りかかる。しかし、

「はー！」

と私が斬りかかる前に葵は私の手首を刀で打ち据えた。衝撃で体が泳ぐ私に、葵は刀を振りかざし、そして容赦無く私の頭めがけて振り下ろした。衝撃で下に落下する私を葵は追いかけて…その後私はほとんど葵に対し攻撃を与えることも出来ず敗北した。

「箒がまだISに乗りなれて無いからとしかいいようが無いけど」
模擬戦終了後、葵に何故こうまで歯が立たなかったのか聞いてみたら、そう返された。

「生身の剣の勝負なら箒が私よりも強い。それは私も認める。でもISに乗ったら私が箒を圧倒するのはもう単純な話、箒がISを乗りこなせてないから。まあこれは一夏にも言ったけど、箒はただISを車の操縦みたいに動かして私に襲っているだけ。私はISを手足の延長として、生身と同じ感覚で動かしている。生身での精密な

動きを算はまだISで再現出来て無い。だから私に負ける」

葵の言葉を聞いても、納得できるようで出来ない。私だって自分の今まで体で覚えた剣の腕前を披露してきたのだ。それが全く再現出来て無いなんて。

「まあでも気にする事は無いと思うよ。だって算はまだ本格的にISに乗り始めて三カ月も経ってないし。私は一年と半年以上ISに乗って激しい特訓してきたんだから。これで算が私に勝ったら私凄くへこむよ。いや本気で。それに算の腕前は一組じゃ専用機持つてる一夏達除けば一番上手いよ」

例えセシリア達を除いて一番と言われても、あまり嬉しくはない。私が欲しい実力はそのセシリア達のレベルなのだから。しかし、葵の言う練習の差が大きいのは認めざるをえない。セシリアに鈴、シヤルロットにラウラ、葵も私以上に厳しい特訓を受けてたのだろう。ならそれに追いつくためには…

「はい終了〜。さすが私超早い〜。終わったよ〜〜算ちゃん！ん、おや？算ちゃん〜ん！終わったよ〜〜！」

「え、はっはい！」

どうやら考えこんでる内に姉さんの作業は終了していたらしい。

姉さんの言葉を聞いて我に返った私は腕や足を動かしてみる。うん、正常に作動している。

「じゃあ箒ちゃん、試運転開始しよっか。準備はいいかな」

「はい、大丈夫です」

では、この機体、紅椿の性能を試させてもらおう。

「凄いな箒の専用機……」

「あの機動性、第三世代の中を探してもそうそうないわね」

箒が束さんに言われた通りに試運転をやっていたが、その性能に俺達はただ驚いた。セシリア、鈴、シャル、ラウラは喰いつくように箒の専用機、紅椿を見ている。特にラウラが真剣な眼差しで眺めており、おそらくどう戦えばいいかをもうシミュレーションしてるのかもしれない。

「しかし空裂だっけ？さっき箒がミサイルの群れを切り裂いたやつは？あれなんかゲームにあった横一文字や空破斬みたいでカッコいいなあ」

「ああ、それはわかる。しかし俺は雨月の方がいいなあ。雪片式型にああいった性能追加して欲しい」

俺と葵は紅椿の武器について語っている。いや俺の白式も零落白

夜以外に何か欲しいと思うし。

「何言ってる織斑。貴様が雨月持っても当てる事が出来ないという意味が無いだろうが」

「バツサリと俺の願望を切り捨てる千冬姉。：いやそうかもしれないないけどさあ」

「あゝあ、しかしこれで専用機持っていないのは私だけかあ。寂しいなあ」

と葵が溜息交じりに愚痴った瞬間、束さんが口を開いた。

「あ、それは大丈夫だよあーちゃん！ちゃんとあーちゃんの方も持ってきたから」

「ええ！」

束さんの言葉に驚愕の声を上げる葵。え、束さん葵の分も専用機持ってきてるの？

「ふふふ、さあご覧あれ！」

束さんが叫ぶと再び束さんの前に上空から細長いひし形の金属の塊が落ちて来た。それはまたさっきの紅椿同様外装がめくれ、中に一体のISが入っていた。白と黒、二色の色分けがわれているその機体を見て、葵は再度驚いている。束さんはそんな葵を見ながら胸をはって機体を紹介した。

「ふっふっふ。どう驚いたあーちゃん！これがあーちゃんがいた出雲技研が作るうとしていたあーちゃんの専用機、スサノオだよ！」

臨海学校（二日目 専用機前編）（後書き）

次回で葵が遅れて登校する羽目になった理由がでます。

臨海学校（二日目 専用機中編）（前書き）

い。久しぶりに更新。ちょっと内容が酷いけどこんな設定にした私が悪い。

臨海学校（二日目 専用機中編）

「スサノオ…」

束さんが持つてきた葵専用機スサノオを、葵は茫然とした感じで眺めている。しかし葵ちよつと驚きすぎじゃないか？そりゃ束さんが葵の分の専用機持つてきた事は俺も驚いたけど、お前さつきから幽霊でも見たかのような驚愕な顔してスサノオを見てるし。

「へ〜これが葵の専用機なんだ？…う〜訓練機でも負けてるのに専用機とか鬼に金棒じゃない…」

「まあ今まで持つてなかった方がおかしかったんですけど…しかし何で篠ノ乃博士が葵さんの専用機を持つてきてるのでしょうか？」

「筈と同様に篠ノ乃博士から葵へのプレゼントじゃないかな？」

「しかし先程出雲技研がどうのとか言つて無かったか？ふむこの機体も紅椿同様第四世代機なのだろうか？」

「ん？出雲技研…たしかどこかで聞いたような気が…」

鈴、セシリア、シャル、ラウラも葵の専用機スサノオに注目している。筈も葵の専用機が気になりこつちに降りてスサノオを見ている。はて？そっぴや俺もどっかで聞いたような気がするな出雲技研つて…。

「よしそれじゃああーちゃん！フィッティングとパーソナライズ始めるからこつち来て〜」

「え」

東さんに呼び掛けられてようやく葵は我に返った。そして東さんの方を向いて、

「東さん、ど、どうしてこの機体がここに存在してあるのですか…」
と震える声で東さんに尋ねた。お、おいどうした葵！何で震えてるんだ？しかもさつきからどんどん顔色が悪くなってるぞ！

「私が頼んで東に作らせたからだ。いや正確には出雲技研の所長はじめ研究員たちが私に懇願してきたからだな。私を通し東にお前に専用機を、スサノオを頼みますと」

葵の質問に、東さんでなく千冬姉が代わりに答えた。え、出雲技研の人達が？何で？

「出雲所長達が…で、でもたしかこの機体の研究データはあの時全て消えたって…」

「あははは、そこはこの天才の東さんにかかれば全く問題無し。だって私世界中のIS研究所のデータを24時間ハッキングしてたから。研究データは私のラボの中にあつたからそれを忠実に再現したよ。まあ出雲技研の人達が私に懇願する理由わかるなあ。私なら作るのはお茶の子さいさいだけど、今の出雲技研の皆がこの機体をもう一度作り直すとなると…二年位かかるかもしれないしね。そんなに待つてたら日本代表を目指すあーちゃんの足枷になっちゃう」

…常時世界中を監視してるのかよ東さん。てかそれが当たり前の事のように出来るって…。それにしてもどうしてその出雲技研の人達は千冬姉を通して東さんに頼むような事を？いや東さんの言からすると作るとなると二年かかるとか言ってるし…いやそもそも研究データが消滅？何があつたんだ？

そしてさつきから驚いているのが東さんがその出雲技研の人達の要請を受け入れてる事だ。さっきの話し方にしても、出雲技研の人達

に対しては東さんは嫌悪感が全く無かった。あの箒や千冬姉、俺と葵以外はどうでもいいと思っていた東さんが。

「そうだ思い出したぞ！」

「うわっ！ちよつと何よ箒いきなり大声出して！びっくりしたじゃない！」

「ああすまない鈴。いやさつきから姉さんや織斑先生が言っていた出雲技研なんだが…一夏は覚えてないか？今年の三月の島根にあるIS研究所が実験の失敗による大火災で多数の負傷者が出た事件を」

「あ！思いだした！そうそうかなり大きなニュースとして流れてたよな。たしか重傷者が39名も出たっていう…ってちよつと待て！葵！お前もしかしてそこにいたのか！」

「…ええ。私がISの訓練をしたのは今一夏が言ってた出雲技研。そして…その事件が起きた原因は私にある…」

俺の問いに沈痛な表情を浮かべて答える葵。っていや待て。葵のせいで事件が起きた？どういうことだ？あゝくそ！わからないことだらけだ。

「ちよと葵！一体あんたに何が起きたのよ！」

「もしやお前が登校するのが遅れたってのはその事件が原因なのか？」

鈴と箒が葵に詰め寄っている。その顔は…葵に何が起きていたのかを本当に心配している表情だ。

「えつと。いやそれは」

「もう話した方が良くないんじゃないかなあーちゃん」
東さんが葵に微笑しながらそう言ってきた。

「私も同感だ。つらい出来事なのはわかるが……少なくともここにいる連中には話してもいいと私は思う。特に一夏には言った方がいい。こいつは知らなかったら後で絶対後悔する」

俺が後悔する？葵の方を見ると目を逸らされた。

「なあ葵、以前お前に登校遅れた理由を聞いた時、その時お前はただ言いたくないと言ってたけど……今も駄目なのか？そして俺も関係あるのなら教えてくれ！頼む！」

千冬姉と俺の言葉を聞いて考え込む葵。セシリアにシャルにラウラも葵をじっと見つめている。葵は東さん、千冬姉、そして篤、セシリア、鈴、シャル、ラウラ、最後に俺をじっと見つめて、はげつとため息をついた

「そうだね。この専用機を前にしてもう事情話さないってのもアレだし……。というかさつきから意味深な発言連発しすぎたし。それに……皆なら話してもいいかな」

そして葵は、今まで話さなかった遅れた理由を語り出した。

「じゃあ長くなるけど順を追って説明するから。以前話したように私は初めての模擬戦で代表候補生を一撃で気絶させた後、政府関係者が協議した結果代表候補生に選ばれた。そして選ばれた後私は島

根にある出雲技研というIS研究所に案内され、そこで代表候補生としてISの訓練を受けることとなった。その出雲技研だけど、私以外にも4人IS訓練を受けている同学年と年下の少女達がいたのよ。三人は代表候補生候補という名の通り代表候補生予備軍。訓練次第で候補生になれるかもしれない者達。もう一人が……私が殴り倒した代表候補生。別の施設行けよと心底思ったわね。この四人と私は一緒になつてISの訓練を受けてたわけだけど、はっきり言って私と四人の仲は最悪だったわね。欠片も友情なんて芽生えなかった」

思いつきり嫌悪感むき出しの表情で葵はそう言った。

「まあ三人からすれば私はいきなり候補生になったから気に入らなかつたんでしょね。候補生の方は初めてIS乗った私に一撃で気絶させられたからもあるけど、まあこの四人とも完全なる女尊男卑主義者だったつてもあるわね。ようは私が元男だったから今は女でも彼女達の認識としては男。で、今の風潮で男は女からはどんな存在か言わなくてもわかるわよね」

「なんか凄く偏見持った連中だったんだな。心は知らんが葵は体は本当に女なのに……」

「まあ今の社会だとIS乗りは特別な存在だからね。ある種の特権階級的な意識もあつたのよ。そんな連中に私は少女漫画みたいなじめを散々受けたわね。無視、ハブ、私物を壊される、ISスーツはハサミで刻まれる、専用ロッカーは私の落書きオンパレード、大勢の前で誹謗中傷等々。そしてそれだけやっても誰も咎めなかつたわね。出雲技研にいた女性職員の8割は彼女達の味方だったし。残りの2割は飛び火を恐れて見て見ぬ振り」

「ちよつと葵！その連中の居場所吐きなさい！私が衝撃砲で吹き飛

ばしてやるわ！」

「俺も我慢出来ねえな！最低だろその連中！」

「よってたかつて一人を鷲るとは…最低の連中だな！」

「僕だったら耐えきれないだろうな、そんな環境…！」

「私も本国でライバルから似たような事をされましたわね…、でも葵さんよりは酷くなかったのは確かですわね」

「私も教官が来る前は…」

「まあ怒るのはまだ話を最後まで聞いてからにして。この4人、ここまで私をいじめた理由だけど、さっき言ったの他にもあるのよ。ま、これは自慢になっちゃうんだけど私は出雲技研に入った初日で候補生候補の三人を模擬戦で下し、それ以降ずっと負け無し。候補生もだけど2ヶ月間位は向こうが専用機もあるし優勢だったけど、半年もすれば私もIS操縦にかなり慣れて打鉄で五分五分、8か月後には私の勝率は相手は専用機、私は打鉄でも完全に100%となった。出雲技研に来て8ヶ月目以降、候補生との戦いで私は最後まで負け無しとなった。これが彼女達のプライドを完膚なきまでに砕いたんでしょね。ロッカーの落書きとかもうバキの真似？と思っただわ。どんなにいじめても肝心のIS戦で私に負けまくった彼女達を私は完全に見下してたわね。だから彼女達のいじめもその8か月経った以降は虚しい抵抗みたいに思えた」

「なるほど、確かにどんだけやっても越えられない壁か。その4人が悔しく葵を憎む理由はわかったが全く同情はしないけどな。」

「それに出雲技研で私に味方が全くいなかったわけじゃないわよ。」

出雲技研にいた男性職員全員に私はよくしてもらったというか可愛がられた。女になってまだ半年だったからどっちかというとなりの方が話かけやすいみたいなのが良かったからね。まあ私としては普通に話しかけただけなんだと、そしてたら向こうがめっちゃくちゃ感激したのよ。酷いものになると『いつもお世話になります』みたいなこと言っただけで感涙した人もいたわね」

「はあ？なんだそりゃ？」

何でその程度で？

「いやさ、さっきの4人の振る舞いとそれが容認されてるのを考えればわかると思うけど、出雲技研において男性の地位は物凄く小さかった。女性職員、そしてさっきの4人に男性職員は奴隷みたいな扱いだっただのよ。そんな中元男とはいえ年頃の女の子が笑顔で接してくるだけで向こうは相当嬉しかったみたいで……」

まあ葵は見た目は相当の美少女だしな。性格も良いしそんな女の子が笑顔で接してきたら……あ、なんか納得。

「私もその四人と女性職員からは嫌われてるせいもあって、皆に懐いた。喜ぶと思って暇な時は菓子を作って振る舞ったり、バレンタインの時も手作りチョコ配ったりした。そしてたら娘や孫のように扱われ、『是非将来孫の嫁に！』『息子の嫁に！』『俺の嫁になつて！』と言われるようになった。そしてその言葉が本気なのか私に遊び相手が欲しいだろうと思ってなのか、両方だろうけど休日は職員さん達の息子や孫を呼び、私と一緒に遊ぶようにしてくれた。彼等と遊ぶのはかなり心の支えになったわね。あそこで男友達がいなかったら私心荒んだらどうなあ」

と言っただけで笑顔を浮かべる葵。

「なあ葵、人間関係はわかったがいつになったら話の核心に触れる

んだ？」

「まあまあ焦らない焦らない。この人間関係がこの後重要になるんだから」

「…そうか」

ん？なんかいらつくなあ？何でだろうな？

「ま、私がいた出雲技研はそんな環境下だったわけ。そして今年の1月、IS学園入学が決まると同時に出雲技研が長年開発していた第三世代型ISの運用目処が立ち、そのパイロットとして私が選ばれた。開発陣は全員男性職員で、私のためになんとかして入学前に完成させようと皆急ピッチで開発を急いだわね。私も専用機を貰えると思うとワクワクし、完成が待ち遠しかった。しかし、翌月の2月、一夏の登場である変化が起きてしまった」

「俺の？まさか葵が前言っていた俺の専用機を作るためコアが無くなったとか言ってたが、そのことか？」

「そう。でもあれは一夏のせいじゃない。一夏が望んだ事じゃないのはわかるし、日本政府としても唯一の男のIS乗りに専用機を与えようと思うのは至極当然の事。ただそれに私の分のコアを使われたのは事実。じゃあ足りないコアをどう補充すればいい？簡単なこと既存の機体から抜き取ればいい。で、それに選ばれた機体ってのが：出雲技研にいた、私が殴り倒して気絶させた代表候補生の機体って訳。私との対戦履歴があまりにも酷いからというのもあったけど、第二世代機でしかも第二形態になったのにワンオフアビリティを発動出来なかったから見切りをつけたのよ。一応代表候補生のままだけど事実上のリストラかなあれは」

「うわ：自業自得とは言えキツイな」
「ただ聞く限り同情はしないけどな。」

「泣いて彼女は嫌がったけど、国の決定事項だから変更は無し。彼女の専用機の解体は決定されたけど、最後に彼女は条件を出して懇願した。『なら最後にその第三世代型ISを』

「この機体で勝負させて欲しい！」と。役人さん渋ったけど性能テストを試すにはいいかもと思いいそれを受け入れてしまった…」

「はっつと溜息をつき思いつきり暗い顔をする葵。なんだ、なんか物凄く嫌な予感がしてきた…」

「そんなわけで一時的に訓練機の、私がよく使用していた打鉄を解体しコアを取り出してそれを元に作成。そして今年3月、出雲技研の第三世代型ISスサノオ完成。名前は候補としてアマテラスもあり、女性神だからそっちが良いのでは？という意見もあつたけど、やっぱ戦の神の方が縁起が良いとのことでスサノオと任命されたわ」

「そして私がスサノオのフィッティングとパーソナライズを行つてる時、彼女が現れた。皆驚いたけど、自分が対戦する機体を見に来たんだろうと思いい気にしなかった。そして彼女は私の方をじつと見つめ、笑みを浮かべると……ISを展開し、グレネードランチャーを構え私に発射した」

「……………ええ！！！！」「……………」

「セッティング途中だったけど、その動きを見た私はとつさに近くにいた職員を突き飛ばした。その直後に私に着弾、大爆発が起きたわ。途中だったからエネルギーもまだ十分補給しておらず、その一撃だけで私のエネルギーはほぼ消滅。私がまだ生きてるとわかった彼女は再びグレネードを構え私に撃とうとしたけど、横から銃撃を

受けグレネードは破壊された。そちらを向くと職員がIS用アサルトライフルを数人で構え彼女に浴びせていた。そして私を見て『逃げろ！』と叫んだ。そしてその直後彼女は別の武器を取り出した。発砲。爆発が起き彼等は吹き飛んだ。私は彼らに駆け寄ろうとしたが上手く動かない。調整が済んでないため動きがかなり悪かった。そんな私を彼女は笑って銃を構え、撃った。避けきれぬわけもなく直撃をくらい、スサノオの機体は砕け私は血まみれとなり気絶した」

「目が覚めたら私の上に血まみれの所長さんが覆いかぶさっていたわ。意識はなく背中から大量の血を流していた。大声で呼びかけても返事は無かった。そして次に周りをよく見てみたら、燃え盛る研究所で、私の周りに横たわる職員さん達だった。皆血を流しどう見ても重傷だった。意識がある職員さんがうわ言のように『守るんだ… 葵を』と言ってたわ。それを聞いて、皆私を守るため戦ってくれたんだとわかった。朦朧とする意識の中、血が噴き出す腹を押さえ立ち上がった私の前に、彼女は現れた。皆の必死の抵抗を受け、武器を全て失い絶対防御のエネルギーを消費してまで機体を動かしているのか、左腕の装甲は無くなっていた。それでも私を殺そうと機体を動かして私の前に立ち塞がった。『あんたが！あんたが悪いんだ！あんたが全て！』と泣きながら片腕を振り上げ私に襲ってきた。必死になって避けたけど、全身から出血してるせいで意識がなくなりかけ、壁際に追い詰められた。その時死を覚悟し、走馬灯が頭を駆け巡ったけど、その中に打開策があった」

…え、その状況下で？

「チャンスは一回こっきり。壁に追い詰めた彼女は会心の笑みで腕を振り上げた。その瞬間私は死力を振り絞って彼女との間合いを詰め、左手を彼女の腹にそえた。そしてその左手の上に私は右手を思いつき叩いた。そして…彼女は血を吐いて気絶した。それを見届けた私は気が緩み再び気絶した」

「いやちよつと待ってくれ！なんかもう想像以上の事が起こりすぎてもう何から聞いたらいいのかわからなくなってきたが、とりあえず最後の、どうやって相手を倒したんだよ！」

「だから左手を」

「いやだから何でそんなんで」

「昔、父から鎧を着た武者を素手で倒す方法を習ったからね。絶対防御が発動しなくなったISなら条件は同じかなと思って。というかそれしか方法が無かったのよ。なんせ彼女のIS、全身甲冑装甲タイプ。フルアーマータイプだから。一夏の白式や打鉄見たいに顔面露出とかしてたらそこを殴って倒してやるわよ。2年以上前に教えて貰い、その時は合格点貰えたけどあの極限条件下で再び成功するかは賭けだったけど」

「その後だけど私は全治1カ月の重傷。スサノオに守られてたからこの程度で済んだけど、…私を守るために戦い疲った職員さん達は全治3カ月から半年の重傷だったわね。死者が出なかったのが本当に奇跡だった。私は全治1カ月とはいえ、体調を完全に取り戻すにはさらに2か月かかった。別の施設でリハビリをようやく全て終えた私の前に干、いや織斑先生が現れてIS学園に連れて行ってもらった。そしてあの時のホームルームに繋がるというわけ」

そしてはつと葵は再度溜息をついた。俺は篤や鈴達を見てみた。皆葵の話聞き茫然となっている。そりゃそうだ、こんな展開予想外すぎる。葵に何があったのか知れたかったがまさかこれほどのことがあったとは。そして葵が真相を話すのを渋ったのがわかる。つまり…

「…俺がISに触れなければ、コアの数は足りてそんな事件は起きなかつたんだな」

間接的とはいえ、俺が原因でそんな事件が…

「それは違つて一夏。それがなくても彼女と私との仲を考えると…似たような事は起きたかもしれない。だから言いたくなかつたのよ。言つたら一夏は自分を責めると思つたから」

「織斑、青崎の言つとおりだ。結果的にそう思つても仕方ないがあくまで悪いのは暴走した小娘だ。お前は関係ない」

「でも！」

「少しは考える馬鹿者！お前がそうやっていじけることが青崎にとつて苦痛となつてるのかわからんのか！」

千冬姉の言葉で俺はハツとなり、葵の方を見た。その葵の表情を見て…千冬姉の言葉の意味を理解した。

「で、織斑先生。そのバカをやらかした犯罪者はどうなつたのですか？」

鈴が底冷えするような声で千冬姉に聞いた。目が物凄く冷たい。いや、箒にセシリア、シャルにラウラも同じ表情を浮かべている。

「さすがにこのようなことは表沙汰にはできんからな。代表候補生が嫉妬で殺人未遂、大量傷害、器物破損建物全壊、罪状を並べたら死刑は免れん。だがこのようなスキャンダルが世間に流せるわけがなかるつ。そうなつたら日本のIS地位が傾くのは避けられん。情報操作をし実験の暴走として処理させたが、あの小娘は極秘裏に監禁させた。20年は出れんだろうな」

「死刑にすればいいのよそんな奴！」

俺も同感だ！そんな奴は死んだ方が良く。更生なんて無理だろ絶
対！

「一応まだ未成年だからな。多少の温情措置は取ってやった。ま、
若い時をずっとせまい部屋で過ごすんだ。罰としては十分だろ」

青春の全てを独房で過ごすのか。それでも足りない気がするけどな。

「長々と話したけど、これが真相。私が遅れた訳も専用機を持って
なかったものね。」

…あゝなんかすっきりした。話したくない内容だったのに、皆に話
したら気分がすっきりした。解放されたくって気分かな」

「それはお前がずっと抱え込んでたからだろ。辛かったのなら私た
ちにもわけるとよかったんだ。…私たちは友達だろうが。辛いこと
があるなら話して軽くすればいい」

「筭の言う通りだぜ。もう、一人で抱え込むなよ。そんな辛いこと
があったとしても、俺達が忘れてやるからさ」

俺と筭の言葉を聞き、葵は首を縦に振り、

「ありがとう」

と言った。そしてその瞬間、

「あ、あれ？あれ？」

目から大粒の涙がこぼれていった。張り詰めたものが切れたのか、
今まで我慢してたのが溢れたんだろう。涙を零す葵を眺め、気がつ
くと

俺は葵を抱きしめていた。そして俺の胸に葵の顔を押し付けると、

葵は、

声を出して泣き始めた。

「…ねえちーちゃん。私はどのタイミングで再びあーちゃんにセッティングの話持ちかければいいかなあ。というか！これはヤバい光景かな。篝ちゃんピンチ？」

「さすがにもう少し待て。それに一夏も葵も束が考えてるような事は別に考えては無いだろう。…多分」

「…ちーちゃんも自信ないんだ」

「あの二人だと判断が難しいだが」

臨海学校（二日目 専用機中編）（後書き）

話が長くなりすぎたんでさらにわけました。

なんかもうつっこみ所満載になってますが、説明不足の所を次話千冬姉が行います。

個人的にはやく福音出したいなあ。

臨海学校（二日目 専用機後編）（前書き）

また結構間が空いてしまった…

「う、うわああっ！う、うう……」

俺の胸で葵は声をあげて泣いている。話してる時は平静を保ってたが、……やはり辛さを押し殺してたんだな。出雲技研で葵が受けた陰湿ないじめ、葵は平気みたいな言い方していたけどそんなはずがない。俺の想像を絶する悲しみがあつたはずなんだ。そしてその悲しみを和らげてくれた出雲技研の男性職員達も、候補生が暴走し葵を守るために傷ついて…。

でも、そんな出来事を俺に話したくなくて…。話したら俺が…。

ああ、くそ！なんだよ俺！

親友が一番辛かった時に何もしてなくて、しかも勝手に消えた事に怒ってばかりで…

葵は最悪の環境下でも負けずに前を向いて、真っ向から立ち向かってたつてのに…

そんな葵に俺はのんきに葵と再会出来たことをただ喜んでただけで…

再開後も葵は俺に気を使って真相は誤魔化して胸の内に秘めて…。

俺は、泣いている葵を強く抱きしめた。俺よりもずっと強い葵だが、こうして抱きしめると吃驚するほど儚く感じてしまう。そして俺はある事に気付いた。葵とは出会って10年近くになるが、

声を出して泣いたのをこれが初めて見たと言つ事に。

その後葵が泣き止むまで嗚咽の声は続いた。

「ごめん、一夏」

ふきふき

「……いや気にするな。この程度でお前の気が楽になるならいくらでも許す」

「本当にごめん」

顔を真っ赤にしながら葵は、……涙と鼻水で汚れた俺の胸を束さんから貰ったハンカチで拭いている。いやかなりべったりついてたからな。泣き止み葵が顔を上げたら、俺の胸に葵の涙と鼻水がべつとりと付いていた。葵が大慌てで何か拭くもの探したら笑顔で束さんが葵にハンカチを手渡してくれた。

「もう落ち着いたか、青崎」

千冬姉がびつくりする位優しい顔して葵に尋ねた。

「はい、もう大丈夫です」

目は赤いが、しっかりした声で葵は返事した。うん、あの表情ならもう大丈夫かな。いつも様子を取り戻してきている。

「落ち着いたようですね、ねえ葵さん」

「すまないがオルコット、青崎に聞きたい事は沢山あるだろうが後にしてくれ。青崎、束、時間が押しているためもうスサノオのフィッティングとパーソナライズを始めてくれ。そして他のメンバーは私に付いてこい」

セシリアの台詞を遮って、千冬姉は束さんと葵にスサノオの調整を急がせた。セッティングを束さんにまかせ、千冬姉は移動し始めた。俺含めセシリア達も葵に聞きたい事がたくさんあったが、千冬姉が有無を言わさない目つきをしたので、渋々みんな移動をした。葵達が見えなくなる距離まで離れた所で千冬姉は立ち止った。

「まあこの辺で良いだろう。…お前達の気持もわかるが、今はそつととしてやれ。代わりに私がある程度の疑問は聞いてやる」

確かに落ちついたとはいえ、葵の中でも気持ちの整理はまだ終わってないよな。あれだけ大泣きしたんだ、今はあれこれ聞かずそつとしておいたいいか。

「それでしたら織斑先生、出雲技研であれば昔は男として生活されてた事を理由に迫害されましたのに、葵さんの登校初日で何故織斑先生はその事をわたくし達に話そうとしたのですか？まあ葵さん本人が直接わたくし達に話されましたが、葵さんが言わなくてもあの時は織斑先生が話そうとしてましたけど」

ああ、そういえばそうだったな。たしかにあの日千冬姉、もういきなり俺達に葵の事情を話そうとしてたな。

「その事か。いくつか理由があるが…一つは隠してもいざればれるからだ。青崎は日本代表を目指している。今の世界において、ISの国家代表の存在がどれほど大きいかわからないわけではなからう。ましてや日本の国家代表だ、世界中が徹底的にどんな存在か調べ上げるぞ。そうになったら日本がどれだけ情報操作してもバレ、その事実を公表されるだろう。そうになったら知らなかった日本の国民の中

で、隠していた事等に不満を持つ奴が必ず出てくる。そういう連中がきっかけで青崎を代表から外そうという動きがでるかもしれない。なら最初から公表しておいた方が良く。その上で実力で代表になった事を見せつけければそういった連中も文句は言えまい」

「…すみません織斑先生、その理由は聞いてたらもう織斑先生の中では葵は日本代表になるから隠し事はせずさつさと公表した方が後の面倒が無くていいと思っっているようにおもえますが。…つまり葵の日本代表はもう決定しているのですか？」

鈴の質問に千冬姉は、

「さあな、それはどうだかな」

と言つてニヤッと笑つた。いや千冬姉、口で誤魔化してもその態度でもうバレバレですから。そういや昨日の夜、千冬姉俺に葵が日本代表に確実にになるとか言つてたな。

「しかし織斑先生、それはあくまで可能性の問題ですよ。実際の所後でバレたとしても、確かに隠していた事に不満持たれるかもしれませんが事情が事情ですしそれが理由で代表から降ろされるなんて事は無いと思いますよ？僕なんか男と偽ってIS学園に入学しましたけど、…今は隠さず本当の性別を発表してますが代表候補生から降ろされてませんし」

シャルの話聞いて俺も同感。確かにそうだよな、いずれバレるからといって事情が事情だし、そこまで不満を持つ奴ばかりとは思えない。シャルの言葉に千冬姉は若干呆れた顔で言った。

「デユノア、もうお前が女だと正式に世間に公表したから言うが…お前の性別詐称などバレバレだったぞ。学園上層部は全員知つていたし各国のお偉いさん達にも公然の秘密となつていた。ネットのある掲示板等ではお前が男のはずがない、女に決まつてると連日激

論され、証拠の写真とか言っただけで色々張り出されてたぞ。中にはお前が中学生の頃の写真も載っていたな、女の子の服装をしたお前が。フランス政府は必死になって毎回火消しに追われてたな」

「ええ！そうだったんですか！」

シャルは知らなかった新事実に驚愕しているが、…あゝなんか納得。そのとある掲示板で頭に2の数字があるあれか？

「まあ元々フランスとしても織斑に近づき情報がある程度収集出来たら良い程度の目的だったからな。今では織斑の友達となっているし、実力的には問題ないからフランスとしてもバラした所で候補生としては外さん。それにデュノア、こう言っただけなんだがお前の場合は国と家の事情で振り回された身だからな。公表してもお前は同情されこそ非難はされなかっただろ。まあ何人かの小娘が『初恋だったのに』と泣いてたようだが」

…その女生徒達、まあ可哀そうだな。シャルも「そんな子がいたんだ…」と気まずそうにしている。

「織斑先生、しかしいざバレルと言いましてもシャルロットの言う通りそこまで酷い事態になるとも思えないんですけど。それならIS学園にいただけでも秘密にした方がよかつたんじゃないか？あたしもそういう事情があれば、いや例え理由聞かなくても葵のためなら一夏も事も協力するのに」

あ、今度は鈴が千冬姉に質問か。

「そうかもな。葵の昔を知っている生徒は凰に織斑に篠ノ乃の三人だけで、日本政府が本気で詐称すれば学園在籍時だけでもバレないで過ごせたかもしれない。しかし、さっき述べた理由を聞いて青崎は最初っから話した方が気が楽だし、後で真相知って自分から離れる人とかを見たくないという理由でやはり最初から全て話す事を決

めたな。それに」

そういつて千冬姉は箒、鈴、俺を見て

「周りから何か言われようと、一夏達が一緒にいてくれたら大丈夫だからと笑顔で言ってたぞ」

と笑みを浮かべながら俺達に言った。う、そ、それはなんといか…照れるな。箒に鈴も同様で少し赤くなってる。

「それに今では織斑、篠ノ乃、凰以外にもオルコットにデュノアにポーデヴィツヒも事情を知っていても仲良くしてるからな。結果だけみても良かっただろ」

そう言われ俺等は顔を見合って、笑みを浮かべた。ああ、そうだよな。セシリア達も葵の事情聞いても全く嫌悪感なんて抱かなかつたし、葵と友達になつたし。結果的に見たら問題無かつたな。

その後もちよつとした事について千冬姉に俺達が質問していたら、

「ちくちやくん、終わったよ！」

と束さんの声が聞こえたので、俺達は束さんと葵がいる場所まで戻って行った。

「箒ちゃん同様あーちゃんのデータはあらかじめいれてあるし、紅椿以上にスサノオは近接格闘特化型に調整してあるよ。まあ私が調整したんだから不具合なんてあるわけないけどね」

と大きな胸を張って自信満々に言う束さん。その言葉通りなのか、さつきから葵は手足を動かしてるが、満足そうな表情をしている。

「はい、束さんの言う通り初めて乗っているのにも使っている打鉄以上に馴染みがあります」

「ふ、ふ、ふ。量産機とは違うのだよ量産機とは。じゃああーちゃん、さっそくだけで飛んでみて」

「はい！」

と返事をした瞬間、スサノオは物凄い勢いで一気に上に飛んで行った。うわ、なんだこの急加速！一瞬にしてはるか上空まで飛んで行った葵を、俺達は驚愕の眼差しで見つめる。

「さきほどの速度、筈の紅椿と同等か？」

「いやラウラ、私よりも早いぞさっきのは」

はるか上空まで飛んでいった葵は、しばらく上空を急加速したり急降下したりして性能を確かめている。その動きたるや、先ほど筈が紅椿を動かしている時も凄かったがそれと比較しても全く見劣りしない。むしろそれ以上に見える。

しばらく上空にいた葵だが、急に凄まじい勢いで地上に降りてきた。地面に激突？と思ったが、葵は寸前でPICを調整し、地面すれすれで浮いている。∴俺なら絶対あの速度だと激突してたな。

「凄いです束さん！想像以上に私が思った通りに動きます！」

興奮した様子で束さんに報告する葵。うわすげえ嬉しそうだな。

「そつでしょうそつでしょう。なんせ作ったの私だし」

「設計は全て出雲技研だろうが。お前はその通りに作ったただけだろ」

「ちーちゃん、いやそうだけど私が作ったから不具合無いって事を
いいたいんだよ…」

あ、ちよつといじけただした。千冬姉の言う通りだけど、なら出
雲技研ってそうとう凄い所だな。葵の為に心血注いで開発して…や
っぱ自分達の手で完成できなかったのは無念だったろうなあ。

そして葵は再び上空に飛んでいき、そこで止まると…ん、動きが
止まったままになった。何してるんだ？と思つたら、東さんからオ
ーブンチャンネルで葵の声が聞えてきた。

「…あの東さん。武器の性能チェックしようと思つたのですが…今
見てみたら何も入っていないんですけど。スサノオの専用武器
天叢雲剣や八尺瓊勾玉はおろか、このスサノオの第三世代特殊兵装
八咫鏡もないんですけど？」

は？何も無い。どういうことだろうか？いやスサノオという名前
から予想してたけど、武器の名前も神話からとってるんだな。

「青崎、一旦降りてこい」

千冬姉が葵を呼び、葵は再び地面に降りて来た。そして千冬姉に
またさつきと同じ質問をした。

「どうして武器が無いんですか？」

「ああ、そのことなんだが…専用の武器と第三世代兵装は東でなく、
出雲技研に再び作ってもらつことにしているからだ。これは日本政
府の命令でもある」

え？何で機体は東さんに作らせたのに、武器や第三世代兵装は出
雲技研に作らせるんだ？

「私も作つとくよ」とちーちゃんに言ったのに止められたんだよね
。なんか私が全部作っちゃうと不味いとかなんとか。なんか設計

は確かに出雲技研の皆が作ったけど、私が全部作ったら本当にその性能の全てが出雲技研の設計によるものなのか？と疑われるからか」

「日本のIS開発技術を他国にも知らしめるために必要な事だからな。特に第三世代は今各国が死に物狂いで開発を急いでいる。それを束が全て作ってしまったら本当に日本の開発陣が作ったのか？と疑われても仕方ないだろう。青崎、不便だとは思うがしばらくは我慢してくれ。出雲技研の者達も来月には多くの者が完治し、開発に取りかかる。まあ遅くても年末には完成するとは言っていた」
なるほど、確かに束さんが全て作ったらそりゃ疑うよなあ。

「そういうことですか…、ええ、それなら私も完成するまで待ちます！」

と笑顔で答える葵。ま、葵からすれば出雲技研の人達が作ってもらう方が束さんに作って貰うより嬉しいいんかもな。あ、束さん少し不機嫌になってる。

「しかし織斑先生、武器無くても戦えますけど領域もつたいないですよ。ならせめてブレードの一本でも欲しいですけど」

…武器が無くてもいいとか。葵しか言えない台詞だな。

「心配するな。あそこにおいてあるコンテナを開けてこい」

と言って千冬姉は、俺達が来た時から置いてある小さなコンテナを指差した。葵はそれに近づき、コンテナ4を開けると…中には一振りの剣が入ってあった。ん？まさかこれは。

「天叢雲剣じゃないですか！どうしたんですかこれ？」

と葵は興奮した声を上げ、千冬姉に尋ねた。あ、やっぱりなあ。流れからしてそうだと思うた。

「あの事件で機体も武器も兵装も壊されたが、その剣だけは奇跡的に無事だった。しばらくはその剣だけだが我慢しろ。青崎からすれば八尺瓊勾玉が無事な方が良かったかもしれないがな」

「とんでもありません！これで百人力です！」

と言つて天叢雲剣を構え、素振りをする葵。天叢雲剣、見た目は日本刀の太刀みたいだな。一体どんな性能があるんだ？

「今から見せてあげるわよ。じゃあ東さん、もう一回上上がりますんで箒の時と同じようにお願いします」

「りょーかいあーちゃん」

再び上空へ飛んでいく葵。そして頃合いを見計らった東さんが、

「じゃああーちゃん、これでどうかな」

と言つて東さんはまたミサイルを呼びだして…って多！箒の時の倍はあるぞ！それを一気に葵に標準を合わせて発射した。迫りくるミサイルの群れを、葵は剣を構え、ミサイルに向かって振った。するとその振った軌道に合わせて青いレーザーが帯状に広がって行き、ミサイルを切り裂いて行った。おお、紅椿の空裂と同じだな。しかし

「ふふふ、甘いよあーちゃん」

と言つて東さんはパネルを操作しだした。するといくつかのミサイルは葵の一撃をかわしスサノオに近づいて行った。それでも大部分は同様に切り裂いて行ってるが、2発ほどもう激突寸前まで近づいて行った。

「葵！」

思わず叫ぶ俺だが、激突する寸前で葵は後ろ向きのまま一瞬にし

て後退した。え！あれはまさか

「後ろ向きのまま瞬時加速だ！」

篤が驚愕して葵を見ている。あ、やはりさっきのは瞬時加速なんだな。そうしてミサイルから距離を取った葵は、残りのミサイルもなんなく撃墜させた。

「さすがだねあーちゃん、次はこれかな？」

と言つてまた空中から何かを出す束さん。次に出したのは紅椿やスサノオを格納していたひし形の塊だった。

「じゃああーちゃん！次はこれを斬り裂いて！」

と言つて束さんは葵に向かつて物凄い勢いでそれを飛ばした。葵も剣を構え、それを迎え斬った。そして…ひし形の塊は見事に二つに割れていた。

「あの一瞬で二つに斬り裂けるなんて…」

鈴が驚いているが、それよりも俺は葵が手にしている天叢雲剣に注目した。さっきまでは何ともなかったのに、今では刀身が青く光っている。

「気付いたか織斑。天叢雲剣はレーザーで敵を切り裂くだけでは無い。そのレーザーのエネルギーを刀身にコーティングすることで攻撃力を上げる事ができる。天叢雲剣の全エネルギーを刀身に乗せる事も出来、その時の一撃ならお前の零落百夜には劣るだろうかかなりの威力にはなるだろう。無論全エネルギーを一度にレーザーとして放つ事も出来る。大型レーザー砲並みの威力があるようだがそれは避けられたらお終いだからな、滅多には使わないだろうが」

ありがたい解説ありがとう千冬姉。ってなにそのチート性能。俺の雪片二型より数段凄いですけど。

「馬鹿者。それでも一撃の威力ならお前の雪片二型の零落百夜の方が上だ。葵のはそれと同等の威力はだせんし、それにお前のは一応連続使用可能だろうが」

いやそうはいいまして千冬姉。馬鹿みたいにエネルギーを消費する零落百夜はそんな頻繁に使えないじゃないですが。

「それはお前がなんとかするんだな
そうですね。」

「まゝ性能が良いのは当然だよな。だってあの剣、ほとんどオー
トクチュールに分類されるよ。スサノオ以外の機体が使ったらレ
ザーは出せるけど、刀身にコーティングすることは出来ないしね。
あ、紅椿ならできるけどね。ただ今の箒ちゃんじゃあのコーティ
ング技術は無理かな。あれ、簡単そうに見えて物凄く調整が難しいか
ら」

へ〜そうなんだ。文字通りスサノオ専用武器なんだなあれ。そし
て箒、さっきの束さんから無理と言われて悔しいのはわかるが、束
さんを睨むのはやめてやれ。

「ふむ、何も問題はないようだな。よし、これで篠ノ乃も青崎も専
用機の使用に問題が無い事がわかった。なら早速だが誰か、篠ノ乃
と青崎と戦って貰おうか。そうだな…篠ノ乃にはデュノア、お前が
戦え」

「はい！」

「そして青崎だが…」

辺りを見回す千冬姉、そして俺の方を向くと

「織斑、お前が青崎と戦え」と俺を指名した。

おまけ

「ねえねえちーちゃん」

「何だ束」

「あーちゃんのES学園でさっさと事情バラした件だけど、あれっ

ていつくんがIS学園にいたからしたんだよね。いつくんいなかったらちーちゃんもバラさず秘密にしようと思ってたでしょ」

「まあな、あいつらには言わなかった本当の理由の一つはそれだ。一夏がいるからさつさと話させた。例え経歴を変え名を変えて入学してもだ、葵が一夏達にも黙っておくのは耐えきれないだろうからな。そうなるのと必然的に一夏達には正体を明かすだろう。まああいつらなら秘密を守るのに快く協力するだろうが……問題はその後だ。一夏の性格からして葵と再会したら喜び、そして前と同じように一緒になってつるむだろう。葵もそれを望んでる。だがな、周りからすれば何で最近登校してきたばかりの葵と一夏があんなに仲が良いのか？と疑問に思われるぞ。あいつらからすれば昔と同様に過ごしていると思ってるが、はたから見れば付き合ってるようにしか見えんからな」

「…だろうねえ。篝ちゃんも同じように接すると思う」

「そうだ。そして篝も昔同様葵と接するだろう。しかしだ、IS学園で人付き合いが悪い篝が周りから見れば初対面の葵に親しげに話してるように見える。違和感を持たれるのは避けられん。あいつもあいつでお前の妹と言う事で周りから注目されてるからな」

「…篝ちゃん、やっぱり友達少ないんだね」

「あいつもお前にだけは言われたくないだろうがな。さらにだ、鈴木も演義とかそういうのは向いてない。感情を素直に表す奴だからな。おそらく一夏達とたいして差はないだろう。一夏に、篝、鈴の三人が登校初日からおそらく葵と仲良くしだしたらやっぱりおかしいだろう」

「ふうん、そつだよねえ」

「まあ他にもあるがな、真相話させた理由も話しても大丈夫な理由
は」

臨海学校（二日目 専用機後編）（後書き）

三種の神器がスサノオ専用武器です。詳細はまあ今後の話の中に出していきます。

読み返してみたらあまりにも誤字が多かったので少し修正しました。
うう、寝不足でハイな状態で書いてたからなあ…。

臨海学校（二日目 福音）

「お、俺ですか！」

「なんだ織斑、不服なのか？」

「いえそういうわけではないですけど……」

スサノオに乗っている今の葵に、まるで勝てる気がしないなんて言えないな……。いややべえ、マジで勝てる気がしない。今まで葵が乗ってた打鉄なら機動性ではこっちが上だったけど、スサノオの動きは白式を完全に上回ってるし。いやおそらく性能上はそんなに差はないんだろうけど……俺には“まだ”あの動きはできない。

「織斑先生、じゃあまずは僕と箒が戦いますね。箒、その紅椿どれほどのものか見せて貰うよ！」

おお、シャルはやる気満々だな。しかもあの目はあの性能を見せてられても負けれると思ってるじゃない感じだな。

「うむシャルロット、今日こそは勝たせて貰う」

箒も自信満々な顔でシャルに宣戦布告。お互い軽く睨みあうと二人は空に飛び

「待て二人とも。お前達は後だ。先に織斑と青崎が戦って貰う」

……飛び立とうとしたが、千冬姉に待ったをかけられた。

「何故ですか織斑先生？」

やる気満々な所で待ったをかけられたので、箒は若干責めるような顔して千冬姉に後回しにされた理由を聞いた。

「篠ノ乃、お前はまだ紅椿を少し操縦しただけで他にどのような性能があるのか知らないだろうが。青崎は開発時から一緒に関わっているからスサノオがどのような機体か十分理解している。織斑と青崎が戦っている間束から色々と聞いておけ」

「任せて篝ちゃん！お姉ちゃんが紅椿の全てを教えてあげるよ！」

「…お願いします」

「そういうわけだ。織斑と青崎、先に戦え」

と言つて俺と葵を見る千冬姉。

「まあ私は先でも後でもどちらでもいいですけど」

葵は天叢雲剣を肩に担ぎ笑いながら俺の方を向いた。

「じゃあ一夏、私のスサノオデビュー戦初勝利の為に華々しく散つてね」

笑顔で言う葵。初めて模擬選した時にも見せた俺に負けるはずがないという顔をしている。

……うん、あれだ。意地でも勝つてやる！

「青崎、今回はスサノオの性能と同時に天叢雲剣の性能もチェックしたい。だからなるだけ剣で戦え。素手で倒すのは最後にしろ」

「わかってますよ織斑先生。天叢雲剣の性能を限界まで引き出して見せます」

……武器を使う事がハンデ扱いかよ。それと千冬姉、何俺が負ける前提で話してるんだよ！

「ねえ一夏と葵、どっちが勝つか賭けない？あたしは葵に賭けるけ

ど」「でわわたくしも」

「私もだ」「嫁が勝つとは思えないから葵だな」「…みんな葵に賭けたら賭けにならないよ」「じゃあシャルロット、あんた一夏に賭ければ?」「…僕も葵で」

お前らくくくく！なんだよなんだよみんなして！誰も俺が勝つなんて思わないのかよ！最初勝てる気がしなかったが、それでももうこうなったら意地でも葵に勝ってやる！

「じゃあ一夏、始めようか」

そういつて先に上空へ飛んでいく葵。俺も葵に続き上空へ飛んで行った。ある程度上空まで行ったら互い適度な距離を開けて対峙。そしてそれを見届けた千冬姉が

「では始めろ！」

と叫び、それが戦いの合図となった。

合図と同時に葵は天叢雲剣を構え俺に向かってきた。その速度、今まで葵が乗っていた打鉄とは比べ物にならないほど速い！しかし俺も雪片を構え、葵に突撃する。どうせ俺の攻撃手段はこれしかないんだ。相手がこっちに向かって来るならむしろ都合。俺も真っ直ぐ葵に向かって突撃するが、葵は天叢雲剣を俺に向かって一閃。すると弧を描く縦薙ぎの青いレーザーが俺に向かってきた。

「あぶねっ！」

体を捻じり何とかそれを避けた俺だが、体勢が大きく崩れてしまった。そこに葵はまた天叢雲剣を振るい、今度は横薙ぎのレーザーを出し俺に攻撃。しかし、

「甘いぜ！」

今度は余裕を持って俺はかわした。その後幾度か葵は天叢雲剣を振るい俺にレーザーを浴びせるが、俺は全てかわしていった。

最初の攻撃の時は天叢雲剣の性能を忘れてたから慌てたが、落ちていて対処すればなんてことは無い。なんせ剣を振らないとレーザーが出ないのだから。しかも直線にしか来ないから楽にかわす事が出来る。砲身が無い鈴の衝撃砲の方がよっぽどかわしくいってものだ。

「ふうん、やっぱりこの攻撃方法は遠距離専門でやるには向いてないかな」

葵はそう言って天叢雲剣を振るのをやめた。

「じゃあ、次はこれかな」

その瞬間、天叢雲剣の刀身が青く発光した。天叢雲剣のもう一つの性能、レーザーエネルギーの刀身コーティング。そうすることで攻撃力を高め、相手を切り裂く。

青く光る天叢雲剣を葵は構え、俺にまた突撃してきた。俺も雪片を握りしめ、葵に突撃。俺と葵との距離が後数メートルといった所で、葵は俺に向かって剣を突き出した。その瞬間、刀身をコーティングしていたエネルギーが俺に向かって発射された。

「嘘！」

かわしきれず着弾、衝撃が俺を襲った。この衝撃とエネルギーの減り具合から見てセシリアのビットの一撃よりは弱い。ってその剣別に振るわなくてもレーザー出るのかよ！

「誰も剣を振るわなければレーザーが出ないなんて言ってないわよ！」

ヤバい！さっきの一撃に気を取られている間にすでに葵は俺との距離を詰めていた。天叢雲剣も再び青く光っている。慌てて俺も雪片を構えるも

「遅い！」

葵の攻撃に間に合わず、葵は俺の胴に一閃。後方に吹き飛ぶ俺に葵は『瞬時加速』を使い一瞬にしてまた距離を詰め、ガラ空きの俺の頭に強烈な一撃を与え俺は勢いよく海に突き落とされてしまった。

かなりの深さまで沈んだが、水中で体勢を立て直し上昇。そして海面から出ると、空で待っていた葵は俺に向かってまた天叢雲剣を振るって俺に追い撃ち。慌てて俺はかわした。くそ、容赦ねえなこいつ！

再び上空まで飛び、葵と対峙する。現状確認のためエネルギーを確認してみたが…さっきの攻撃だけです。すでに4分の1減らされている。ただ剣で打たれるだけじゃここまでは減らないのに。

「ふんふん、どうやらこれは効いたみたいね」

満足げに天叢雲剣を眺める葵。その刀身は先程同様青く光っている。そしてその切っ先を俺に突き出して葵は俺に向かって叫んだ。

「一夏！まだまだ準備体操の段階だからね、本番はこれからだから！」

…俺はすでに本番のつもりなんだがな。葵からすればまだなのか…。

葵はまた剣を構え、俺に向かって突撃してきた。俺は向かえ撃と
うした瞬間

「それまでだ！織斑！青崎！すぐにこちらに戻ってこい！」

千冬姉の叫び声がオーブンチャンネルから響き、模擬戦は中断された。

俺と葵が千冬姉の所まで戻ると、そこにはさつきまで居なかった山田先生がおり、千冬姉と難しい顔して何やら話をしていた。

「鈴、なにかあったの？」

「あたしも知らないわよ。あんたたちが戦ってたら急に山田先生が血相変えてここに向かってきて織斑先生に小型端末見せて何か話したと思つたら、織斑先生あんたたちの模擬戦を急に中止にしたんだから」

どうやら鈴達も何かあったのが知らないようだ。とりあえず俺も葵も鈴達と一緒に千冬姉と山田先生を見ていたら、千冬姉は俺達の方を向き、叫んだ。

「全員注目！ 予定していたIS装備のデータ取りは中断！ これよりIS学園は特殊任務行動に移る！ そしてお前達にもその任務についてもらう！」

旅館の一番奥の宴会用大広間に、教師陣と俺達専用機組が集められた。俺達の一番前に千冬姉はたっており、空中ディスプレイを使い俺達に現状を説明している。

千冬姉の説明によると、アメリカとイスラエルが共同で開発していた第三世代型軍用IS銀の福音が暴走監視区域より離脱。

その後衛星からの追跡の結果、その福音がここから2キロ先の空

域を通過する事を確認。時間にして五十分後。そして千冬姉から、この件は俺達だけで対処しなければいけないことがわかった。

ここまで聞いて俺は他のメンバーの様子を見てみたが、教師陣は無論の事俺と篤以外の代表候補生組は厳しい顔で千冬姉の説明を聞いている。特にラウラと葵は真剣な表情を浮かべている。

その後千冬姉から目標ISの詳細データが送られ、様々な議論がされるも目標ISは超音速飛行を続けているため攻撃する機会は一度しかないらしい。つまり、

「その一度の機会を俺の零落白夜の一撃で倒すってわけか…」

「話が早くて助かる。無論これは訓練では無い。嫌なら無理強いはせんが…どうする?」

そんなもの決まっている。

「いや、俺がやらなかったら多くの人が危険な目にあうかもしれないんだろ!ならやります!」

「よし、なら具体的な作戦に移るぞ!織斑の機体のエネルギーは全て攻撃に使うため、織斑をそこまで運ぶ役が必要になる。そこ」

「織斑先生!それでしたらちょうど本国から強襲用高機動パッケージと超高感度ハイパーセンサーが送られてきたこのわたくしに任せさせていただきますか!」

「オルコット、それはもうインストールされているのか?」

「いえ、まだですが…」

「今からですと、間に合うかはギリギリですね。では早速」

山田先生がセシリアのパッケージのインストール作業を指示しよ
うとした瞬間、

「ちよつと待った~~~~~!」

と東さんの声が響いた。ってなんで天井から首出してるんですか
東さん。

「東、まあちよつどいい。お前に頼みたいことがあったからな」

「ん!ちーちゃんが私に頼み事!うんうん、勿論OKだよ。ちーち
やんの頼みなら無条件でOKだよ!でもその前に、私が良い案があ
るよ!」

その後東さんからこの作戦には断然紅椿を使用することを勧めら
れた。第四世代の紅椿はパッケージ換装を必要としない万能型で、
全身展開装甲とやらでできているため東さんが少し調整すれば数分
で高機動型ISになるとの事。

「ふ、ふ、ふ。篝ちゃんの紅椿を使えばこんな作戦余裕だね!」

胸を張って言う東さん。うん、でも

「あの〜東さん。しかし篝はまだ紅椿に乗ってまだ一回も戦ってな
いんですよ。それなのに初めての实战ってのは…。一夏が万が一失
敗した場合ちよつと」

葵が不安そうな顔をして東さんに言った。そう、今日初めて紅椿
に乗った篝はまだ一回も戦闘を行っていない。模擬戦もこの件で流
れてるし、初めての实战で一回もまだ戦ってないのはなあ。

「安心しろ葵。私は立派に果たしてみせる!」

自信満々な顔をして葵に言う篝。いやお前のその自信はどっから
出てるんだよ…。

「うん、でも」

まだ何か言おうとしている葵に、

「大丈夫大丈夫。だって篝ちゃんといっくんはあくちゃんが守ってくれるから」

とあっけらかんと束さんは葵の方を向いて言った。

臨海学校（二日目）福音（）後書き（）

なんかようやくここまでできたなあと思います。

臨海学校（二日目 出撃準備）

「は？…あの束さん、今なんて言いましたか？」

「いやだからあーちゃん、篤ちゃんにいつくんが心配ならあーちゃんと一緒に行って守ってあげれば何の問題もないでしょ。」

困惑する葵にさも当たり前のように言う束さん。その言葉に千冬姉も頷き、

「青崎、お前にもこの作戦に参加してもらおう。幸いな事に強襲用高機動パツケージは今日お前に試験運用してもらおうため用意してあったからな。これをつけてお前も作戦に参加してもらおう。そしてお前が目標ISと交戦し、織斑のために足止めをする。」

「ちーちゃん、私に頼みつてあーちゃんの機体に強襲用高機動パツケージを取りつけて欲しいって事でしょ？私でなきゃ作戦まで間に合わないから。ま、あーちゃんだからやってあげるけどね。これが他の連中ならちーちゃんの頼みでも嫌だけど。」

…つい先程千冬姉の頼みなら無条件でOKとか言いませんでしたか束さん。いやまあこういう事は例外って事なんだろうけど。

「そうだ。この作戦失敗は許されん。しかし作戦の要の二人が少々心許ない。織斑が確実に目標を撃破するためにも目標を足止めする役が必要だ。篠ノ乃は青崎が言ったようにまだ試運転しかやって無い上、単独飛行ならともかく織斑を運ぶ事でかなりのエネルギーを消耗してしまう。戦闘する余裕はないだろう。」

千冬姉の言葉を聞き「それくらい私一人でも出来る…」と俺の横でボソつと言う篤。だ〜か〜ら〜、その自信は本当にどこから出てきてるんだよ。もしかして篤、専用機貰えて少し浮かれている？

さらに千冬姉が何か言おうとしたら、急にセシリアが立ちあがった。

「ちよつと！少しお待ちになってください織斑先生！葵さんも作戦に参加されるのならわたくしもお願いします！」

今回の作戦に自信満々に参加しようとしたのに東さんの登場ですっかり忘れられていたセシリアが、千冬姉に抗議した。が、

「却下だオルコット。さつきも言ったがお前のブルーティーズにはまだこの作戦に必要なパッケージはインストールされてないだろう。いまからやっても作戦に間に合うかわからん。ちなみに東に頼ろうとするなよ」

「さつきも言ったけど篤ちゃん達以外の機体はお断りだからね」

東さんは笑顔でセシリアに向かって言った。笑顔で拒絶されセシリアは怯むも、

「し、しかしそれでもやってみないとわからないではないですか！それに足止めする人は何人いても」

「以前も言ったがオルコット。お前の機体は多対一ではむしろ邪魔だ」

「あ、あれから訓練は重ねました！」

「悪いがお前のその成果を私は知らん。オルコット、今回はお前は待機だ。それ以上何か言うなら命令する」

「~~~~~」

千冬姉から散々言われたセシリアは目に涙を浮かべるも、それ以

上は何も言わずその場に座り込んだ。鈴、シャル、ラウラが複雑な表情を浮かべながら千冬姉とセシリアも見つめている。

しかし千冬姉、さっきからセシリアに厳しい事言ってるけど…なんか違和感を感じる。言ってる事は正しいんだろうけど…なんかからしくないな。

「さらに相手は暴走状態のISだ。そんな相手に足止め出来る技量を持つのはこの場では青崎しかない。青崎、そういうわけだ。さつきも言ったがお前は福音と接触したら交戦。織斑が零落白夜で撃ち込める状況まで持って行け。お前は日本の代表候補生だ。ならこの任務必ず遂行してこい」

あれ？俺の時と違い葵には命令なんだ。しかもあの目、その口調、拒否権は一切認めないと言っている。そんな千冬姉に葵は力強い笑みを浮かべ、

「任せてください織斑先生。必ず一夏と箒を守り任務を遂行させてみせます！」

力強く返事をした。その時の葵の目を見て、俺は少し驚いた。なんて表現したらよくわからないのだが…ただすごく大人びて見えた。葵の顔を見て覚悟を悟った千冬姉は、今度は箒に向かった。

「篠ノ乃、先程から束がお前を作戦に組み込むことを推薦してるがお前自身はどうなのだ。はっきり言うが危険が多い任務だ。嫌なら断っていいぞ」

箒には俺と同様参加の意思を問う千冬姉。…まあさっきからの反応から考るとなあ。箒は葵を見て、次に俺を見ると

「任せてください織斑先生！その任務承ります！」
と返事をした。

「よし！ならばすぐに行動を起こすぞ！束！」

「うんまかせてちーちゃん！篝ちゃんとあーちゃん、すぐに紅椿とスサノオの調整に行くよ。ちーちゃん、すぐそばの砂浜で調整行うからスサノオにつけるパッケージ持つてきてね」

と言つて束さんは葵と篝を連れてこの場から立ち去った。この場を出る際、篝はやる気をみなぎらせながら出ていったが、葵は複雑な顔をしながら千冬姉とセシリアをちらつと見たが特に何も言わなかった。教師陣もそれぞれの任務の為部屋を後にしていき、千冬姉も山田先生に何か指示を出しながら部屋を出ていった。こうしてこの場に残ったのは俺、セシリア、鈴、ラウラ、シャルだけとなった。

「…納得いきませんわ」

セシリアは座り床を見ながら震える声で呟いた。

「セシリア、しょうがないよ。セシリアのパッケージは作戦までにインストール出来るかは織斑先生の言う通りわからないだし」
シャルがセシリアを励まそうとするも、

「ですけど！やってみないとわかりませんのに！それに」

「諦めるセシリア。今回初めから教官はこの作戦は一夏と葵にさせるつもりだったからな。」

不満を言おうとするセシリアに、ラウラが苦汁を滲ませた顔で言った。

「え？ラウラ、それどういう事よ」

「いや正確には教官の意思ではない。おそらく日本政府の意思だろ

う。出来る限り日本の戦力で今回の任務を遂行するよう命じられたんだろ？」

え、どうということだよそれ。

「おそらく日本政府としては今回の件で日本の優位性を高めたいのだろ。今回の事件は機密扱いになるが、それでも各国の上層部は知ることとなる。その任務を日本の機体だけで解決出来れば、各国に対する日本のISの性能の宣伝にもなる。そして教官はこの命令に絶対逆らえない。∴それは」

そこで口をつぐむラウラ。しかし鈴、セシリア、シャルもラウラが何を言おうとしたのか理解しているようだ。∴俺もラウラが何を言おうとしたのかは理解している。

ISの世界大会で、二連覇を確実視されていた千冬姉は誘拐された俺を助けるため第二回モンドグロッソ大会決勝戦を棄権した。そして、そのせいで千冬姉は日本中から非難される事となった。第一回大会の優勝者が何も言わず棄権した為、当時の日本の面子は丸潰れとなった。

……その負い目があるから、千冬姉は今回政府の命令に従うしかないのか。

「ラウラさん、言いたい事はわかります。わたくしだってラウラさんに言われなくても、薄々わかっただけはいました。ただわたくしは」

「一夏と箒と葵が心配だから、でしょセシリア」

笑みを浮かべ言うシャル。シャルの言葉を聞き、セシリアの顔は赤くなった。

「一夏と箒はISに乗ってまだ三カ月で、箒に至っては今日初めて専用機を与えられてまだ試運転程度しか操縦していない。葵は代表

候補生でISの腕は申し分ないけど、それでも専用機を今日初めて乗っている。不安に思っているのはわかるよ」

「そしてセシリア、あんたことも思ってるんでしょ。平民を守るのも貴族としての自分の務めだとかなんとか。軍人として訓練された葵はともかく、一夏と箒には危ない任務は私がやりますみたいないま、この作戦一夏がいなければ成立しないから一夏はしょうがないけど」

シャルと鈴の台詞を聞き、さらに顔を赤くするセシリア。「うっ」と言いながら指で床をなぞっている。

「セシリア、気持ちはわかるがここは一夏と箒と葵を信じようではないか。セシリア、それにこう言ってはなんだが一夏も葵も箒もお前が思ってる程弱くないぞ。特に葵は」

そこは俺の名前も言っただけだったが、ラウラの言う通りだ。

「大丈夫だセシリア。俺も葵も箒も無事に任務を達成して戻るから心配するな」

俺はセシリアにそう言うと、セシリアも納得したのか笑みを浮かべた

「そうですね、なら一夏さん今回の作戦ですが」

「あ、そうそう一夏あんた高速戦闘がどんなものか知らないわよね。簡単だけ教えてあげるわ」

「ちょっと鈴さん！それはわたくしが」

「一夏、高速戦闘だと周りの風景が」

「ブースト残量にも気を付ける。いつもの調子で」

「シャルロットさんにラウラさんまで！その役目はわたくしですのにっ！」

とまあ、葵と篝の調整が終わるまで、俺はセシリア達から高速戦闘の説明を受ける事にした

時刻は午前11時、作戦時刻となった。紅椿もスサノオも調整とパッケージインストールが完了し、今三人で千冬姉の出撃命令を待っている。

「もうすぐね。一夏、篝、緊張している？」

「大丈夫だ葵、私は問題無い」

「俺もだ。そういう葵は？」

「私は大丈夫」

と言つてにっこ笑う葵。まあ葵にはああいったが、俺は少し緊張している。やっぱり今までと違いこれは実戦なんだ。今までと違い楽観視することはできない。

「一夏、一夏。聞こえるか？」

少し物思いに耽っていたら、葵がプライベートチャネルで俺に話しかけてきた。ん？なんでわざわざこれで？直接言えばいいのに。

「ああそついや一夏はこれ苦手だったか。ならいいや、返事はいい。俺の話の聞くだけでいい。篝の事だ」

「なんとというか、箒の奴少し浮かれている。専用機を持たされ、多分重要な作戦を任されて嬉しいのだろうけど…あまりいい傾向じゃない。何かあった時は一夏、サポートを頼む。俺は福音相手にそんな余裕はないだろうから」

葵の言葉は、会議の時から俺が思っていた事だった。確かに今の箒は少し浮かれている。

なら…何かあった時は俺がちゃんとサポートしないと。しかし葵、プライベートチャネルとはいえ、最近じゃ自室以外では二人きりでも女口調だったのに口調が男だったってことは…葵も実は緊張しているのか？

そしてその後少し時間が経った後、

「では、はじめ！」

千冬姉の号令とともに、作戦は開始された。

臨海学校（二日目） 出撃準備（後書き）

まあ、今後の展開はかなり予想されやすいでしょうね。

臨海学校（二日目 敗戦）（前書き）

三人称に挑戦してみました。

一人称と違いなんか書きづらいですね。未熟だなあとと思います。

臨海学校（二日目 敗戦）

千冬の開始の合図と共に、一夏を背に乗せ展開装甲された紅椿と、強襲用高機動パッケージ飛燕をインストールされたスサノオは飛び立った。一気に目標到達高度まで上昇した紅椿とスサノオは、千冬から送られてくる情報を照合し、目標の現在位置を確認。目標ISに向かい再び飛翔して行った。

（…なんてスピードだ。常時瞬時移動並だろこれ）

紅椿の背に乗りながら、一夏は紅椿の性能に驚いていた。横に目をやると増設されたスラスターを噴射しながらスサノオが紅椿と並びながら飛んでいる。しかしスサノオは単騎で飛んでいるのに、紅椿は白式という荷物を運んでいるのにも関わらず同等かもしくはそれ以上の速度で飛んでいる。その事実に一夏はただ束の技術力に関心した。

（さすが紅椿、束さんが作った機体。スサノオよりも遥かに性能が高い）

紅椿の横で並んでいる葵も、一夏同様にその規格外な性能に感心していた。自身の乗っているスサノオも最高の機体だとは認識しているが、さすがにISの生みの親である束が作ったISはそれ以上であった。確かにこれなら束が作戦に加える事を勧めるのも納得できると葵は思った。しかし、

（…いや大丈夫だろう）

一抹の気がかりが葵の頭によぎるが、葵は気にしない事にして飛行に集中することにした。そしてその直後、

「見えたぞ、一夏、葵！あれが目標だ」
とハイパーセンサーで目標を確認した箒の叫びが響いた。

目標のIS銀の福音は、頭部から足先まで全て装甲で覆われていて、その名の通り全身が銀色となっており、頭部から一対の巨大な翼が生えている。この翼が福音の推進力を司るスラスタでもあり、砲撃を行う場所でもある。福音はデータ通り超音速飛行で移動しており、真っ直ぐ一夏達に向かって飛んできている。

（さうて、どう対処しようかな。とりあえず俺が突撃して）
と葵が思索していると、いきなり福音は平行に飛んでいたのを方向転換し上昇し始めた。

「な、何だ一体！」

「気付かれたのか!？」

箒と一夏は急な福音の行動に驚き、そしてその直後

「敵機確認。警戒レベルCと判断、迎撃モードに移行します」
オープンチャンネルから響く福音からの機械的な音声を聞き、顔を強張らせる。一夏達よりも高い高度に移動した福音は頭部に生えている翼を広げ、それを見た葵は叫んだ。

「来る！一夏、箒、気を付けて！」

その直後、福音は広げた翼から無数の光弾を発射させ、一夏達に攻撃を開始した。全方位にわたる福音からの光弾は雨のように降りそそぎ、一夏達に襲いかかった。それを一夏、箒、葵は散開してそれぞれ攻撃をかわしていく。葵はなんとか全弾回避できたが、一夏と箒はかわしきれず2、3発着弾。光弾は触れた直後に爆発した。

しかしまだ2機とも深刻なダメージにはなっておらず、それを確認した葵は安堵した。

「物凄い数の光弾だったわね、なかなかやつかいな機体ね福音は」

「のんきな事言っていないでどうするのだ葵。あの光弾の雨ではうかつには近寄る事も出来ないぞ」

「どうするもなにも、作戦に変更は無し。私がこれから福音と戦って動き止めて、一夏が零落白夜で止めを刺す」

「しかし葵、一人で大丈夫なのか？俺も」

「駄目。一夏も戦って肝心な時に零落白夜が使えなくなったら目も当てられない。それと箒も一夏と一緒に待機。エネルギーも少ないんだから無理せず防御に集中しときなさい」

「だが」

箒はそれでも一緒に戦おうとするが、

「いいから二人とも、幼馴染の私を信じなさい」

と葵は笑顔で一夏と箒に言って、一夏と箒を残し福音に向かって行った。

「敵機A、接近。警戒レベルBと判断。目標を迎撃します」

福音はこちらに向かってくるスサノオを確認すると、再び翼を広げる。翼に備え付けられている36の砲門を全てスサノオに照準を合わせ、発射。しかし

「はあー！ー！」

雄叫びを上げながら葵は向かってくる光弾を紙一重でかわしていく。そしてかわしながらも天叢雲剣を振るい、弧を描くレーザーを福音に浴びせていく。しかし福音は難なくかわしまた翼から光弾を発射。葵もそれをさけ、合間にまた剣を振るいレーザーを浴びせる。両者互いに交互にかわしながらも遠距離で攻撃する展開がしばらく続く事となった。攻撃回数では圧倒的に葵は福音に負けているが、光弾をかわしながら葵は勝利を確信した。

（いける！確かにあの翼から降り注ぐ光弾の数はやつかいだが、それでもセシリア達みたいに正確な射撃精度を持っていない。それにスサノオの機体にも慣れたし）

一夏との戦闘だけではまだスサノオの機体を完全に把握できていなかったが、福音と交戦している間に葵はスサノオの機体を完全に乗りこなすようになった。そして現在エネルギー節約の為、福音の攻撃を牽制するために天叢雲剣で攻撃するのを止め、完全に回避に集中するようになっていく。しかし、じわりじわりと葵は福音との距離を光弾をかわしながらつめていつていく。

（後少しで瞬時加速で間合いを一気につめれる）

福音を見つめ、葵はその後どう一夏まで繋げようか思索しながら回避を続けていく。

しかし、一夏と篝の二人が今の自分を見てどう思っているかまでは考えてはいなかった。

「葵の奴任せなさいとか言っていたが…防戦一方じゃないか！」

「しかも先程から天叢雲剣を振るってもいない。完全に押されている。このままでは不味い！」

福音の攻撃パターンを理解し、少しでもエネルギーを温存するため回避に専念した葵を、二人は押されていると勘違いしてしまった。これが待機を命じられている代表候補生たちなら、よく観察すれば葵が少しずつ福音に近づいていっている事に気付いただろう。しかし初めての实战で葵を心配している二人にはそこまで気付く事が出来なかった。

今二人には、福音の攻撃から逃げ回っている葵としか写っていない。しかし

（あいつが言ったんだ、私を信じなさいって。なら）

焦燥に駆られながらも、一夏は葵の戦いを見つめていった。

(あと少し)

福音の攻撃をかわしながら、葵は瞬時移動を行うタイミングを図っていた。もはや瞬時移動すれば懐まで行ける間合いまで葵は福音との距離を詰めており、そろそろ勝負を決めないといけないと思っている。

(予想より回避に時間掛け過ぎたし、そろそろ決めないと)

そう思っていた時、福音の砲門が全て撃ち尽くし、再度照準を合わせようとした瞬間、

「ここだ！」

瞬時加速を行い、一気に葵は福音との距離を詰めていった。福音は葵の瞬時加速に対応できずにいる。そのまま福音の正面に現れた葵は両手で握っている天叢雲剣の刀身にエネルギーをコーティング。

(まずは機動力を奪う！)

光輝く天叢雲剣を手に、狙いは福音の頭部から生えている右側の翼。これを落とせば福音の機動力は大幅に減退できる為、まずは片側を両断せんと剣を振りおろそうとした。しかし

「え？」

振りおろそうとした葵に、横から赤いレーザー群が福音とスサノオを攻撃していった。予想外の攻撃に回避出来ず直撃。衝撃で吹き飛ばす葵がレーザーが来た方角を見ると、そこには愕然とした表情を浮かべた筈と一夏がいた。

(このままでは危ない！)

葵が瞬時加速を行う前、箒は苦戦している(と箒は思っている)
葵に加勢しようと、福音に向かって突撃していった。

「箒！待て！勝手に動くな！」

後ろから一夏が箒に向かって制止の声を掛けるも、箒は無視した。

「ああ、くそ！」

すぐさま一夏も箒の後を追った。しかし展開装甲で出力が上がっている紅椿には到底追いつくことが出来ない。さらに出力を上げて追いかける一夏だが、その前に箒は行動を起こした。箒は腕部展開装甲を開き、さらに両手に持つ空割と両月を牽制の為振るい攻撃。両月からは無数のレーザーの弾丸が、空割からでるレーザーの斬撃が発射される。さらにそれを補うように展開された腕部からもエネルギー刃が自動で発射され、福音に迫る。しかし、

「な！」

紅椿の攻撃が福音に届く瞬間、福音の前に瞬時加速を行った葵が現れた。そして、箒の攻撃は福音と　　スサノオに着弾した。箒は自分の攻撃を受け吹き飛んでいく葵を愕然とした顔で凝視する。

「葵！」

一夏の叫びがオープンチャンネルを通し箒にも聞えるが、箒は葵を攻撃してしまったという事実混乱し、激しく動揺していた。茫然と佇んでいる箒に、葵よりも早く体勢を整えた福音は、自分を攻撃した機体を脅威と判断した。

「敵機B、確認。警戒レベルBと判断。目標を迎撃します」

オープンチャンネルから流れてくる福音の声を聞き、嫌な予感をする一夏。そしてその予感通り、葵を攻撃してしまつた事に動揺している筈に、福音は恐るべき速度で筈に接近しその速度のまま強力な蹴りを筈に叩きこんだ。

「がはっ！」

未だ動揺していた筈はそれを回避できず、後方へ吹き飛ばされていく。そして吹き飛んでいく筈に福音は全ての砲門を合わせ、一斉射撃を行った。

(何かあつた時は一夏、サポートを頼む)

出撃前に葵から言われた事を思い出した一夏は、瞬時加速と零落白夜、その二つを最大出力で行い筈にまで到達。筈を担ぎ、また瞬時加速を行い高速離脱。そのすぐ後に福音の光弾は降り注いでいった。離脱する二人にさらに攻撃しようとした福音だが、

「お前の相手は私でしょうが！」

遅れて体勢を立て直した葵が一夏達に気を取られている福音の背後に現れ、福音は背中から最大稼働で刀身にエネルギーが込められた天叢雲剣の一撃を受け、爆音と衝撃と共に吹き飛んで行った。それを見届けた葵は、オープンチャンネルで一夏と筈に向かって叫んだ。

「一夏、筈！残りシールドエネルギーは後どれほど残っている！」

葵の尋常で無い叫びを聞き、慌てて確認をする一夏と筈だがそこに出されている数値を見て絶句。筈は福音に対して行った攻撃と福音の強烈な蹴りのせいで、一夏は先程筈を助ける為に使つた零落白夜と瞬時加速のせいでもう二人ともエネルギー切れ寸前とまでになつていた。二人の顔を見ただけで現状を把握した葵は、

「作戦は失敗！私が時間稼ぐから一夏と箒はすぐにでもこの場から離脱！」

二人に撤退命令を出した。

「で、でも葵！一人じゃ」

「頼むから行って！でないと」

渋る一夏に葵が何か叫ぼうとしたが、それよりも早く葵の一撃から復活した福音がこちらに向かって近づいて来た。

「ちっ！もう来た！」

葵は天叢雲剣を構え、福音に向かって行った。しかし葵の頭の中は焦燥で埋め尽くされていた。

（ヤバイヤバイヤバイ！これはヤバイマジで！さっきの二人の表情からもうエネルギーは無いのは明白。そしてこっちもさっきの箒の一撃。瞬時加速が終えた頃とはいえあの加速時に攻撃受けてしまったせいでアーマーブレイク寸前までいつてしまった。こっちもかなり残りエネルギーが少ない！）

もはや福音と戦闘できる状態では無くなってるが、それでも一夏と箒が逃げるまでは福音を引き留めようと葵は決意した。しかし福音はそんな彼女の決意をあざ笑うかのように、高速飛行のまま葵に近づいて来たのを急旋回し、一夏と箒に向かって飛んで行った。

「な！まさか先に二人を！」

葵の叫びを肯定するかのように、福音は高速移動しながら一夏達に光弾を浴びせていった。慌てて回避する二人だがかわし切れず互いに数発着弾する。その瞬間二人のエネルギーは空となった。

その二人を見据え福音は上空にて停止。そして翼を広げ、一夏達

に照準を合わせた。葵を倒すよりも先に、この二機を撃墜させようと福音は判断したのだ。

一夏と箒も福音がこちらを狙っている事に気付いたが、エネルギーが残っていない白式と紅椿は動いてくれない。鈍重な動きしかなかった二機に対し、福音は翼を展開、一斉射撃を行った。

「くそー！ー！ー！」

降り注ぐ光弾を目にしながら、一夏は死を覚悟した。しかしその目の前に、

「一夏！箒！」

瞬時加速を行って、寸での所で葵は福音の光弾と一夏達がいる間に到達した。そして光弾がこちらに来る前に葵は天叢雲剣の残りエネルギー全てを刀身に込めて福音に向かって投擲。その後は一夏達を守るように抱きしめた。その直後、福音の攻撃と葵が投擲した天叢雲剣は同時に互いに着弾。大爆発が起きた。

「~~~~~！」

もはやここに来るために全てのエネルギーを使ってしまったスサノオに、容赦なく光弾は振り注いでいった。シールドエネルギーで相殺できなくなった衝撃が、容赦なく葵に命中。装甲は砕け、髪は焼かれ皮膚も筋肉も炎に包まれ抉られても、葵は一夏と箒を放さず庇い続けた。

「「葵！葵！」」

一夏と箒が叫び続けるが、葵は激痛に苛まれながらも二人が無事なのを確認すると

「言ったでしょ。二人は守るって」

とにっと笑った。そして爆発と共に三機は海に墜落した。

葵が投げた天叢雲剣は正確に福音の顔に当たり、その後刀身に込められていたエネルギーがそのまま解放され爆発した。しかしそれだけでは福音に対してさしたるダメージにはならなかったが、光弾を止める事には成功していた。反撃を受け攻撃を止めた福音だが、目標が三機とも海に落ちた事を確認すると、展開した翼をたたんだ。

「敵機 A、B 及び C の撃墜を確認。警戒を解除」
そして福音は再びどこかへと飛んで行った。

一夏達が福音に撃墜されてすぐに、千冬は救助船を大至急向かわせた。しかしその前に

「わたくしが先にいきます！」
とセシリアが飛び立った。セシリアはあの後も何かあった時はと
思い、強襲用機動パッケージ『ストライク・ガンナー』を千冬に黙
ってインストール作業を行っていた。必要は無いと思っていたが、
万が一を思い整備に精通しているクラスメイトに頼んでやってもら
ったのだ。

（まさか本音さんが整備に詳しいとは予想外でしたが…、やってよかったですわ！一夏さん！葵さん！篝さん！今行きますわ！）

セシリアは最大加速で一夏達が墜落した場所に飛んでいき、そして海面に浮いている一夏達を発見。すぐさま急行し、近くに降り立った。そしてそこでセシリアが見たのは、

「葵！葵！頼むから目を開けてくれ！葵！」

と泣き叫ぶ一夏と篝だった。そして二人が抱えている葵を見て、セシリアは絶句した。

何故なら二人が抱えてる葵の周りの海面が血で真っ赤になっており、髪も半分以上焼けただれて真っ白になった表情は、どう見ても死んでいるようにしか見えなかったからだ。

錯乱状態の二人と葵を強引にセシリアは回収し、救助船まで大至急運び医師に葵を預けた。医師は葵の容体を見て顔を強張らせるが、急いで治療を開始した。このときまだ錯乱し取り乱していた一夏と篝を、別の医師達が薬を嗅がせ眠らせた。

「辛いでしょうが…今はもう眠っていて下さい」

こうして一夏、葵、篝の初めての实战は最悪な結果のまま終わった。

臨海学校（二日目 敗戦）（後書き）

なんか芸が無いですが、葵が二人を庇って重傷を負いました。
次で一夏達の福音退治が始まります。

…しかしあれですね。本当に葵はろくな目にあってないな

臨海学校（二日目）再戦（前書き）

何でシリアス書いてるんだろ？
後今回はいつもより多いです。

臨海学校（二日目 再戦）

目を覚ますと、俺は旅館の一室で寝かされていた。

多少記憶が混乱したが誰かに眠らされたのは覚えている。時計を見たらすでに午後三時を指していた。そしてあの時の出来事を思い出すと、

俺は急いでベッドから飛び降り部屋から出た。何が何でも、確かめなければならぬ事がある。俺を見かけた旅館の従業員さんやクラスメイトの声を無視し、俺は全力疾走で作戦を話し合った大広間まで向かった。走りながら俺の心に占める思いはただ一つ、

葵が今どうなっているか、それだけだった。

大広間の扉を乱暴に開け、中に入ると千冬姉と山田先生がいた。千冬姉は険しい顔で空中ディスプレイに映されている画面を眺め、山田先生も同様に画面を眺めながら携帯端末を動かしている。扉を開ける音に反応した二人は俺の方を向き、山田先生が

「お、織斑君！気が付いたんですね！よかったです！」

と笑みを浮かべて近づいてきたが、俺はその山田先生の肩を乱暴に掴んだ。

「きゃっ！ちよっ、ちよっ」と織斑君

「葵は！葵の容体はどうなんですか！教えてください！」

肩を掴まれて顔を赤くしながら抗議しようとした山田先生に、俺は声を荒げ詰め寄った。落ち着けるわけがない。葵の怪我、あれを見せつけられて樂觀視出来るわけがない！

脳裏に刻まれたあの光景が思い出されていく。

俺と篤を抱き、福音の攻撃を一身に浴びた葵。墜落後海に沈んでいく葵を死に物狂いで抱き寄せ、海上に浮かんだ時見た葵の怪我。腕に脚に、特に背中への傷は凄まじく焼けただれた皮膚に抉られた筋肉。背中を半分隠す位伸ばしていた髪も、焼けただれて見るも無残な状態になっていた。顔だけは損傷がなかったが、あの真っ白な顔で力無く眠っている姿はどう見てももう…

「落ち着いてください織斑君！青崎さんですが…なんとか一命を取り留めています」

「ほ、本当ですか！」

「はい、本当です」

山田先生から葵は生きてると聞いた瞬間、俺は安堵して大きな溜息をついた。

「よかった、本当によかった」

最悪な事態が杞憂で終わって安堵する俺だが、

「しかし、まだ安心できんがな」

ディスプレイを見ていた千冬姉が、振りかえり俺を見ながら言った。

「え、千冬姉！それはどういうことだよ！」

「普通なら確実に死んでいた程の傷だ。しかしスサノオの操縦者絶対防御のおかげで青崎はかろうじて命を繋ぎ止められている。だがこれはISのエネルギーを全て操縦者に送り続ける事で成り立っており、スサノオの損傷率は普通なら廃棄される程だった。スサノオ

が完全に機能停止したらその時青崎は死ぬ。そのため…今は束が全力でスサノオの修復を行っている。スサノオの修理が進めば進むほど、ISから受けられる加護は強くなるからな」

「…それにスサノオが完全に回復しない限り青崎さんの意識も戻らないままですからね。その点で言えば今の状況はかろうじて無事と言える所です」

な、なんだよそれ。で、でも

「でも束さんが修理してるんですよ。それなら大船に乗ったつもりで安心できます。しかも束さんは葵の風邪も一瞬にして治すくらい天才ですし、なら葵もすぐに」

「半年」

楽観的な意見を言おうとする俺に、千冬姉はそう俺に言った。

「半年、これが何を意味するかわかるか織斑」

また真剣な顔で俺に言う千冬姉。いや…半年、何の事だよ。

「…青崎が全ての面で完全復帰するまでかかる時間だ。束が青崎の怪我を見てそう判断した。…しかもそれは束が所有する医療用ナノマシンをフル活用しての治療時間だ。一般の医者達は葵の怪我見ただけでIS乗りへの復帰は諦めていた」

険しい顔をして俺に言う千冬姉。それを聞いて、目の前が真っ暗になったかと思った。足に力が入らず、そのまま床に崩れ落ちた。両手に手を付けながら、葵の事で頭がぐるぐる回っていく。束さんの協力があっても半年…。あいつは三月にも大怪我して先月ようやく復帰したばかりだろ。なのに、また…

(言ったでしょ、二人は守るって)

葵が俺と筈に言った言葉が脳裏に蘇る。あの時身を呈して俺と筈

を守った葵。作戦前から俺と箒を守ると言った葵は、その言葉通り俺達を守ってくれた。自身を犠牲にして。

誰かを守りたい。誰かの為に戦いたい。そう決意してたはずなのに。

実際は俺が守られてばかりだ。

「…すまないが織斑、話はここまでだ。私達は逃げた福音をどうにかしなければならぬ。お前は別室で指示があるまで待機している」
そういつてまた千冬姉は視線を空中ディスプレイに戻した。そして後ろを向いたまま、

「…やることがないのならこの部屋から出て右に曲がった通路の一番奥の部屋にでも行くといい。そこに青崎がいる」

とどこか力無い声で言った。それを聞いた俺は夢遊病者のように力無く立ち上がると、千冬姉が言った場所に向かうことにした。現在の葵がどうなっているか、ちゃんと確かめるために。そしてただ、会いたい。そして会って、

何を言えればいいんだろうか…

そして千冬姉が言った部屋に着いて中に入ってみたら、…そこには包帯を巻かれ体の至る所にチューブを繋がれてベッドで寝ている葵と、そのベッドの横で椅子に座りながら項垂れている箒がいた。

私のせいだ

目の前にいる葵を見ながら、私の心はそれしか思い浮かばない。私が勝手な行動をしたせいで、葵が…これほどの重傷を負ってしまった。それはもう歴然とした事実だ。私が…一夏と葵の足を引っぱってしまった。

一夏と一緒に戦いたい。葵達に追い付きたい。

この思いの為に、私は姉さんに電話してまで専用機が欲しいと願った。そして姉さんは専用機紅椿を私にくれた。そしてその紅椿の性能は素晴らしく、その性能を…私は自分の実力だと勘違いしてしまった。

これならもうセシリア達にも対抗できる、一夏と一緒に戦える。私はそう思い舞い上がっていた。姉さんの推薦もあったが、一夏が参加する作戦に私も参加できると知った時、無人機襲来の時に感じたあの時の悔しさ、それを思うと一夏と一緒に戦える事が本当に嬉しかった

しかし私の役目は一夏を運ぶだけで、実質一夏と一緒に戦うのは葵だけというのは少し不満を持った。確かに織斑先生達の言うことももっともだが、今の私なら問題無くこなせると思っていた。

…だが実際はどうだ。葵が危ないと思いつつ援護したつもりが、それは葵の戦闘の邪魔でしかなかった。葵達に追い付いたと思っていたらそれは私の勘違いなだけで、全然追い付いていなかった。

数時間前の私を殺したくなるほど後悔していると、部屋の扉が開く音が聞えた。顔を扉に向けると、…私同様暗い顔をした一夏が部屋に入ってきた。

「…一夏か」

意気消沈した顔をしながら、弱々しい声で箒は俺に顔を向けた。赤く泣き腫らした目をしていて、…俺同様、いやそれ以上に箒は自分を責めているんだらう。

俺は無言で箒の横に椅子を置き、そこに座り葵の怪我を見る。全身に巻かれた包帯が痛々しい。顔だけは奇跡的に怪我は無く、そこだけ見れば寝ているように見える。福音の攻撃によつて髪が焼かれ、今では首までしか無い。しかしその長さは葵が中学までの…男だった時と同じ長さだった為、今の葵は本当に顔だけ見たら昔と変わらない。いつも俺に対し笑みを浮かべたり怒ったりした顔は、…今はただ眠った顔しか見せてくれない。

凄惨な葵の姿。それを見て、俺の心は悲しいという感情よりも、ある感情の方が勝つていった

不思議なもんだ。

ここに来るまでは葵に会って、どうする？葵に対し何て言えばいいんだと思っていた。だが今の葵を見て、葵が目を覚ました時の事を考えると、葵に言いたい事、言わなければいけない事がすぐに出てきてしまった。

そして…俺がどうしてもやりたい事が出来てしまった。これはもう、止める事が出来ないどうしてもやりたい事が。

「何も言わないんだな一夏」

俺が葵を眺めながら思案していたら、ずっと黙っていた筈が不意に俺の方を向いて言った。

「私のせいで葵はこんな事になってしまったのだぞ。私が勝手な行動をして、そのせいで葵がこんな目に。一夏、横にいながらどうして私を責めない」

半泣きの表情で俺を見て訴える筈。その目は自分を責めてくれと言っている。確かに今回の件は筈に責任があるかもしれない。でもな、

「筈だけ非があるわけじゃないだろ。非なら俺も…葵にもある」

今回の件、筈は全て自分が悪いと思ってるだろうが…それは違うんだ。

「はあ？何を言ってるんだ一夏！…下手な慰めならやめてくれ！」

俺の言葉を聞き、声を荒げる筈。泣き腫らしたはずの目からまた涙を零しながら俺に向かって叫んでいく。

「悪いのは全て私だ！紅椿を与えられ、その性能を自分の実力だと勘違いした。己を過信しすぎた。そして私は葵を信じず、危険だと勘違いして福音を攻撃してしまっただけで葵はそれに巻き込まれてしまいシールドエネルギーを大幅に無くさせてしまった！そして葵の言う通りエネルギーが少ないのに攻撃してしまって、さらに福音からの攻撃を受け私のエネルギーも無くなった。一夏はそんな私を助けるために、私のせいでエネルギーを使い果たしてしまった！そして…」

胸の内を吐き出すように嗚咽交じりで俺に言う筈。作戦終了後、目を覚まし葵の病室ですっと己を責め続けていたんだろう。しかし

責めるべき葵は眠ったままで、謝りたいのに謝れなくて…。それで俺に葵の代わりに責めて欲しいと思ってるんだろ。

「何故二人とも私なんかを。私なぞ助けなければよかったんだ。私なんかを助けるから」

「箒！」

俺が急に大声を出したせいで、箒はビクッと体を震わした。しかし箒、それだけは言わせない。

「それ以上言うな。葵が本気で怒るとしたら、それだ」

そして俺も怒っている。箒の気持ちはわかる。でも箒、…それだけは許せない。

「箒、お前の様子が少しおかしかったのは作戦前から俺と葵もわかってた。その理由も、大体俺達は察しが付いていた。紅椿を与えられ、その性能に浮かれてるんだとな」

箒が驚愕の顔で俺と葵を交互に見詰める。まったく、気付かないわけがないだろ。

「でも俺も葵も黙っていた。専用機持つて嬉しいのは仕方ないし、箒は俺を運ぶだけだから危険は無いだろうと思っただけだからだ。でも万が一を思って葵は俺に言ったんだよ。もしものことがあったら、箒を頼むとな」

「葵が…」

「言われなくともやるけどな。だから箒、今回の件はお前の異変に気付きなからもちゃんとお前に言わなかった俺も葵も悪い。自分を責めるなどは言わないが、それを頭に入れておいてくれ。そして箒、

さつき何故責めないとか言ってたが…結果はどうあれ、葵は絶対算
を責めないだろうよ」

「どうして…」

「それは目を覚ました葵に確かめてみるよ。俺からはもう何も言う
事は無いぞ。反省ならもう算、充分やってるからな」

そう言っただけ俺は立ち上がった。やりたい事はもう決まっている。
なら、もう行動に移すまでだ。そして部屋から出ようとすると扉が
開き

「一夏、算いるんでしょ。こっちに来なさい」

鈴が廊下から俺達を手招きした。

「ラウラ、福音の位置はもう特定出来たのよね？」

「ああ、衛星が奴の居場所を掴んだ。ここから南西から30km離
れた空域を漂っている」

「居場所がわかりましたならこちらのものですわ。友達を傷つけて
くれたお礼を返してさしあげませんと。ええ、倍にして返さなけれ
ばいけませんわね」

「…一夏と箒大丈夫かなあ。立ち直っているといいんだけど」

「…あの二人が未だに落ち込んでるようなら私が殴って目を覚まさせてあげるわよ。専用機持ちの責任ってやつをわからせるために、そして何よりも
友達を傷つけたあの機体と今戦わず何時戦うのよってね！」

鈴、ラウラ、セシリア、シャルロットは一夏達の作戦失敗後は千冬から別室で待機命令を出されていた。しかしおとなしく待機するわけもなく、各自ISの調整を行い福音と戦う準備を進めていた。そして一夏も箒も目を覚まし、福音の居場所もラウラのドイツ軍が特定した為、千冬の許可も無く福音退治に向け行動を開始した。四人は葵の病室に到着し、

「一夏、箒いるんでしょ。こっちに来なさい」

と鈴が部屋にいる二人を部屋の外に連れ出した。その時部屋を出る一夏を見て少し鈴は驚いた。

(箒はまだ落ち込んでますって感じだけど…一夏はそうじゃない)
鈴は箒以上に一夏が落ち込んでると思っていた。しかし今の一夏はそんな様子は見られない。箒の目は半分死んでいるが、一夏の目は違う。強固な意志を持った目をしている。

「鈴にラウラにシャルにセシリア。ちょうどいい。俺も皆に言いたい事があったんだ」

四人を見渡して言う一夏。四人は一夏を見つめ、笑みを浮かべた。

「あゝあ、一夏に関しては何の心配も無かったわね」

「さすが嫁だ、やるべき事をわかっている」

「さすがですわ一夏さん」

「おいおい、俺はまだ何も言っていないぜ」

「じゃあ一夏、何を言いたいのかな」

「ああ、俺は今度こそ福音を倒す。絶対にだ！何が何でも負けられない！でも俺だけの力じゃ無理だ。だから…みんな俺に力を貸してくれ」

そう言つて一夏は四人に向かって頭を下げた。それを見た四人は、笑みを浮かべながら

「そんなの貸すに決まってるでしょ」

「わたくし達は最初からそのつもりでしたもの」

「居場所はもう特定している。こちらはすぐにでも出発できるぞ」

「今度こそ勝とうね、だから一夏もう頭上げなよ」
と一夏に協力することを約束した。

「ありがとな、みんな」

「当たり前前の事を言ってるまでよ。で、箒。あんたはどうなの？居場所はわかった。一夏もあだし達もみんな戦う。あんたには専用機があつて戦う術もある」

「わ、わたしは…」

「あんたはどうなの？戦うべき時戦う者なの？それとも…友達が傷

つけられたのにも関わらず戦わない臆病者なわけ」

鈴の言葉を聞き、箒の胸に火が灯っていく。戦う事を選んだ一夏、鈴達。そして…葵を傷つけた福音を思い出し、決意した。

「私も戦う！今度は必ず勝つ！」

箒の言葉を聞き、箒の決意を見た一夏達は満足げに互いに頷きあった。

「よし、じゃあ作戦会議を開こうぜ。葵が目を覚ましたら全てが終わってるようにするために！」

目標のIS、銀の福音は南西の海上をふらふらと移動していた。一夏達と接触する前は一直線にどこかに向かっていて、接触後はどこか当てもなく彷徨い続けている。その姿は親に見捨てられた迷子のようにも見える。しかしそんな福音に

長距離から飛来した弾丸が頭部に着弾し、大爆発を起こした。

すぐさま体勢を立て直し、先程来た狙撃がどこから来たものか確認。すると3km程先に大型ライフルを構えたラウラに姿があった。続けて福音に対し狙撃を行うとするラウラだが、

「敵機A確認。警戒レベルBと判断。目標を迎撃します」

とオープンチャネルから音声が流れたと思ったら、福音は恐るべき速さでラウラに向かっていった。距離がどんどん縮んでいく。ラ

ウラも福音に対し攻撃を行っているが、福音の光弾に相殺されていた。そして距離を詰めた福音がラウラに翼を広げ一斉射撃を行おうとした瞬間、

「させませんわ!」

強襲用機動パツケージを使い猛スピードでセシリアは福音に向かっていった。ビットはスラスターとして使用しているので、手に持っているレーザーライフルで砲撃を浴びせていく。しかし福音は難なくセシリアの砲撃を回避すると、光弾をセシリアに浴びせようと翼を展開。しかし

バアン!

ラウラからまたもや狙撃を喰らい背中に着弾する。体勢を崩した福音にセシリアが急接近する。光弾で迎撃するのを諦めた福音は、セシリアに体当たりをしようとする。が、

「はあー!」

その瞬間セシリアの背に乗っていた鈴が、双天牙月を両手に構え福音に向かって渾身の力を持って振りおろした。凄まじい衝撃と共に海に落下していく福音。しかし海に落ちる寸前でスラスターを噴出し持ち直した福音は、追い撃ちで衝撃砲を浴びせてくる鈴とレーザーの砲撃を行ってくるセシリアから逃げようと後退。しかし、

「逃がさないよ」

ラウラとはまた別に地点で待機していたシャルロットが、福音に対し狙撃を開始。頭部に腹部に着弾し爆発が起きる。動きが止まった福音に、ラウラの狙撃が、セシリアのレーザーが、鈴の衝撃砲が襲いかかる。多方向からの攻撃に福音も対処が出来ず、じわじわと消耗していく。しかし

「敵機B、C及びDを確認。警戒レベルBと判断。迎撃を開始します」

オーブンチャネルから流れてくる声を鈴、セシリア、シャルロットは聞いた。そしてそのすぐ後、

攻撃にさらされながらも福音は翼を展開。まずは近くにいたセシリアと鈴に対して砲撃を行った。

「来ましたわよ鈴さん！」

「避けるわよセシリア！」

慌てて回避に移るセシリアと鈴。しかし二人の予想を上回る光弾の雨が二人を襲った。大部分は回避出来たが全ては避けきれず、二人とも数発着弾。爆発の衝撃で吹き飛ぶ二人に福音は恐るべき速さで近づくとまずはセシリアの腹部に蹴りを放った。

「きゃ！」

後方へ吹き飛ぶセシリア。慌てて鈴は衝撃砲を福音に浴びせるも、福音はすぐに後退。そして後退しながらも翼から全方向に光弾を撃ちだして鈴に、ラウラに、シャルロットに光弾を浴びせていく。しかし、

「そんな分散した攻撃じゃあたし達には当たらないわよ！」

光弾を避けながら鈴は衝撃砲で攻撃していく。シャルロットとラウラも避けきれない物はシールドを展開して防いでいく。蹴りのシヨックから立ち直ったセシリアも、鈴と共にレーザーライフルで福音を攻撃し追い詰めていく。

「…優先順位の変更。当該空域からの離脱を最優先」

オープンチャネルから音声が聞えると共に、福音はまた全方位に光弾を浴びせ牽制。その隙に一番手薄な場所から強行突破を開始した。それを見届けたセシリア、鈴、シャルロット、ラウラは笑みを浮かべた。そして福音が強行突破した方向から真っ直ぐに展開装甲された紅椿が襲いかかった。

「逃がさん！」

その言葉と共に紅椿から大量のレーザー群が福音に急襲。レーザーの攻撃を受け福音は後ろに吹き飛んでいく。そしてその後ろから、

「はい、いらっしやい」

と鈴とセシリアが福音の両手を拘束。福音の動きを止める。篝も福音に抱き付き、さらに身動きを止める。無論福音も黙っておらず自分もろとも至近距離で砲撃を浴びせようと翼を展開。しかしその前に、

「一夏！頼む！」

「おおおおおお！」

上空にステルスモードでずっと待機していた一夏が、零落白夜を展開して福音に斬りかかった。

「のあ d n v s n m v ; s d d l j s p」

零落白夜の一撃を頭部から受け、絶叫を上げる福音。すぐに篝は福音から離れ、腹部にまた一撃を与える一夏。福音の動きが弱くなり、抵抗も弱弱しくなっていく。福音を拘束している鈴もセシリアも勝利を確信して、気を緩めてしまった。

その瞬間を福音は見逃さなかった。

渾身の力で二人の拘束を振りほどき、一夏達から後退。そして先程展開していた光弾を至近距離で浴びせようとするが、

「させるかよ！」

一夏は『瞬時加速』を行い福音が光弾を打ち出す前に福音に近づき、

「おおお！」

叫びと共に一夏の零落白夜の一撃は福音の両翼を斬り飛ばした。

両翼を失った福音はそのまま力を無くし、海へと落ちていった。

「ハアハア、やりましたの？」

海に落ちた福音を眺めながら、セシリアは言った。幕も海面を見ながら

「零落白夜の一撃に加え、両翼も斬ったのだ。これなら」

「ああ、俺達の勝ちだな」

ふう、と一夏は溜息をついた。

「しかし俺って結局隠れて止め刺しただけだな…。皆の作戦通りにはなって勝ったけどなんだこの燻り感は…」

「あなたの攻撃は少しもエネルギー無駄に出来ないのだからしょうがないでしょ」

「それに一夏、最後の攻撃は凄かったよ！僕には出来ないよ」

「それを言ったら一夏、私は福音に攻撃した後抱きつくしかしてな

いぞ…」

「ちゃんと福音を挟み撃ちしてくれたではないか。レーザーの弾幕張って逃げ道塞ぐのは紅椿しか出来ないことだから胸を張っても良いと思うぞ」

「そんなことよりも福音を回収しませんと。中には人が乗ってますのよ」

「ああ、そうだった」

一夏は改めて福音が落ちた海面に目を向けた瞬間、海面が勢いよく上に爆ぜた。

「な！なんだ！」

驚く一夏の眼前に、光の球が現れた。それは福音で、青い雷を体に纏いながら丸くなっている。

「何だ！何が起こってるんだ！」

「まさか第二形態移行だと！ここで！」

一夏の疑問にラウラが驚愕しながら叫んだ。そして全員のオープンチャンネルから福音の音が流れていく。

「敵機 E、及び F を確認。敵機 F、警戒レベル A と判断。殲滅します」

そして福音は一夏を見据えると、背中からエネルギーの翼を生やし、恐るべき速さで一夏に襲いかかった。あまりのスピードに一夏は反応できず、福音は一夏をエネルギーで出来た翼に包みこむと、零距离で光弾を一夏に浴びせた。再び翼が開かれると、ボロボロに

なつた一夏が海面へと落ちていった。

「一夏！よくも！」

怒りに燃える鈴が福音に対し衝撃砲を浴びせながら双天牙月を構え突撃していく。しかし福音は無数の装甲から翼を展開。先程よりも遙かに多い光弾が鈴に襲いかかった。

「ええ！く！」

「なんですのこの性能！無茶苦茶ですわ！」

鈴の近くにいたセシリアまでも光弾の嵐は巻き込み襲いかかった。必死で回避するも、数が多すぎる。避けきれずに次々と着弾し弾き飛ばされていく。鈴達を追い払った福音は再び一夏の方に顔を向けるが、

「一夏！しっかりしろ！一夏！」

一夏は箒に抱えられて福音から離れていつている。それを見た福音はエネルギーの翼を展開、それを前方に束ねるようにすると大型のレーザー砲となり一夏と箒に放たれた。

「箒！避ける！」

「え？」

ラウラの叫びを聞き、箒が振りむいた時にはレーザー砲はもう避ける事はもう不可能だった。そのため箒は一夏を抱きかかえ、盾となった

（今度は私が一夏を守る）

直撃しその衝撃で箒は気絶し、絶対防御が発生した紅椿は、一夏

と共に下にあった岩礁に叩きつけられた。

一夏と箒が福音の攻撃に晒される少し前、旅館の近くの海辺では簡易ラボを作った束が、その中でスサノオの修復作業を行っていた。

スサノオ回収後はずっとスサノオの修復作業を行っている束だが、その胸中は混乱していた。

「何で何で何で？どうしてこうなっちゃったのかなあ。私の完璧な未来予想図じゃ紅椿で颯爽と箒ちゃんがいつくんを運んで、福音はあーちゃんが足止めして、いつくんが止めを刺す。箒ちゃん達なら問題無く行えるはずだったのに…」

束は、作戦中箒がした行動を思い出した。

「まさか箒ちゃんが…。本当ならこれで箒ちゃんの紅椿の性能、白式の一撃必殺の威力、暴走するISにも負けないあーちゃんのIS技術を世界に知らしめることが出来たはずなのに。そしてその功績でちーちゃんもあんな連中に抑えられることも無くなるはずだったのに…」

しかし現実には作戦は失敗した。それも最悪な形で。

「最初は福音が暴走してるという情報掴んだ時、これだから愚民はとか思っただけど、利用させてもらおうとちーちゃんに作戦プラン教

えたのに。…あの軍事施設、もう地上から消し去っちゃおうかなあ。それと、福音を暴走させた連中もかなあ」

黒い感情が束の中で渦巻いて行く。束が行動を起こせばたやすくそれは行えるだろう。

「ま、それは後に考えよつと。うし！スサノオ修理完了！これでひとまずあーちゃんの命は繋がった！後は自宅のラボから医療用ナノマシンを」

と束がスサノオの修理を終えた瞬間、

「え？」

スサノオは束の前から姿を消した。

臨海学校（二日目 再戦）（後書き）

さてと、次で葵復活します。後過去話も入る予定です。

戦闘シーン、やっぱり苦手…

臨海学校（二日目）復活（前書き）

葵の過去をかなりダイジェストで提供します。

臨海学校（二日目 復活）

10年程前の初夏の頃だった。

母さんが死んで一年経ち、俺も父さんもその頃にはようやく母さんが死んだショックから乗り越えられるようになった。しかし、俺が幼稚園から帰っても家に誰もいないのはやっぱり寂しかった。父さんもなるだけ早く帰ってくれるようにはしてくれていただけ、どうしても午後7時位までは家で一人ぼっちだった。そのため俺は父さんが帰ってくるまで公園で遊んでいた。

一人で。

当時の俺は友達が一人もいなかった。原因は俺の顔。周りの女の子よりもずっと可愛らしい顔をしていた俺は、そのせいでからかわれていた。からかった連中は全員父さん仕込みの空手で全員泣くまで叩きのめしていたけど、そんな俺に友達なんてできるわけがなく、いつも一人ぼっちだった。

公園に行くのは大体夕方から。その時間で無いと公園には同い年の奴等が公園で遊んでいるから。彼等と一緒にになると、彼等は俺を遠巻きに見ながらからかってくる。腕力では到底敵わないと学習したよつで、遠くから言うだけ言って逃げていくようになった。そのため彼等に会わない為にも、夕方になってから公園に行くようにした。その時間なら……親がいる彼等は家に帰らないと行けないから。

もつとも公園に来ても一人では遊ぶ事なんて限られてくる。遊具はいくつかあったが、それもすぐに飽きてしまった。そのため俺が公園で遊ぶと言ってもやる事は、朝父さんから教わった空手の練習だった。わざわざ公園でやらなくとも家で出来るが、家にはいたく

なかった。誰もいない家は寂しく、父さんが帰るまでは家にいる事が辛かったからだ。

その日もいつものように夕方になって公園に行き、いつも練習をしている場所に向かったら、いつも俺しかいないはずの場所で、棒きれを持って振っている同年代位の男の子がいた。いつも俺が空手の練習をしている場所を勝手に使われ、俺はその男の子にむかっていた。

「おい、邪魔だよお前。どっかいけよ」

この顔のせいで、女の子扱いされる事が多かったため、口調だけでも男らしくしようと思ったせい、当時の俺は口が悪かった。俺がそいつを追い払おうと声をかけたら、そいつは俺の方を向くと

「何で邪魔なんだよ。おまえこそ俺の特訓の邪魔するなよ」と、怒って俺に言い返してきた。

「邪魔なんだよ。いつも俺がそこで練習してるのに。そこは俺の場所なんだからどっかいけよ」

「何言ってるんだよ！公園はみんなで使いましよって先生言ったぞ。お前だけの場所じゃないだろ」

「うるさい！ここは俺の場所なんだ！お前がどっかいけ！」

「嫌だね。もうここでずっと特訓してやる」

俺の態度が気に入らなかつたんだろう。そいつは意地でもそこを離れないようになった。

「そーいえばお前、女のくせに俺とか言うなよ。そーいうのをはし

たないって言うんだぞ」

「おまえー！俺は男だ！」

と怒鳴り、俺はそいつを思いつきり殴った。そいつは地面に転がったが、頬を押さえながら吃驚した顔をして俺を凝視し、

「え、男！うそだろ？って男なら…よくもやったなー！」

と叫びながら棒きれを振り回しながら俺に襲いかかった。しかし父さんにいつも鍛えられた俺が負けるはずもなくあっさり勝った。地面に転がったそいつを俺は見下ろしながら、

「ばーか。俺に勝つなんて100年早いんだよ。お前の特訓ってやつは意味無かったなあ」

と勝ち誇った。そいつは俺を見上げながら悔しそうにしていた。

「これでどっちが強いかわかっただろ。じゃあどっかいけよ。ここで俺が特訓するんだから」

そう言い放つと、そいつは立ち上がり、俺をじつと見ると、

「おまえ強いな。特訓って何をしてるんだ？」

と興味深そうな顔をして聞いて来た。同年代に敵意も侮蔑も無い声で話しかけたのは久しぶりだったため、俺はすこし戸惑った。

「空手。父さんから教えて貰ったのをここでもやってるんだよ」

「へー空手か。凄いなお前。だから強いんだなあ」

もはや完全に敵意がなくなったそいつは、純粹に俺の事を凄いなあと感心しだした。

「別に凄くねーよ。父さんは俺よりずっと凄いし。そいうお前も

特訓してたけど、何の特訓してたんだ？」

「俺か？俺は剣道。俺も姉ちゃんみたいに強くなるんだ！」

「ふーん、剣道か」

そして俺は辺りを見回した。日も結構降りてきていた。

「…なあ、お前家に帰らなくていいのか？親に怒られるんじゃないの？」

辺りを見回しながら俺が言うと、

「…大丈夫。俺の家親いないから。姉ちゃんしかいない。いつも遅くに帰ってくる」

と寂しそうな顔をして俺に言った。その言葉に俺は驚き、そして…少し親近感を感じた。

「お前こそいいのかよ、こんな遅くまでここにいて親に怒られるんじゃないのか」

逆にそいつは俺の心配をしだした。

「怒られねーよ。俺も父さんしかいなくて…いつも帰り遅いし」

俺がそういうと、そいつは吃驚した顔をした。そして、その後笑った。

それを見た俺も、自然と笑った。

「なんか俺達似てるな」

「そうだな」

「お前、いつもここで特訓してるんだろ？」

「そうだけど」

「じゃあさ、俺も一緒にここで特訓させてくれよ！頼む！」

「はあ？何で？」

「お前俺よりも強いだろ。俺負けっぱなしは悔しいからな。お前に勝つために、そしてお前とまた勝負するために」

「…別に他の場所で特訓してから俺に勝負しにくりゃいいだろ」
俺がそういうと、そいつは少し悲しそうな顔をした。

「駄目か？」

「…わかったよ。別にいいよ」

俺がそういうと、そいつはまた笑顔を浮かべた。

その後話しをしていたら、そいつの家もこの近所で、いつもは反対方向の公園にいたようだが今日はなんとなくこっちに来てみたとの事だった。

「そっぴやさ、お前って名前なんて言うんだ？」

「俺か？…俺は青崎葵って言うんだ。お前は？」

「俺は織斑一夏だ。じゃあ葵、明日もここでな」

そっぴってそっぴ…… 夏は俺に言うと、公園を後にした。名前
で呼ばれた事、そして明日も会う約束をされて、俺は 凄
く嬉しかった。

「これが、俺と一夏が初めて出会った日の事だった。

俺と一夏が特訓だ！や勝負という名の喧嘩を止めるようになったのは、そんなに時間がかからなかった。一夏が

「お前が何も持ってないのに俺だけ武器持っているのは卑怯だよな」と言って棒きれを捨てて素手で俺に勝負してくるが、毎回俺の圧勝で終わったためだ。当たり前であった。一夏は剣道？の特訓していたのになんと空手の特訓していた俺に勝てるわけがない。それが一夏にもわかったのか、

「葵！今日は相撲で勝負だ！」

と、勝負の内容を喧嘩から別の物に変えていった。

「やった！俺の勝ち！」

「うつつ、一夏！もう一回！」

「いいぜ！」

空手以外の事はほとんどやった事がなかったため、他のスポーツで競ったら俺と一夏に差はほとんど無かった。他にもメンコ、x、クイズ、あっちむいてほい等々、もはや勝負でも何でもなく、勝負というのは一緒に遊ぶための名目になっていた。お互い家に帰っ

ても誰もいないから、遅くまで夢中になって遊ぶようになった。そして、お互い気付かない内に帰宅時間が遅くなっていき、とうとう千冬さんが帰る時間よりも遅く一夏は帰宅してしまった。俺はぎりぎり間で間に合い誤魔化せたが、一夏はいつもこんな時間まで遊んでいた事を怒られた。その時一夏は俺を庇うため、一人で剣道の特訓をしていた！と言ったら、

「お前がそんなに剣道に興味持ってたとはな。じゃあお前も束の家の道場に通うか。その方が私も安心する」

と言われ、一夏が篠ノ乃道場に通う事が決まった。

翌日一夏はその事を俺に伝え、今後俺とはそんなに遊べなくなる事を告げた。正直さみしくなるなあと思いい残念がってたら、

「葵、お前も一緒に行かないか？」

と誘ってくれた。父さんと毎朝空手の練習をしていた為返事に躊躇していたら、

「お前と一緒にの方が楽しいからさ、どうかな」

と笑顔で誘ってくる一夏を見て、一夏の誘いに乗った。その日の夜、父さんに剣道の道場に通いたいと言ったら、父さんの顔が固まった。？と思ったら父さんは急に泣きそうな顔をして、

「葵~~~~！空手が嫌になったのか~~~~！」

と号泣しだした。慌てて俺は一夏から誘われた経緯を父さんに伝えると、一応納得してくれた。そして幼稚園の保母さんから俺は対人関係に難ありと言われていたため、友達が出来ていた事に父さんは内心凄く喜んでいた事を後に知った。

「なら葵、剣道をやってみたいと言うならまあ止めはせんが…それ

なら朝の訓練は止めるか？二つもしたらさすがにキツイだろ」

「嫌！朝の訓練は今まで通りする！」

父さんなりに気遣っての事だろうが、そこは譲れなかった。あの当時の俺と父さんのコミュニケーションを上手く取ってたのが朝の特訓だという事は幼い俺にも理解していたからだ。

それにそれ以上に、俺も父さんから教えて貰う空手が好きだったから。

その後は一夏に篠ノ乃道場まで案内され、俺も入門することが決まった。その時初めて千冬さんや箒の父親に会ったのだが、

「ほう一夏、可愛いガールフレンドじゃないか」

「同い年の女の子が来てくれるとは。箒も喜ぶだろうな」

と見事に誤解された。男だと言ったら二人とも凄く驚いた。そしてそんな俺達を遠巻きに見ている二人がいた。一人は千冬さんと同じ中学の制服を着ていた束さんと、もう一人は剣道着を着ていた箒。一夏の言う女のファースト幼馴染の箒と初めて出会ったのは、この日だった

俺が束さんを見ると束さんはすぐにどこかへと行ってしまった。興味など無いとばかりに。箒は俺と一夏をぶすつとした顔をして眺めている。

「箒、この二人は今日からお前と一緒に剣道の練習をする仲間だ。仲良くしなさい」

箒の親父さんがそう言うも、箒は不機嫌そうな顔で俺と一夏を見ている。俺も一夏もどう反応しようか迷っていたら、

「弱そうな二人だな」

の一言で、俺と一夏は怒りすぐに剣道で勝負を挑んだが……俺も一夏も完敗された。一夏が俺に喧嘩で勝てないように、剣道をずっとしていた筈に俺達二人が勝てるわけが無かった。しかし悔しさをバネに、俺も一夏も当面の目標は打倒筈を掲げ練習に励む事となった。この時までには俺も一夏も、筈とはそこまで仲が良くなかった。仲がよくなる出来事が起きたのは、初めて会った日から二年後、小学校二年生の時だった。

その日俺と一夏と筈と、クラスの男子3名で放課後教室の掃除をしていた。俺と一夏は面倒だなあと言いながら掃除をしていたら、他の男子達は筈を困らせていた。くだらない事してんなと思っただが、その時俺は筈を助ける気は無かった。未だに剣道で負けているのもあったが、同じ道場にいながら俺と一夏に対し態度が悪い筈を俺は好きではなかったからだ。無視して掃除を進めようとしたが……一夏は違った。

「何やってんだよお前ら！複数で一人をいじめるとか、それでもお前ら男かよ！」

と言つて一夏は筈と男子達の間に入り、その後喧嘩となった。俺も筈も、一夏の行動に驚いた。普段の仲を考えると、むしろ男子達に共感した方が自然だったからだ。しかし一夏は筈の為に怒り、筈を庇った。その姿は俺には凄く……眩しく見えた。

しかし男子達3人を一夏が泣かした後、運悪く男子達の友達5人が3人を迎えに来て、その惨状を見た後はすぐに一夏に襲いかかった。3人も一緒に喧嘩した後の一夏にはもう力があまり残っておらず、すぐに劣勢となった。その姿を見た俺は　　気が付けばその5人相手に一夏と一緒に喧嘩していた。ちゃっかり筈も加わっており、5対3だったが一方的なこちらの圧勝で終わった。

なんとも少年漫画みたいな展開だったが、一緒に喧嘩した仲という事もありその後俺と一夏は箒から名前と呼ぶ事を命じられ、俺達も名前と呼ぶよう箒に伝えた。それから俺、一夏、箒と三人で居る事が増えていった。一緒に遊ぶようになると、箒は態度が悪いのでなく上手く言いたい事を伝える事が出来ないだけと知り、俺も一夏もそんな箒にもつと素直になれよと笑いかけると、箒も笑顔を見せてくるようになった。

「ありがとうね、いつくん、あーちゃん」

道場で俺と一夏と箒が遊んでいたら、いつも俺達を無視していた束さんが、その時初めて笑顔で俺達にそう言ってくれた。箒と仲良くなったら、束さんとも仲良くなり、物知りな束さんに色々質問したり面白い発明を見せてくれたりしてくれた。

小学3年を過ぎた頃になると、今までの練習が実を結んだのか、俺も一夏も剣道で箒の実力に追い付きだした。試合をして勝ち星が増えていった俺達を箒は悔しがったが、俺達の努力を今まで見てたせいか納得はしていた。

小学4年になると、俺の実力は箒を上回った。この辺で男女の差が出てきたんだろうと箒の親父さんは言ってたが、箒は認めたくないのか諦めずに練習に励んだ。

しかし箒よりも強くなった俺だが、気が付けば一夏はそれ以上に強くなっていた。

その頃になると試合をすれば俺は一夏に勝てなくなっていた。練習で無く本番だと俺はどうしても一夏に勝てない。

「あゝくそ、一夏に勝てなくなった」

俺がそうばやくと、一夏は真面目な顔で

「これだけはお前に負けたくないからな」と言った。

そして小学5年になり、…… 篤は転校した。

理由は当時わからなかった。ただいきなり引越した篤に、俺と一夏は悲しみ… 篤がいなくなったのと、篤の親父さん以外で剣道を教えて貰う気が無かった俺達はその後剣道をする事を止めた。いや一夏ももう子供で無く、千冬さんが働きその収入で生活している意味を理解したのでアルバイトという名のお手伝いや家事の一切をこなすようになってきたのもある。俺もそんな一夏に付きあっていたら… なんか家事スキルはどんどん上がっていった。

篤が転校して数カ月後、クラスに転校生が来た。その名は鳳鈴音という中国人で、しばらくしたら俺と一夏のセカンド幼馴染となった。仲良くなっただきっかけは… まあ篤とほぼ同じ展開だった。

外国人と言う事で男子数人にかかわれた鈴を、かつての篤とダブって見えた俺と一夏は男子達を蹴散らして助けた。この時も一夏が率先して助けた。それが原因なのだろう、鈴はわかりやすい位一夏に惚れていった。ちなみに数日は鈴は俺を敵意がこもった目で俺を睨んでたが、俺が男だと知るとそれは無くなった。… 一夏のガールフレンドだと思ってたらしい。

その後は俺と一夏と鈴でよく遊ぶようになった。鈴の家が定食屋なのは助かった。アルバイトと言う名のお手伝いも、鈴の家なら安心して行えたと料理も教えてくれた。… まあ俺と一夏の覚えがよかつたせいで鈴が陰で悔しがってたけど。

中学に上がると、五反田弾とも出会い四人で遊び回るようになった。弾の家も定食屋だった為、親父さんから色々な料理を教えて貰ったりもした。そして……

ぞあ……。ぞああん……。

天気は快晴、青い空に白い雲、どこまでも続く海を眺めながら、俺は白い砂浜を歩いてきた。……ってちよっと待て。

「なんで私ここにいるんだろ？」
思い出せない。なんか大変な事があったような気がするんだけど、何故こんな場所にいるのかが思い出せない。IS学園の制服を着てるけど、こんなところで課外練習しにきたなんて記憶が無い。

「ってそれよりさっきまで何か自分の半生を見てたような気が……」
強制的に過去の自分を振り返っていたような……。あれ、なんか最近も似たような事があったような気が……。

「あゝ、駄目。思い出せない」

頭が妙にはつきりしないまま、とりあえず海岸線を歩いていく俺。理由はわからないけど、何故かそっちにいけばいい気がしたからだ。

そうしてしばらく歩いていると、

「……」

前方に……仮面を付けた鎧武者がいた。その武者は見た感じ女の武者だろう。戦国時代の武者というよりもっと昔の武士の鎧な気がする。兜を付けてるが後ろから黒い艶やかな長い黒髪があり、鎧も女性らしい形をしている。耳になんかピアスをしてるが…あれは勾玉？

どう見ても怪しい人物に遭遇してしまったなと思ってたら、

「ラ、ラ〜。ラララ〜」

とどこからか歌声が聞えて来た。声ができる方を向くとさっきまで誰もいなかった波打ち際に、白い髪をして白いワンピースを着た女の子が踊りながら歌っていた。

え、何これ？どういう状況？

前方には黙って立っている女武者。波打ち際には歌って踊っている女の子。いつの間にか知らない場所において、何故か記憶はあやふや。この異常事態に混乱しかけたが、俺はある結論に達した。

「ああ、私死んだんだ。つまりこっつて…あの世？この海みたいなのが三途の川？予想以上にでかいんだ」

なんとというか、それ以外は考えられない。もしかしたら夢という可能性もあるけど、夢にしては…なんかこう、違う気がした。人生わずか15で死ぬとは…さすがに未練が出てくると思ったが、何故かあまりわいてこない。父さんの事を思うとさすがに罪悪感が生まれてくるが

「なんだろう、こうやり遂げた感があつて安心してるこの感覚は…それよりもここが三途の川ならどうしよっかな。六文銭持ってない

から渡れるかなあ」

とくだらない事を考えていたら

「力を欲しますか……?」

と声を掛けられた。

前方の女武者に顔を向けるが、どうもこちらではないようだ。波打ち際にいた女の子の方を向くと、海を見ていた。そっちに顔を向けると…波の中、膝下までを海に沈めた女性が立っていた。その姿は白い甲冑を纏った騎士のような姿をしており、顔は半分覆っているガードのせいで口元しか見えない。それをじっと俺は見ていたら、

「力を欲しますか……?」

と再び声を掛けてきた。

「え〜っと、すみません。ここどこですか?やっぱりあの世?三途の川ですか?六文銭持ってませんけどできれば天国の方に運んで貰えませんか?」

「力を欲しますか……?」

…質問は見事に無視され、さっきと同じ言葉を言われた。

「いやあの、どこか教えてくれたら助かるんですけど…」

「力を欲しますか……?」

「綺麗な鎧ですね、どこで手に入れたんですか?」

「力を欲しますか……?」

………何この人。レヌー 城の王様?求める答え以外は受け付けないって訳?

「力を欲しますか……?」

しつこく聞いてくるこの騎士さんに、俺は即答で

「いらない」

と返した。って何!この騎士さんもだけど、さっきの女武者も女の子も俺を凝視して!そんなに変な事言ってないけど?

「力を…欲しないという事ですか?」

女騎士がどこか困惑したような声で話しかけてきた。

「いや欲しくないというわけじゃなくて…力は自分が努力して手に入れてこそ価値あるし。なんか貴方の口振りから不思議な力を私に与えてくれるみたいなきもちがしたから、そういうのは断つただけ。どんなん力かは知らないけど、与えられた力なんて怖いし信用できない」

「では貴方は…どんな困難な事があっても自らの力だけで立ち向かうのですか?」

「まさか、一人だけじゃ無理に決まってるじゃない。自分だけの力じゃどうしようも無い事が起きたら素直に他人の手を借りるかな。それが当たり前だと思っし」

哲学を語るわけじゃないけど、一人では生きていけないなんてのは当たり前前の事だ。一人で食べ物を集めたり、衣服を作ったり、家を作るなんて俺には出来ないし。

「…では、貴方にとって力とは何ですか?そして何の為に使う物ですか?」

質問が多いなあこの人。しかもなんでこんな禅問答みたいな事し

ないといけないんだろう？……まあどうせ真面目に答えないと同じ質問を延々とするんだらうから答えるけどさ。

「さつきも言ったけど、努力して手に入れるものかな。言いかえれば頑張った結果が力だと思う。何のために使うんだけど、自分の為と誰かの為に使うものかな。これの優劣は付けられないと思う」

「誰かの為に…ですか」

「そう。自分の為だけでなく、誰かを助けるため守るために力は使うべきかな。ま、誰かを…家族や友達を助ける為に自分の持っている力を使うのは大事だと思う」

そう言っただけは、一夏の顔を思い出す。一夏なら、絶対こういうだろうし…俺も一夏を見て来たから素直にそう思う。

「貴方の言う力とは…自分の為、そして他人の為に使うべきで…自らの力が及ばない時は他の人の力を借りるという事ですか」

「うん、まあそうなるかな。一人で無理なら、信頼できる人と協力して欲しいかな。それなら…お互い対等だしね」

「わかりました…、貴方は実に面白い人だ」

騎士さんはそう言っただけで笑った。…当たり前前の事言っただけだと思っただけ。

「なら、一緒に協力する、力を貸すならいいんだよね」

女の子がそう言っただけで、女武者の方に行く

「さあ、こっちに来なよ。言いたい事あるんでしょ」

と言っただけで、俺の前まで女の子は女武者を引っ張ってきた。そこに

騎士さんが近づくと、

「なら、まずは私がこの子に協力します」

と言うが、…何をしたのかはさっぱりわからん。その後女武者の方が俺に顔を向けた。俺はじつと…女武者を眺める。……もしかしてこの人。

「葵」

ふいに女武者は俺の名前を呼んだ。初めて聞く声なのに…何故か心地よかった。

「私は…二度も貴方を守れなかった。でもそれでも…私は貴方と戦いたい。一緒に戦いたい。だから」

そう言つて女武者は俺に右手を出して言った。

「私を…信頼してくれますか」

普通初対面でこんな事聞かれたら絶対拒否するが、この女武者は…違う。こうして会つたのは初めてだけど、初対面ではない。おそらく初めて会つたのは…。

そこまで考えると、俺は笑みを浮かべて右手を握つた。

「もちろんよ、スサノオ」

そう言つと、目の前の女武者　　スサノオは笑顔を浮かべた

…と思う。仮面付けてるからわからないし。

「じゃあ、まずは貴方に私の力を貸しますね」

スサノオが言つと、急速に世界が薄くなつていくのを感じる。夢から覚める時の感覚が一番近いかな。薄れゆく世界の中、最後に

「頑張つてね、そして…皆を守つてね」

と女の子が呟いたのを聞いた。

目を覚ました。

長い長い夢を見ていた。夢の内容は大半は忘れてしまった。でも、
「貴方がここにいるって事は…私が何をすべきかなんて考えるまでも無いか」

と俺のベットの横で鎮座しているスサノオに語りかけた。全身を
包帯で包まれてたが、それを無造作にほどいていく。傷がもう完治
していることは、起きた時から何故か理解出来ていた。包帯を取り、
着替えると

「じゃあ、行きますか」

と俺はスサノオに触れた。

臨海学校（二日目 復活）（後書き）

葵も結構一夏に依存しています。

臨海学校（二日目 決着）（前書き）

ここぞとばかりに活躍してるな葵

臨海学校（二日目 決着）

「うっ…うっ」

意識が朦朧とする。俺は…今倒れているよな、何が起こったんだっただか…。

たしか第二形態に移行した福音が俺の目の前に現れて、その後俺の周りを奴のエネルギー翼が俺を覆って…ああそうだ、その後光弾を至近距離で浴びせられたんだ。そしてその衝撃で…おそらく気絶した俺。

「ぐっ…」

クソ、かなり手ひどくやられたようだ。まだ視界がはつきりしない。シールドで守られているとはいえ、完全に衝撃を防いでくれるわけじゃないからなあ。もうこのままここで眠ってしまいたい。体が休みたいと言っている。でも、

「休んでいられるかよ…」

俺にはまだやることがあるんだ。それをやり遂げるまで、休んでる場合じゃない！

あいつは…、葵は…これ以上の…苦しみを…

「あいつを…、葵をあんな目にあわした福音ををぶちのめすまでは…」

俺が朦朧とした意識で呟いていたら、

「一夏、こんな所で寝てると危ないわよ」

と、上から葵の声がした。　　ってええええ！？

「葵！」

一瞬にして意識が覚醒した。目を見開き、体を起こすと…

そこにはスサノオを装着した葵がいた。

それは最初の出撃時と全く同じ姿をしていて…そしていつも俺に向けてる笑みを葵は浮かべていた。

「あ、葵！ど、どうして…」

「どうしてって…いやあれあれ。鈴達がまだ近くで福音と戦ってるんだから、こんな所にいたら流れ弾に当たるかもしれないから危ないわよ」

葵が指差す先に視線を辿ると、鈴達が福音と戦っている姿が見える。

「い、いやそうじゃない！葵、怪我は！」

「怪我？ああ一夏、大丈夫。箒も気絶してたけどたいした怪我はしてないから」

そういう葵の視線を辿ると、俺のすぐ近くで気絶している箒がいた。確かに葵が言う通り大丈夫そうだ。そうか、よかった。ってだからあ！

「いい加減にしる葵！俺が言いたいのはお前の怪我の事だよ！あれだけの怪我をしたんだぞ！」

しかし声を荒げて葵に怒鳴るも……葵の見た目は本当に怪我する

前と変わっていない。俺の怒鳴り声を受けた葵は、

「ごめん、心配かけたけどさ…、この通りもう大丈夫」と言っただけで笑って髪をかきあげた。

「葵、その髪…」

「髪の長さまで元通りにしてくれるなんて、サービス良すぎよね。ま、髪は女の命だからかな」

福音によって焼けただれた髪も、元通りになっていた。俺は改めて葵が無事な姿を確認する。そして俺を見る葵の目を見て、俺は確信した。

ああ、本当に葵はもう大丈夫だ。

そしてそれを理解した瞬間、心の奥底から嬉しさがこみ上げてくる。止められない。止めれるわけがない。

そして俺は葵を見つめながら、

「まったく、あんな無茶しやがって。心配させんなよな。本当に心配したんだからな！そして」

心から思う本心を、

「　　ありがとうな、お前のおかげで、俺も俺も無事だ」

葵に言った。そして俺の言葉を聞いた葵は、人差し指を立て、

「貸し一つね。今度返しなさいよ」

と満面の笑顔を浮かべながら返した。

頭が痛い。体中が痛い。

少しの間気絶していたようだ。意識が戻ってきたが、それとともに体に負った痛みを自覚し始めている。しかし、この程度の痛みが何だというのだ。葵は、私と一夏を庇ったせいで…。

立たなければ。

戦わなければ。

ふらつく体を起こし、目を開ける。そしたら…

目の前に一夏と話している、葵がいた。

「葵！」

ど、どうということだ！？葵は、旅館で寝ているはずだ。なのに、今私の目の前にスサノオを装着した葵がいる。私の叫び声を聞いて葵はこちらを振り返り、

「あ、篙も気が付いた。見た感じ大きな怪我は無かったと思うけど、体は大丈夫？」

と私に言った。

「私の事などどうでもいい！葵！体は、怪我は！」

「この通り。完全復活ってね。心配かけたけどもう大丈夫」

そう言っただけ私に笑いかける葵は、確かに大丈夫そうに見える。私に対し笑いかける葵を見て、私の中にあつた不安がどんどん消えていくのを感じる。

「よかつ、よかつた、本当に……」
安心したら涙が溢れて来た。それを両手でぬぐい、再度葵に顔を向ける。

「葵、わ、私はお前に」

葵に対して謝らなければならない。私のせいで葵はあんな怪我を。しかし葵は私が言い終わる前に、

「箒、まゝ言いたい事は一杯あるとは思っけど、とりあえずそれは福音を倒した後にしようか」

と言つて空を見る葵。葵が見ている方を向くと……そこにはいまだ福音と死闘を繰り広げているセシリア達の姿があった。

「しかし葵！」

なおも言い募ろうとする私に、葵は指で頬を掻きながら

「うゝん、じゃあ箒、これだけは先に言っとくわね。何を思ってるかは大体察しが付くけどさ

結果はどうあれ、友達が心配して助けようとした行為を、誇る事はできても怒る事は、私はできないわね」

真っ直ぐ私を見つめながら言った。その言葉、その目を見て一夏が言っていた事を思い出す。

(葵は絶対箒を責めないだろうよ)

ああ、その通りだった。一夏の言う通りだった。一夏の方を向くと、一夏も笑みを浮かべながらこちらを見ている。一夏は……葵がこゝういつのをわかっていたのだな。

「さて、鈴達がまだ戦ってるし参戦しに行きますか。一夏、箒。どれだけエネルギーある？特に一夏、零落白夜は使える？」

「少し残ってるが…ぎりぎり後一回零落白夜が使えるといった所だな」

私もエネルギーを確認するが…どうやら一夏を庇ったときに全てのエネルギーを使ってしまったようだ。

「すまない葵、一夏…私はゼロだ」

「じゃあ箒はここで待っててね。全て終わらせるから」

「行くぞ葵！今度こそ福音を落ととしてやる！」

福音に向かって飛んでいく一夏。その顔はあきらかに、さっきまでとは違った。葵が怪我してからは一夏、少し怖い顔をしていたのに今は違う。活き活きとした顔をしている。

そしてその顔こそ…私が好きな一夏の顔だ。

「先に行くなつての。じゃあ箒、行ってくるね」

一夏に続き葵も飛んでいった。私はそれを見送り、心の底から願った。

（私も戦いたい。今度こそ、守れる存在になりたい）

エネルギーがなくなり動けないこの機体が恨めしい。しかし私も戦いたい。葵と…一夏と一緒に戦いたい！

そう強く願い続けていたら、その思いに応えるように紅椿の展開装甲から赤い光に交じって黄金色の粒子が溢れだした。

「な、なんだ一体!？」

そしてハイパーセンサーから情報が流れだす。そこには機体のエネルギーが急激に回復していつてる事を伝えた。そしてそこには『絢爛舞踏』発動と書かれていた

「これが、紅椿のワンオフ・アビリティ……」

絢爛舞踏によってエネルギーは完全に回復した。なら、

「私も、行くぞ!」

死闘が続いていた。

一夏と箒が撃墜された後も、鈴、セシリア、シャルロット、ラウラの四人は福音を倒すべく戦い続けていたが、それは絶望的な戦いだった。四人は連携を取り合い、福音に対し攻撃を行っていたが、第二形態移行した福音は火力、スピード共に四人を圧倒していた。さらに

「ああ、もう!いつになったらこいつ沈黙するのよ!」

「通常ではもうとっくにエネルギーゼロのはずですわよ!」

セシリアのビット、鈴の衝撃砲、シャルロットのショットガンにアサルトライフル、ラウラのレールカノン等々の攻撃を受けても、福音は何事もなかったかのようにすぐに反撃に転じている。軍用ISとして開発されてる上に暴走の為にミッターカットされている福音のエネルギーは四人よりも何倍も圧倒していた。

「一夏の零落白夜の一撃を受けたんだからいい加減に落ちないかな」

「くそ、もう一度一夏の―撃かもしくはそれに準ずる程の―撃を与えられれば…」

四人は己の兵装の火力不足を嘆いていた。競技用のISでは十分な兵装でも、福音に対しては決定打まではいかない。無論四人の執拗な攻撃は確実に福音に対しダメージを与えてはいるのだが、福音のエネルギー翼による圧倒的な光弾の弾幕は四人の攻撃以上に苛烈で、このまま戦い続けていたら先に四人のエネルギーの方が尽きる事が四人とも理解していた。

「せめて近づければこれを…」

シャルロットは左腕に装着されている盾を見ながら唸る。それは六九口径パイルバンカー。灰色の鱗殻。別名盾殺しのそれは当たれば確かに四人の中では最強の攻撃力を誇る。しかしこの武器は使えない。いや使う事が出来ずにいた。

「やめておけシャルロット。今の福音に下手に近づいたら一夏のように一瞬にして蜂の巣にされる。そもそもあの光弾の弾幕を避けて近づくのはシャルロット、お前でも無理だ」

「そうなんだよね…」

近づこうにも福音の動きはこちらよりも早く、全身からエネルギー翼を出し光弾を放つ福音に対し四人は近づくことすら出来ないでいた。しかも近づいても一夏ように一瞬にしてエネルギー翼に包まれて蜂の巣にされてしまう。それらを全てかわすことは出来ない。シャルロット本人もわかっている。

「でもこのままじゃ」

皆やられてしまつ。

シャルロットがそう呟く前に、

「シャルロットさん！そつちにきてますわ！」

一瞬でも福音から意識を外したシャルロットに福音は接近してきた。慌てて迎撃しようとするも、福音は背中に展開しているエネルギー翼から光弾を放ちシャルロットに浴びせていく。ラウラ達もサポートすべく攻撃を行おうとするが、それよりも早く福音はさらに他の部位からエネルギー翼を展開させ、光弾を打ち出し攻撃を牽制させる。必死で回避行動していたシャルロットに福音は近づき、シャルロットの足を掴む。シャルロットはアサルトワイフルを至近距離で福音の頭部に放つも、頭部からさらにエネルギー翼が展開しそれを防いでいく。そして背中から展開されているエネルギー翼が大きく開き、シャルロットを包み込んだ。

（もう駄目だ！）

シャルロットがそう思い目を瞑った瞬間、

バアン！

爆音が響いた。

爆音を聞き、シャルロットが目を開くと

そこには

攻撃を受け吹き飛ばされている福音の姿が見えた。

「あ、ありがとう。助かったよ！」

そう言つてラウラ達の方を向くが、皆惚けたように福音とは別の方向を向いていた。何で？と思ひながらシャルロットもラウラ達が見ている方を向いたら、

そこには、白式を展開させた一夏と、スサノオを展開した葵の姿があった。

葵の手には天叢雲剣が青く光っている。シャルロットを救ったのは、その天叢雲剣の攻撃だった。それは鈴もセシリアもラウラも、助けられたシャルロットもすぐにわかった。しかしわからないのは一つ。

どうして大怪我を負って意識不明のはずの葵がここにいるのだろうと。

「あ、葵！？あんた何で？あんただって大怪我して！」

四人の心を代弁するかのように鈴が葵に対して叫んだ。ひどく混乱しながら叫ぶ鈴に対し、葵は笑みを浮かべながら、

「皆が喧嘩してるのに私だけいつまでも寝てるわけにはいかないでしょうが！」

と叫んだ。その姿、その態度に鈴は昔を思い出した。転校してしばらくたっていじめられた自分を、庇ってくれた一夏のすぐ後に来て助けてくれた姿を。

「く~~~~！あんたら二人とも毎回タイミングが良すぎる時にくるわね！」

そう悪態をつく鈴だが、顔は笑っていた。

「葵さん！本当に大丈夫なんですの！寝てなくて平気なのですか！」

「ええ、もう本当に大丈夫！完全復帰したわよ」

心配顔のセシリアに対し、葵は親指を立てて笑った。その姿を見

て、セシリアの顔にも笑顔が広がっていく。

「一夏も気が付いたか。体の方は大丈夫なのか？」

「一夏、筈はどうしたの？筈も大丈夫かな？」

「ああ、心配かけてすまない。俺は大丈夫だ。筈もエネルギーがなくなってるからここにいないが、体の方は大丈夫だ」

一夏と筈も無事とわかり、鈴達は安堵した。戦っている最中も二人の事は心配していたからだ。

「いや和んでいる場合ではないぞ皆

来る！」

ラウラの叫びに、全員がラウラが見ている方向を見る。天叢雲剣の全エネルギーの内半分を一度にレーザーとして撃ちだした葵の攻撃からまた体勢を立て直した福音は、新たに現れた葵と一夏を見据えている。

「警戒レベルAの敵機F、戦線復帰。敵機Gを確認。敵機G 過去のデータから同機を確認、照合。警戒レベル Aと判断。敵機F及び敵機Gを最優先で殲滅対象とします」

一夏達がオープンチャンネルから流れる声を聞いたと同時に、福音は一夏達の上空まで最大加速で飛ぶと全身からエネルギー翼を展開し、その場で一回転した。その瞬間、

福音を中心に全方位からの光弾が一斉に一夏達に襲いかかった。

必死になって避ける一夏達。しかし圧倒的な光弾は容赦なく一夏達に浴びせられる。そして福音はさらに一夏に照準をあわせ光弾を浴びせていく。福音の猛攻に一夏は晒されたが、

「一夏！」

シャルロットが一夏の前に出て実体シールドとエネルギーシールド両方を併せ持つ『ガーデンガーデン』を展開して福音の攻撃から一夏を守った。

「いい加減それ見飽きたのよね！」

「一夏はやらせないわよ！」

葵の天叢雲剣のレーザーの斬撃と、鈴の衝撃砲が福音を襲った。福音はすぐに回避したが攻撃を止める事に成功した。その福音を葵はじっと見つめる。

「ねえ、さつきから聞こうと思ってたんだけど……何か福音パワーアップしてない？なんか頭から生えてた両翼無くなってるけど、全身からなんかエネルギーでできた翼生やしたりしてるし」

「葵さんが眠られてる間に私たちが戦ってたのですが…一夏さんの零落白夜の攻撃を受けた後第二形態移行されましたの！」

葵の疑問に対し、セシリアはビットを展開し多方向から福音にレーザーを浴びせながら叫んだ。

「第二形態移行！？そんなRPGのラスボスじゃあるまいし…」

「知らないわよそんなの！」

福音の光弾を避けながらばやく葵に対し、同じく避けながら衝撃砲を浴びせていく鈴。葵は一夏の方を向き、

「…ねえ一夏、なんで一夏は第二形態移行してないの？普通親友が敵の攻撃を受けて死ぬか大怪我負ったら『葵のことかー！』とか叫

んでパワーアップするもんじゃないの？」

福音に天叢雲剣を振り、ジト目をしながら葵は一夏に言った。

「知るかそんなもん！それだったら葵、お前も何で死の淵から復活して行くせにパワーアップしてないんだよ！漫画とかじゃ死の淵から復活した者は新たな力と共に登場するもんだろぅが！」

シャルロット共に光弾を避けながら一夏は叫んだ。

「はあ？無茶言わないでよ。大体復活するだけでも奇跡なのにさらに新たな力とかどんだけ要求するわけ？大体そいうのは主人公がするわけであって、どちらかというヒロインの私の役じゃないし」

「ヒロイン（笑）」

一夏に対しさらに葵は何か言おうとしたが、
「いいから戦いなさいよあんた達！」

「戦いに集中しろ二人とも！」

「今の状況わかってますの！」

「一夏、戦わないなら守らないよ…」

一夏と葵に対し四人は本気で怒鳴った。しかしそれでも攻撃の手を緩めない辺りはさすが代表候補生であった。

「…まあ確かにそんな場合じゃないわね。よし、一夏！零落白夜の準備して！私が」

意気込む葵に対し、

「すまん葵…。さっきの福音の攻撃をうけたせいでもう使えなくな
った」

申し訳なさそうに一夏は言った。

この時全員の時は確かに止まった。

そしてすぐに

「この役立たず〜〜〜〜〜！」
葵の叫びが周囲に響いた。

「…すまん。マジですまん」

「いや仕方ないよ。福音のあの攻撃は僕たちだって避けきれないし、落ち込む一夏をシャルロットが慰める。」

「あゝ切り札が戦う前に尽きたわね…」

「…もう本当に逃げる事を考えた方がいいのかもしれない」

「あの福音がそれを許すと思う？」
退却を本気で考え出したラウラに、葵が福音を指差す。鈴とセシリアの攻撃を受けながらもこちらを殲滅せんと光弾をばらまいていく。

「…無理だな」

「死ぬ気で倒すしかないわね」
退却を諦めたラウラ。葵は天叢雲剣を構え、鈴とセシリアの援護に向かおうとした。しかし、

「みんな無事か！」

箒の声が聞こえ慌てて声が出た方を向く葵達。そこには、

全身から黄金の粒子を纏った箒がいた。

「箒？お前確かエネルギー切れのはずじゃ？」

「一夏！これを受け取れ！」

一夏の疑問に答えず、箒は一夏の手を握った。すると紅椿から白式にエネルギーが注がれていく。あっという間に白式のエネルギーは満タンとなった。

「え、エネルギーが回復した！」

驚く一夏に対し、箒は白式から離れると

「行くぞ一夏！今度こそ、福音を倒すぞ！」

と叫ぶと紅椿を最大加速させ、福音に向かっていった。

「何があつたんだ箒に？しかしエネルギーが回復した！」

「箒はパワーアップしたのにお前ときたら……」

「しつこいぞ葵！それよりもこれで」

「ええ、決めるわね」

葵は不敵に笑った。

「でもどうするの葵。一夏の零落白夜は使用可能になったけどあの福音にあてるのは相当難しいよ」

箒、セシリア、鈴、ラウラと交戦している福音を見ながらシャル

ロツトは葵に聞いた。

「それは私がお膳立てしてあげる。一夏、私が攻撃の機会を作るからそれでしとめてよ。それが最後のチャンスだから」

真剣な顔をして一夏に言う葵に対し、

「まかせろ」

一夏は力強く頷いた。

「よし、じゃあ始めようか。幕！鈴！セシリア！ラウラ！シャルロツト！これから私は福音に対し接近戦を持ち込むから皆サポートお願い！」

そう叫ぶやいなや葵は福音に対し最大速度で向かっていった。

「葵！？無茶だ！」

「無茶でもやるっきゃないでしょ！皆とにかく撃ちまくって！」

ラウラの叫びも振りきり葵は福音に向かっていく。無論福音も黙って接近を許すわけがなく全身から展開されたエネルギー翼から光弾を撃ちだしていく。しかし

「させませんわ！」

「こっち向きなさい！」

「邪魔はさせん！」

セシリア、鈴、箒は葵を援護すべく福音に猛攻を浴びせていく。ラウラもシャルロットも長距離狙撃で攻撃するも、福音はまた全方位攻撃を行い箒達をを薙ぎ払う。近くにいた箒達は福音の攻撃を受け吹き飛ばされていく。しかし、

「まだまだ～～～！」

葵はその福音の光弾を避けながら弧を描くように福音に近づいていった。無論全弾回避は無理であり、数発の光弾は葵に着弾していた。しかしスサノオの装甲が少し砕けようとも、葵は福音に向かい続けた。

第一形態時ならともかく、第二形態の福音の攻撃はいかに葵といえども避けきれず、単独で福音に近づくのは無理であった。しかし全員で福音の意識を分散させたら、全方位でのバラマキ型なら葵は避ける自信があった。多少予想以上であったが、それでも葵は福音に近づいていき、そして福音は近づいていく葵一人に光弾を全て浴びせようとするが、

「遅い！」

葵はその時にはもう『瞬時加速』を行える間合いまで詰めていた。一瞬にして葵は福音の正面まで近づき、残るエネルギー全て天叢雲剣に注ぎ福音の頭部めがけて振りおろそうとした。

もはや翼での迎撃では間に合わないと言われ福音は判断。そして葵の持っている剣は過去のデータからかなりの威力があると理解した福音は、両手からエネルギー刀を展開。両手を交差させ、葵の一撃を防ごうとする。

その福音を見て、葵は会心の笑みを受かべ
天叢雲剣を消した。

剣を収納した葵を、福音は理解できなくなった。しかし剣を消した意

味を理解する前に、

葵は福音の懐に近づき、拳を構え、

「ハアツ！」

気合いと共に葵が一番得意とする、正拳突きを叩きこんだ。その拳は福音の腹部に当たり、その瞬間、

福音は爆音と凄まじい衝撃を受け後方に吹き飛んでいった。

体を錐もみしながら吹き飛んでいく福音。その先には、

「じゃあ一夏、後はよろしく」

零落白夜を展開させた一夏がいた。一夏は吹き飛んでいく福音に、

「今度こそ決める！」

と最大稼働させた零落白夜の一撃を与えた。一撃を受け福音は絶叫を上げて一夏の首に手を伸ばすも、

「おおおおー！」

ブースターも全開にして一夏は福音にさらに零落白夜の刃を押し付けていく。福音の手は一夏の首に届く前に 全ての機能を停止した。

「おっと」

銀の福音の装甲が消え、中にいた操縦者が落ちそうになったのを慌てて一夏は抱きとめた。顔色は悪く気絶しているが、大きな怪我とかは無いようだ。ほっとする一夏の前に、葵は近づき、笑顔で右手を上上げる。一夏もそんな葵を見て、左手で操縦者を支える。そして笑顔を浮かべながら右手を上げると、

パンという音が辺りに響いた。

「作戦完了　　と言いたいが、お前達は独自行動を起こし重大な違反を犯した。帰ったら反省文の提出と懲罰用特別トレーニングがお前達を待っている。覚悟しておけ」

福音を倒し、旅館に帰った俺達を千冬姉と山田先生は玄関で待っていたがそこから出る言葉は勝利の祝いの言葉ではなく……なんとモキツイ説教だった。

いや千冬姉、確かに千冬姉の言う事はもっともだけどさ、少し位は褒めてくれよ…。

「まあまあ織斑先生、みなさんもうボロボロですからこのくらいで旅館の玄関前で説教をし続ける千冬姉に、やんわりと助け船を出す山田先生。ああ、天使に見えます。」

「ふん、まあいいだろう。お前達、これから山田先生の指示の下怪我のチェックをしてもらえ。特に葵、理由がわからずいきなり全快してるから特に念入りにな」

「わかってますよ」

そして千冬姉は俺達をじっと見つめだした。

「え〜っと、なんですか織斑先生」

じつと見つめられて居心地が悪くなった俺が聞くと、

「…しかしまあ、お前達よくやった。よくあの福音を倒したもんだな。そして、ちゃんと皆無事に帰って来た」

そう言つと、千冬姉は俺達から顔をそらした。もしかして照れている。あ、山田先生にやにやしなから千冬姉見てる。葵達も千冬姉の言葉を聞いて嬉しそうな顔をしてるな。特にラウラが。

そして旅館に入ろうとしたら、いきなり玄関が開いた。そこからのほほんさん達が現れて、

「よかつたよー。おりむーたち全員無事だよー」

「みんな鬼退治おめでとう！」

「怪我とかない？大丈夫？」
と俺達に祝福と心配の声を掛けてきた。

「大丈夫よみんな。この通り深刻な怪我してないから」

「それが一番おかしいわよ！」

葵の返事に谷本さんが全力でつつこんだ。…まあそうだよなあ。

「それにしても皆無事で本当によかつた。準備したかいがあつたもの」

鷹月さんがしみじみしながら言った。準備？ってあーそうだったそうだった。

「え、皆準備してくれてたの」

「当然！葵崎さんが謎の復活をしたという情報が入ったからならい

けると思ってたね」

「謎って…まあそうだけど」

シャルの質問に谷本さんが親指立てながら答えた。おお、素晴らしい。

「本当に！すみません山田先生、さっさと検査終わらせましょう」

「是非ともそうして下さいませ山田先生」

鈴とセシリアがさっさと検査を終わらせようとせつつく。

「ラウラ、僕隊も準備しないとね」

「ああ、ようやくメインディッシュの時間だな」

シャルもラウラもこれからの事を考えると笑みを浮かべている。

「…いやみんな、準備とは何だ？何の事を言ってるんだ？」

一人事態についてこれず混乱する箒。そんな箒を見て、

「何って、これから皆で篠ノ乃さんの誕生日会をするわよ」

と笑顔を浮かべながら谷本さんは言った。

「た、誕生日会！私の！」

驚く箒に

「箒、あんた今日誕生日なんですよ。葵に言われるまで知らなかったけど」

「ちょうど臨海学校中でしたから、どうせなら皆でお祝いしようと思っ
思いました」

「皆でプレゼントも買ったぞ。楽しみにするがいい」

「ちなみに誕生会を発案したのはその谷本さん達だよ。クラスで
どうお祝いしようか話したら、皆ノリノリになってね」

「そ〜いうこと。じゃあ箒、福音退治という前座は終わったし本日
のメインイベントを始めるわよ」

鈴、セシリア、ラウラ、シャル、葵が笑みを浮かべながら箒に言
っていく。箒は皆の言葉を聞き、茫然としてたが瞳に涙が溜まって
いく。そして、

「ありがとう、皆」

と半分泣きながら笑顔で言った。

「おいおい泣くなよ。箒、じゃあ中に入ろうぜ！」
俺は箒の手を握り、旅館の中へと入って行った。

臨海学校（二日目 決着）（後書き）

福音戦終了〜〜。

長かったあ。いや本当に長かった。

しかし原作以上に強くしてタコ殴りされた福音。中に乗っていたナターシャさんの運命はいかに（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7555v/>

IS～女の子になった幼馴染

2012年1月14日03時50分発行